栃木県埋蔵文化財調査報告書第22集

長堤遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月

栃木県教育委員会

栃木県埋蔵文化財調査報告書第22集

長堤遺跡発掘調査報告書

昭和53年3月

栃木県教育委員会

序

鬼怒川および那珂川の流域にはさまれて八溝山系西部を南流する小貝川は，五行川とともに古来からその流域の歴史的環境をはぐくみ，多くの遺産を今日に伝えております。

近年，当地域において，県道真岡・西小塙線が建設されることとなりましたが，芳賀郡益子町にかかる工事実施区間に遺跡の所在が確認されましたので，その処置について県土木部と協議を重ねた結果，昭和50年度に発掘調査を実施したところであります。

今回の発掘調査で得られた資料は不十分なものでありますが，各位におかれて御活用いただければ幸いであります。

最後に，発掘調査に際し終始御協力いただいた県土木部および益子町教育委員会の各位に深く感謝いたします。

昭和53年３月

栃木県教育委員会教育長

渡　辺　幹　雄

例　言

1　本書は，県道真岡・西小塙線の建設にともなう「長堤遺跡」の発掘調査報告書である。

2　出土品の整理および遺物実測図作成は石川均があたり，遺物実測図作成は柳川宏があたった。それぞれ橋本順子，菅千代子両氏の協力をえた。遺物写真撮影は，尾島忠信があたった。

3　本書の執筆は，土器表とB区遺構を石川が，その他は柳川があたった。編集は柳川が行なった。

本　文　目　次

序

例言

第１章　発掘調査の概要……５頁

〔１〕　発掘調査にいたる経過……５頁

〔２〕　発掘調査日誌抄……５頁

第２章　遺 跡 の 環 境……８頁

地理的環境……８頁

第３章　遺 構 と 遺 物……11頁

〔１〕　弥生時代の遺構と遺物……11頁

〔２〕　古墳時代・歴史時代の遺構と遺物……16頁

住　居　跡……16頁

第４章　結　　び……51頁

第1章　発掘調査の概要

〔1〕 発掘調査に至る経過

県道真岡・西小塙線の益子町大字長堤（旧田野地区）小字胡畑において，昭和50年度工事施行中，遺構が発見された。6月4日益子町教育委員会より県教育委員会に連絡があり翌日，芳賀土木事務所職員と現地視察を行なった結果，巾20m，長さ200mにわたる工事区域の全面に遺構が露出していた。

現地で協議の結果，とりあえず工事を中止することとし，数回に及ぶ緊急協議が県教委と県土木部でなされた結果，6月20日より発掘調査を実施することで意見の一致をみた。調査に要する費用は，県土木部において予算措置がなされた。発掘調査は梅雨期であったためと，十数年ぶりの異常気象により，調査区域が3度にわたって冠水したため，予定の期日に終了することができず，8日間の延長となった。

〔2〕 発掘調査日誌抄

6月20日　昨日までに全ての発掘調査準備終了。

6月21日　表面の残土片付け。

6月22日　昨日に引き続き表土剝ぎ。

6月23日　A区表土剝ぎ終了。B区にかかる。

6月24日　B区表土剝ぎ及び残土片付け。

6月25日　A・B両区表土剝ぎ及び残土片付終了。

6月26日　A区1号住居跡検出。実測に入る。2号住居跡発掘。

6月27日　2号住居跡実測3号住居跡掘り下げを始める。

6月28日　雨のため作業中止。

6月29日　A区4号～A区6号住居跡掘り下げ開始。

6月30日　A区1～3号住居跡遺物とり上げと写真撮影。

7月1日　雨のため作業中止。

7月2日　昨日にひきつづき雨天中止。

7月3日　A区7～10号住居跡掘り下げ。A区4～6号住居跡実測。

7月4日　A区7～10号住居跡掘り上げる。実測後写真撮影。

7月5日　A区11～14号住居跡掘り下げ。写真撮影，実測。

7月6日　雨天のため中止。

7月7日　前日の雨のため遺跡が水びたしとなり，水のかい出しに1日が終る。

7月8日　B区1～4号住居跡掘り下げ開始，雨後のためはかどらない。

7月9日　B区1～4号住居跡写真撮影後実測。

7月10日　雨天のため作業中止，梅雨期のため，発掘期間の延長を図る。

7月11日　雨天，遺物の整理にあたる。

7月12日　B区5～7号住居跡の掘り下げ。

7月13日　B区8～12号住居跡の掘り下げと，B区5号～7号住居跡の調査終了。

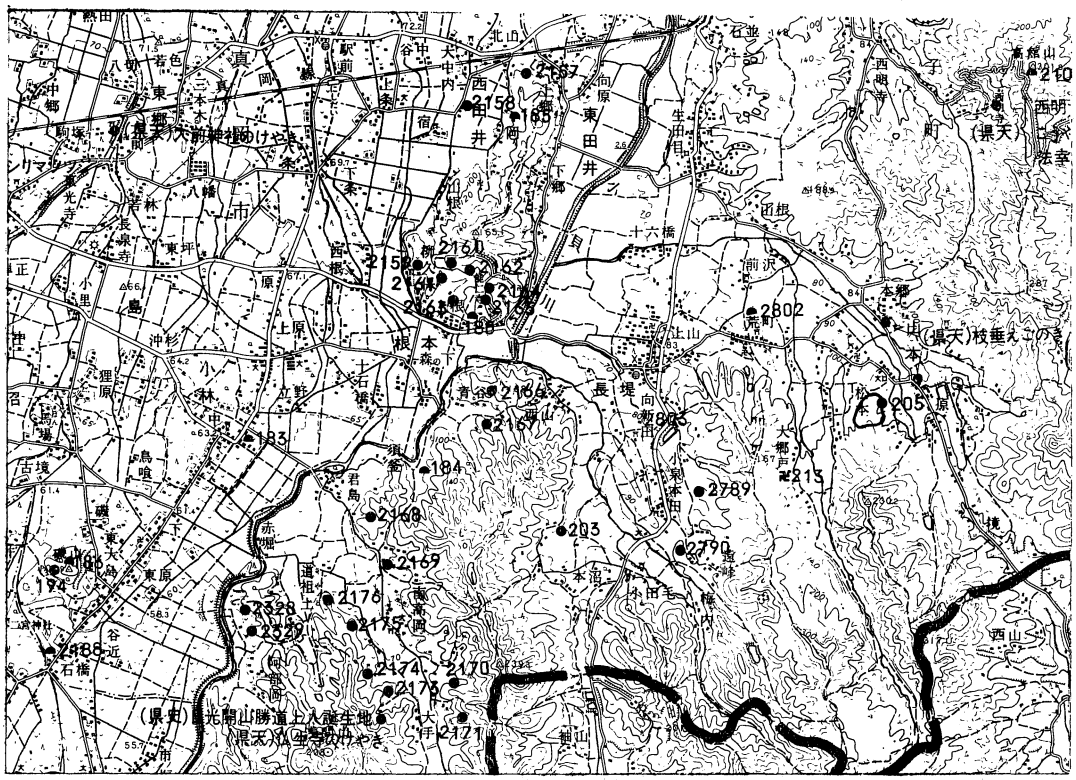
7月14日　雨天のため作業できず，宿舎で遺物整理。

7月15日　B区8号～12号住居跡の掘り上る。遺物の写真撮影と実測。

7月16日　雨天のため作業中止。大桝塚古墳の見学に行く。

7月17日　B区8号～12号住居跡の実測，写真撮影。

7月18日　発掘調査終了。



真　岡　市

180	根本柳久保古墳群		
183	大塚古墳		
185	丘山古墳群		
186	出流古墳群		
194	磯山遺跡	旧石器	
2159	根本柳久保	縄文・弥生	集落跡
2160	根本遺跡	弥生・奈良	〃
2165	能仁寺下遺跡	奈良	〃
2170	青谷遺跡	〃	〃
2175	道祖土遺跡	〃	〃
2176	中里古墳		

益　子　町

203	本沼遺跡	縄文	集落跡
2789	長峰 〃	弥生	〃
2790	遠峰 〃	縄文	〃
2802	狐塚古墳群		
2803	八幡山古墳群		

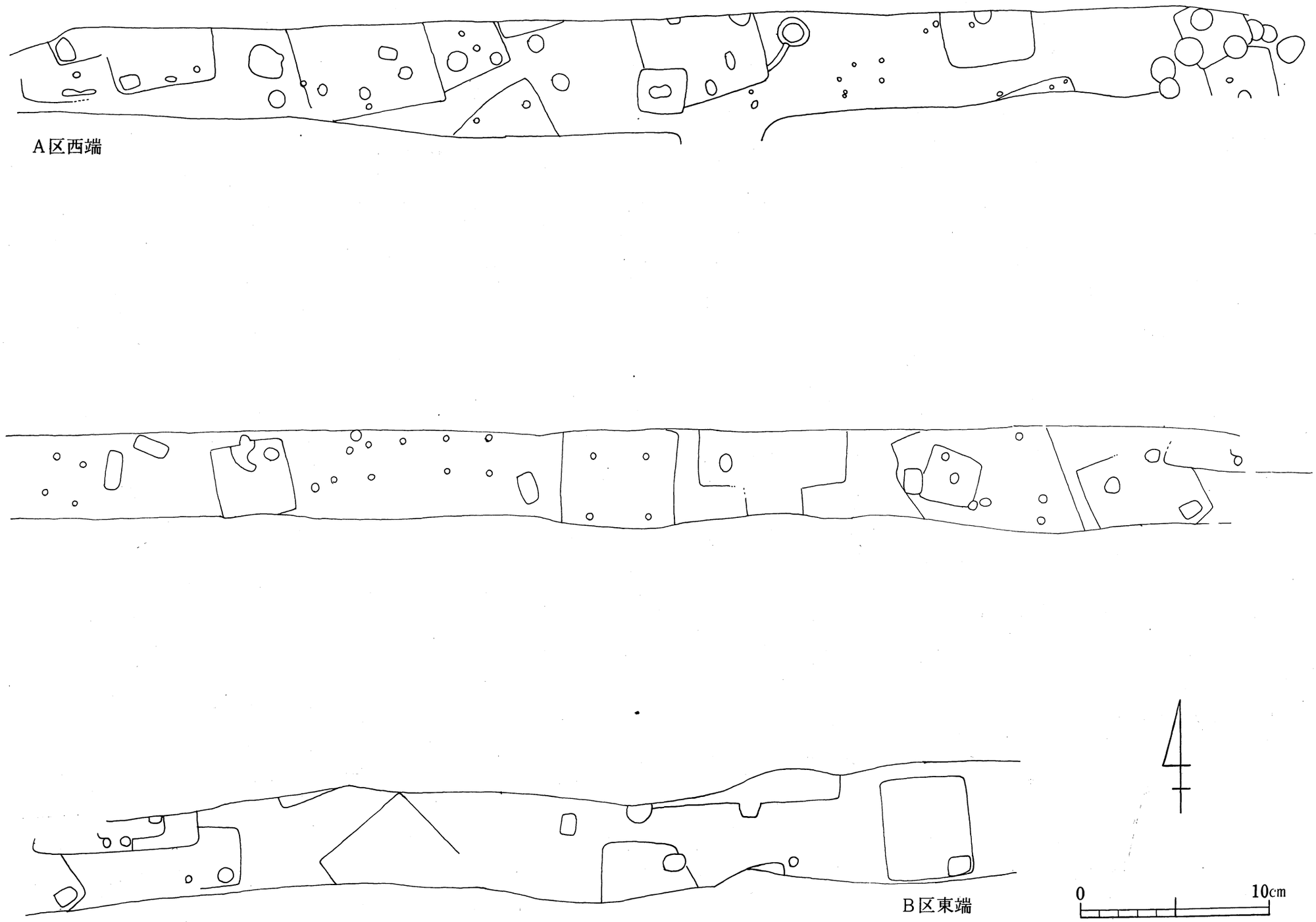
第１図　長堤遺跡の周辺遺跡分布図

第2章　遺跡の環境

〔1〕 地理的環境

県道西小塙・真岡線が狭小であるので新道が計画され，その建設工事中に一部破壊の状態で発見されたため，昭和50年6月から7月にかけて県教育委員会により緊急発掘調査が行われた。遺跡地は益子町の西南隅に位置し，行灯峰裾から北西にのびる舌状の低台地で，沖積面からの比高は約3 m，北側に水田がひろがっている。南北を鏡川，神崎川に挾まれ，両川は遺跡地の西約500 mの小貝川に合流する。小貝川の対岸に根本山があり，中腹の比高20mの地点に柳久保弥生遺跡がある。

発掘調査区域は幅15m，長さ200 mのクロソイド曲線で低台地を東西に横断している。しかし両側が側溝工事でV字状に掘削されてしまったため，発掘の対象となったのは幅4 mで，この部分も表土層は削土されていた。遺跡は弥生時代から奈良時代にわたる集落跡である。住居跡は側溝の断面に確認されたものを含めて50軒以上，土壙は同じく30基以上である。このうち弥生時代の遺構として住居跡三軒，土壙1基を確認した。弥生時代の低地性集落跡として本遺跡が栃木県最初の発掘例である。



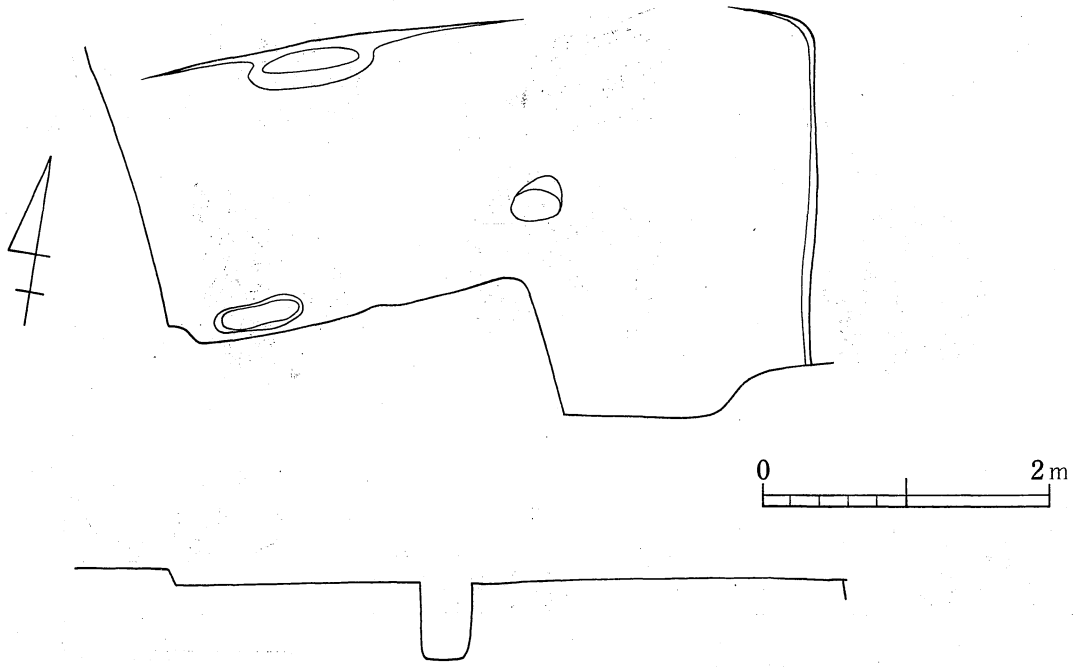
第2図　長堤遺跡遺構配置図

第3章　遺構と遺物

〔1〕 弥生時代の遺構と遺物

1　A区1号住居跡（第3図）

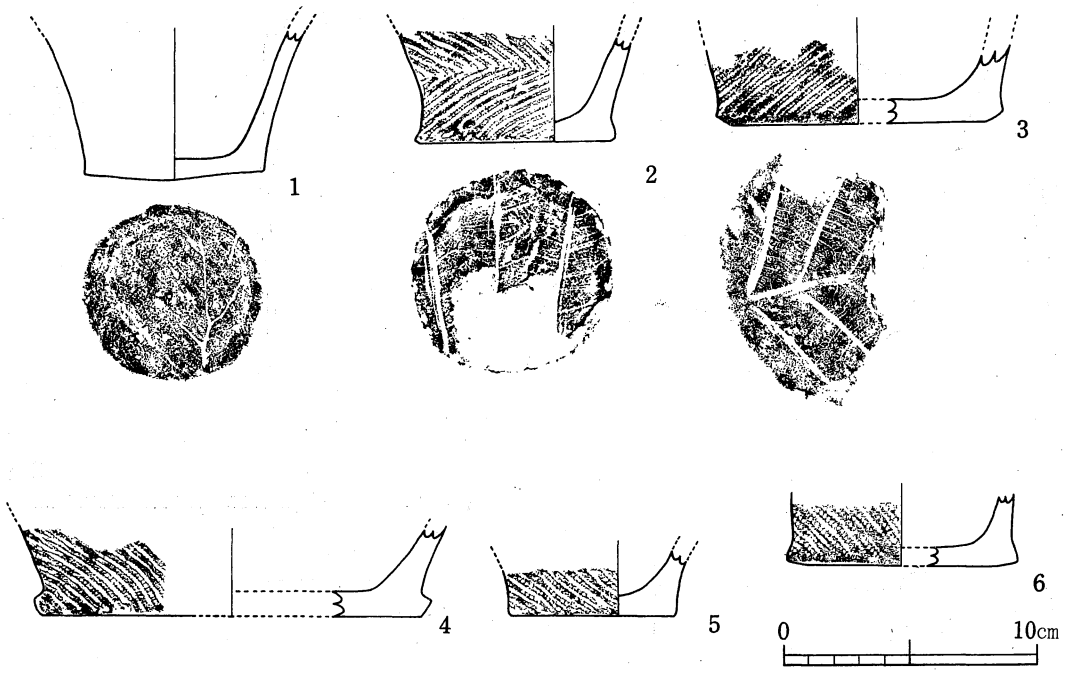
本遺跡の西端に位置する。北にのびる微高地西縁辺にあり，小貝川沖積面からの比高は2.1 m。A区2号住居跡に北側を，A区3号住居跡に東側を切られている。上部は工事により削平されており，遺存度は悪い。壁はローム層を掘削して作られ，壁高は西壁の一部と西南隅で8 cmを残すほかは，2～4 cmである。東西軸長は推定4.6 m，南壁はわずかに胴張りがみられる。床面はローム面を踏かためて堅緻であるが，西壁付近では脆弱である。2個の柱穴を検出した。西南隅に近い柱穴は口径35cmの不整円形で，床面からの深さは54cmである。他の1個は口径63cmのいちじるしい長円形で，下半は2穴に分れる。西側の穴を主柱穴とする副柱式と推定される。



第3図　A区1号住居跡実測図

A区１号住居跡出土遺物（第４図）

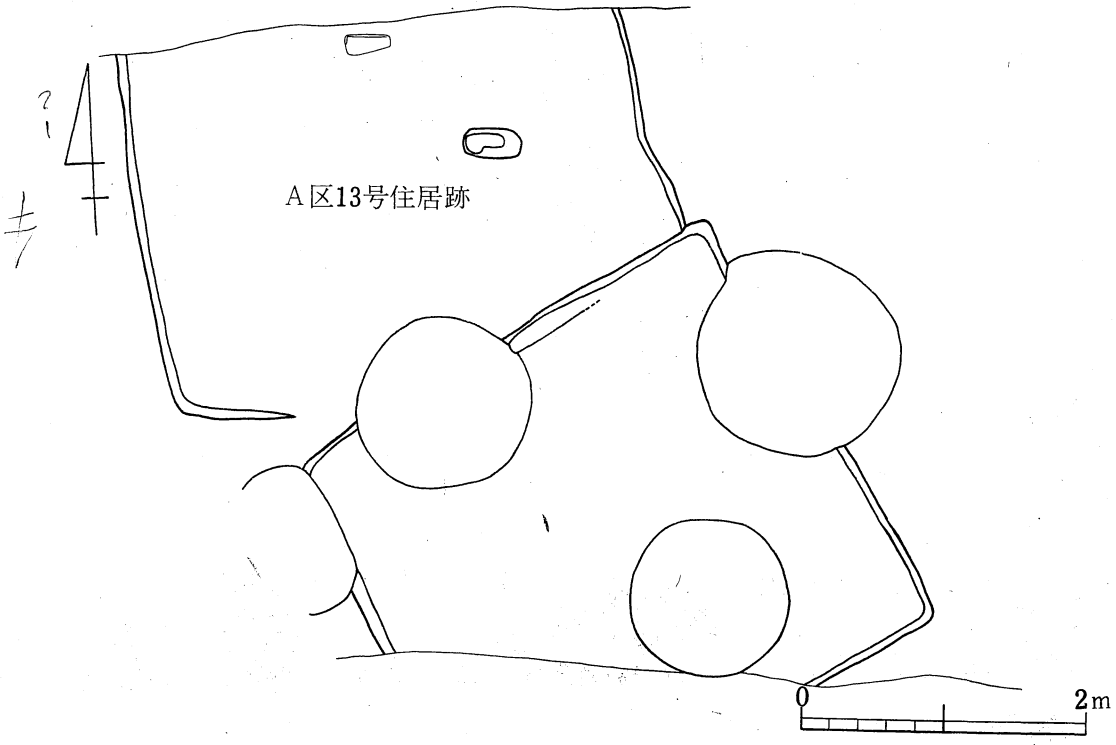
遺物は弥生時代後期の土器片７片である。覆土が２～４㎝，一部で10㎝と少ないため，遺物の検出面は床（１～３）または住居廃絶後まもない混入品と推定される床直上（４～６）である。



第４図　A区１号住居跡出土遺物実測図

2　A区13号住居跡（第５図・第６図）

北西隅から北壁中央にかけてA区14号住居跡およびA区10号土壙に切られ，南側は側溝工事のため掘削されている。壁はローム層を掘り込んで作られ，壁高４～10㎝，東西軸長は3.7ｍである。東西壁とも直線的で東北隅の丸味はとぼしい。床面は炉の周辺においては緊緻であるが，A区１号住居跡にくらべ，全体に脆弱である。柱穴は１個検出した。口径40㎝の長円形で底面は瓢箪形を呈し，東側の穴を主柱穴とする副柱式と推定される。炉は直径78㎝の楕円形で，床面を深さ12㎝の受皿状に掘りくぼめ，枕石（玄武岩の自然石）を設置している。火床は焼成固化されており木炭および灰を検出した。

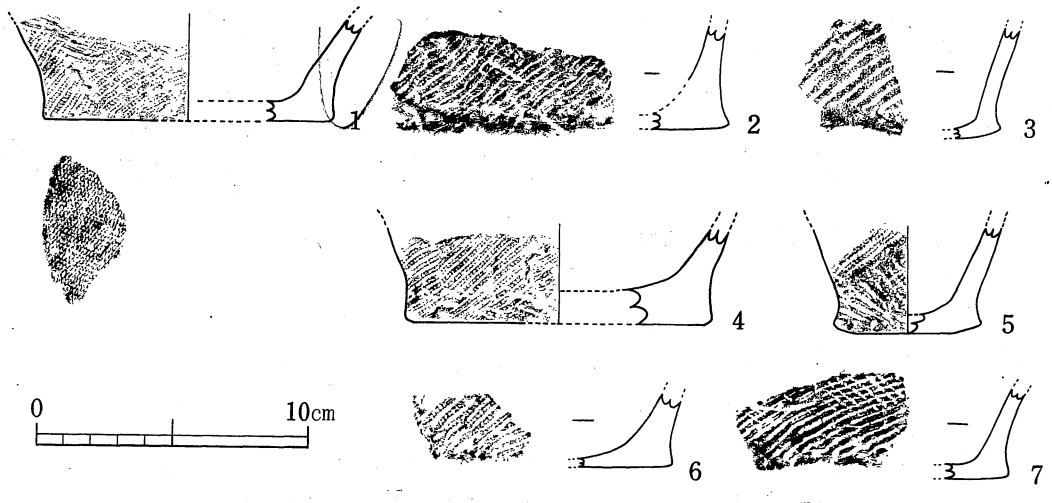


第５図　A区13号住居跡実測図

A区13号出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法　量	器形の特徴	整形の特徴	胎　土	色　調	備　考
1	盤	14.0 ― 3.9	丸底から緩やかに立ち上り口縁部となる。全体的に厚めにできている。	全体的に器面が荒れて良く判らないが，回転台でナデられている。	やや粗い砂粒を含む。	赤褐色	

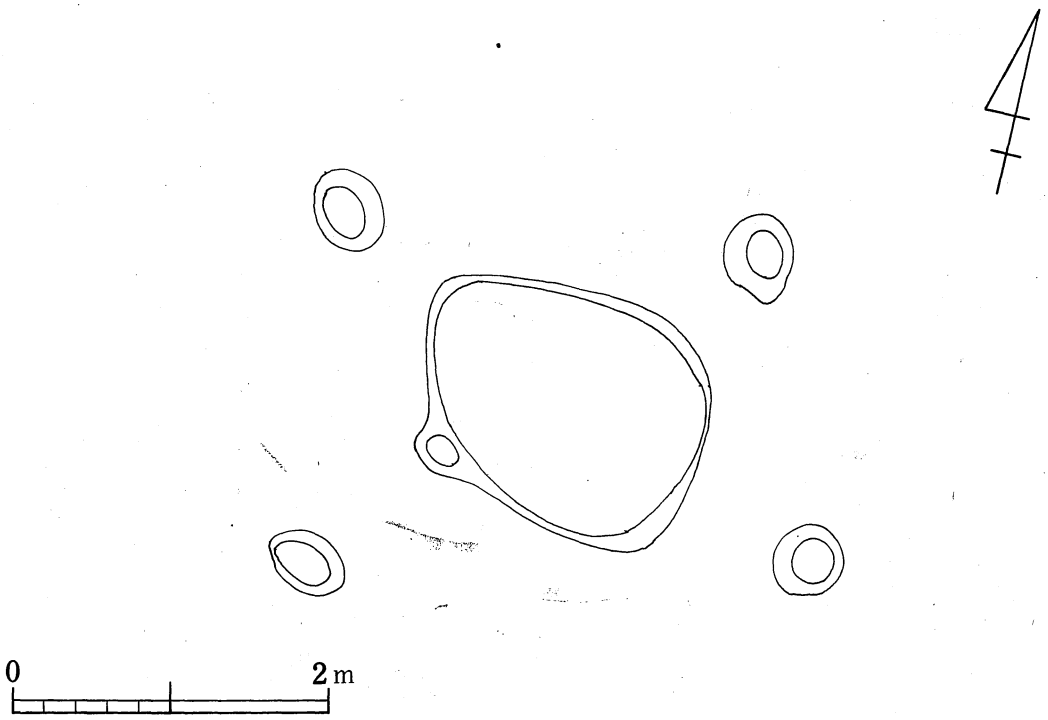
2	甕	14.6 28.4 33.2	平底の底部から緩やかに球状の体部を持ち，口縁部は直立した後外反する。	口縁部内面は横方向のヘラミガキを，外面はナデを行い，体部は内外共に横方向のヘラミガキを施している。	微砂粒を含む。	黒褐色一部黒色	床面近い覆土より出土
3	甕	18.7推定 —— ——	外反する口縁部である。	内面は横方向のヘラミガキ，外面は縦方向のヘラミガキを施している。	微砂粒を含む。	赤褐色	覆土より出土
4	甕	15.7推定 —— ——	外反する口縁部である。	内外面共に横方向にナデを施している。	微砂粒を多量含む。	茶褐色	覆土より出土
5	椀	12.8推定 13.8推定 ——	球形の体部を持ち，口縁部は直立し内側に稜を持つ。	口縁部は内外共に横方向のナデを施し，体部は内外共に横方向のヘラ削りを施している。	微砂粒を含む。	茶褐色	カマドより出土
6	椀	14.4推定 16.6推定 ——	球形の体部を持ち，口縁部はわづかに外反する。	口縁部は内外共に横方向にナデを行い，体部はヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒が少々微砂粒を含む。	赤褐色	覆土より出土
7	坏	13.6 —— 5.7	丸底の底部よりゆるやかにふくらみを持ち口縁部がわづかに内反する。	内面口縁部は横方向のヘラミガキ，底，体部は横方向のヘラ削りの後，方射状のヘラミガキを行い，一部口縁部に達する。外面口縁部は横方向のヘラミガキを行い，底部はヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒が少々，微砂粒を含む。	茶褐色	覆土より出土



第6図　A区13号住居跡出土遺物実測図

3　A区1号土壙跡

表土層下20㎝，ローム層で検出されており，確認面で東西1.4ｍ，南北1.2ｍ，底面で東西0.6ｍ，南北0.5ｍを計り，やや東西に長い円形プランである。土壙は鋭角的に約1.2㎝ほど底面にまで掘り込まれており，底面はフラットである。遺物は覆土中より土師器破片少量を得たのみである。土壙の構築時期であるが，プラン，掘り方，覆土の状態，遺物の出土からみて弥生時代の所産と考えられる。



第7図　A区1号土壙実測図

〔2〕 古墳時代・歴史時代の遺構と遺物

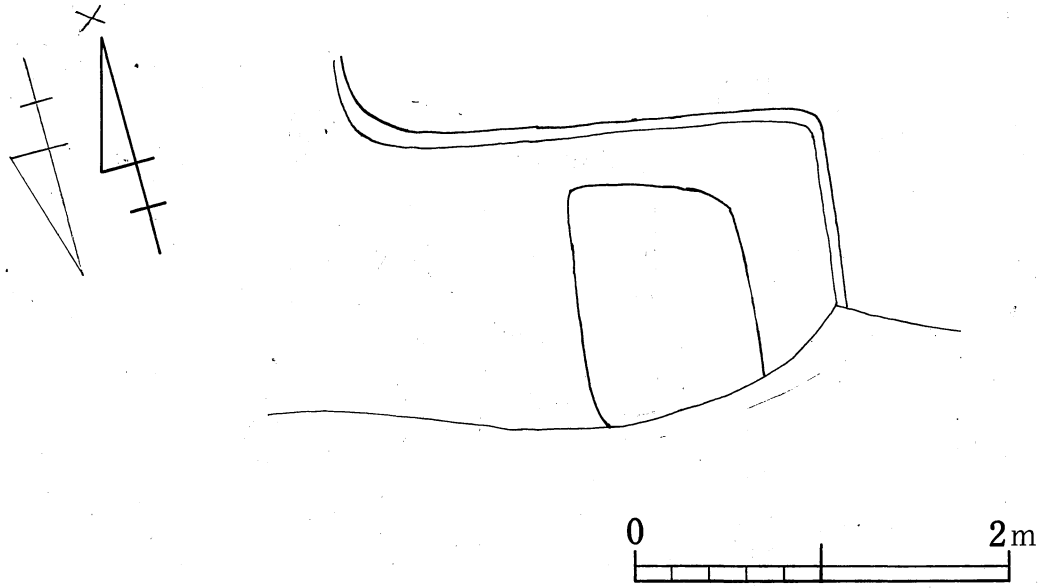
1 住 居 跡

(1) A区2号住居跡（第8図・第9図）

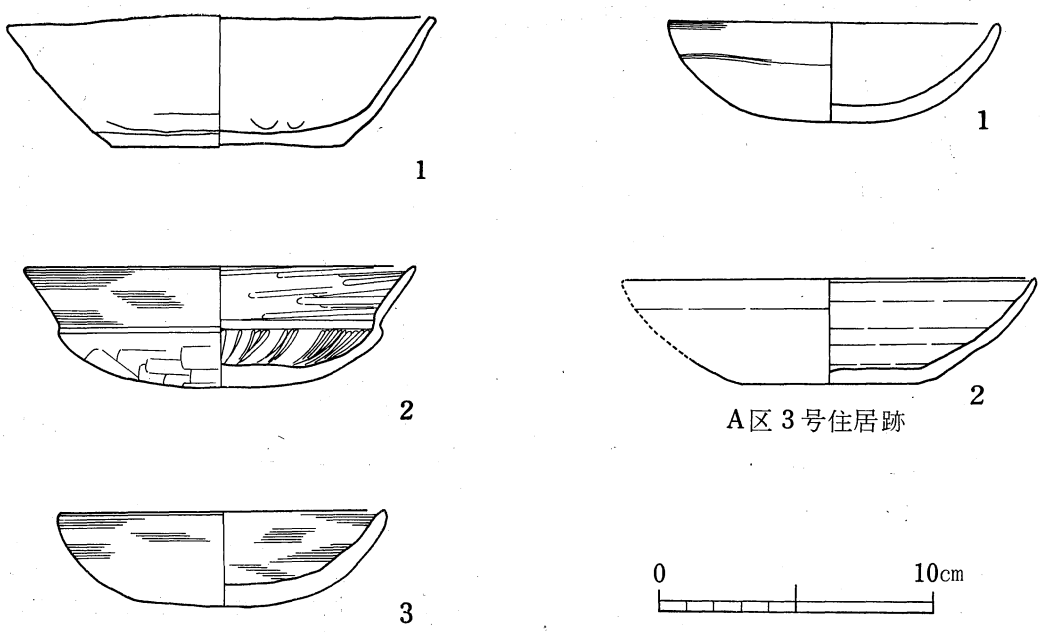
A区1号住居跡およびA区3号住居跡を切って構築されている。平面形は西南部4分の1を検出したのみで，遺存度は悪い。住居はローム層を掘り込んで構築され，わずかに残る西壁および南壁は直線的で，立ちあがりは垂直に近く西南隅の丸味は少ない。壁の現在高は西壁で15㎝，南壁は9㎝である。床面は北側削土部分に近く踏み固めが認められるが，全体的に脆弱である。柱穴は西南隅に近く口径35㎝，深さ54㎝の楕円形のもの（P）が検出された。西南隅に南北1.1m，東西1.5mの不整方形の土壙が検出されたが，掘り込みは粗雑で底面に平坦部はみられない。充塡土の層序は本住居に付設されたものであることを示すが，貯蔵穴とはみなしがたく，性格不明である。

A区2号住居跡出土遺物

覆土が15㎝～7㎝しかないため，出土遺物はすべて覆土最下層に含まれる。1は北壁下（第9図No.1）床直上から検出された。3は床上6㎝浮いた状態で出土した。2は本住居跡が削平された際の取りこぼしの土の中から得たものである。その他の遺物はすべて土師器の細片で，実測に価するものはなかった。



第8図 A区2号住居跡実測図



A区2号住居跡

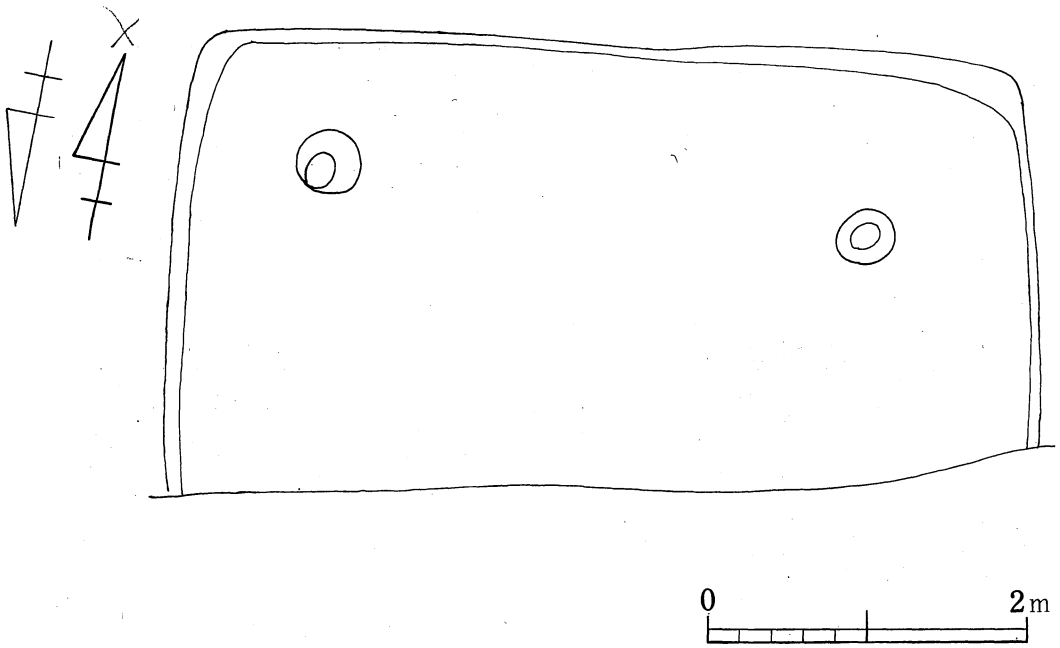
第9図　A区2号住居跡・A区3号住居跡出土遺物実測図

(2)　A区3号住居跡（第10図・第9図）

A区1号住居跡を切りA区2号住居跡に切られている。削土により北半を失う。住居はローム層を掘り込んで構築され，各壁は直線的で立ち上りは垂直に近く，隅の丸味は少ない。平面形は東壁および南壁が北に向って緩やかに開いて台形を呈し，南壁長は5.10*m*である。壁の現在高は東壁で16*cm*，西壁で13*cm*である。壁下には深さ4～8*cm*の周溝がめぐり，東壁下および西壁下は底面の凹凸がはげしく，浅く不明瞭な窪みの連続として捉えられるが，南壁下では幅15*cm*，深さ8*cm*のやや整った直線的なU字溝となる。柱穴は P_1 および P_2 とも近似し，40*cm*前後の口径を持ち深さ55*cm*である。床面はハードローム直上に作られ，踏み固め部はやや高く各隅に向って若干低くなっている。柱間の住居中央部はいちじるしく緊緻で光沢を有する。

A区3号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	坏	12.1 ― 3.6	丸底からゆるやかに立ち上り皿状を呈しているが皿よりやや深い。	内面は全面的にナデを行っている。外面口縁部にもナデを施している。	微砂粒を含む	黄褐色	西壁際出土
2	坏	15.2 ― 3.8	平底からゆるやかに立ち上り口縁部となる。薄い均一な器厚である	内外共にロクロの走行痕があり，底部は糸切りである。	ほとんど砂粒を含まず密な土	淡茶色	西壁際出土



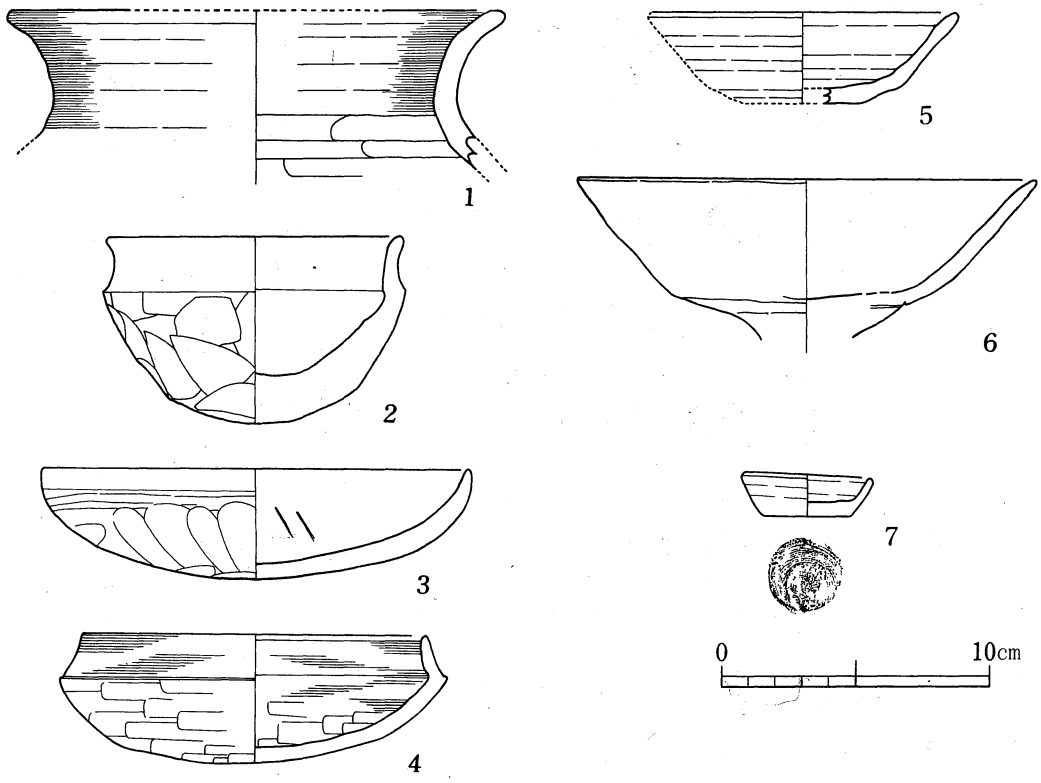
第10図　A区３号住居跡実測図

(3)　A区４号住居跡

A区５号住居跡に切られ，北側を側溝工事により掘削されている。住居平面形は東南部を残すのみで遺存度は悪い。住居はローム層を掘り込んで構築され，壁の現在高は平均18㎝，東南隅を中心に崩壊が進んでいるが，各壁は直線的で隅は直角に曲る。床面はハードローム削平面をそのまま踏み固めているが，わずかな窪みにローム土を埋め戻した痕跡が認められる。P_1の西側で一部緊緻であるほかは，全体に脆弱である。柱穴は４本検出した。P_1は口径30㎝の円形で深さ43㎝，底面は小さく径10㎝，P_2は口径32㎝の円形で深さ52㎝である。P_3およびP_4は壁下に穿たれ，口径20㎝前後の円形で深さ16㎝と近似し，いずれも内傾気味である。東南隅部にピットが２個ある。隅近くのものは口径65㎝の円形で深さ22㎝，もう一つは口径98㎝，中央部に深さ26㎝の小ピットを持つ。柱材転用の掘り抜き穴の崩壊が進んだものである可能性もあるが，遺存平面形からは斉合性に乏しく，性格不明である。

A区４号住居跡出土遺物

本住居跡の遺存度がきわめて悪かったため20点程の土器片が得られたにすぎず，細片ばかりで実測に値するものは１点もなかった。細部の特徴から見ると真間期頃までの破片で明らかにそれ以降の所産とみられるものはない。すべて廃絶後の混入品であろうが，上記土器片の様相は，ある程度本住居跡の経営時期を知るための参考とはなろう。



第11図　A区5号住居跡出土遺物実測図

(4)　A区5号住居跡（第11図・第12図）

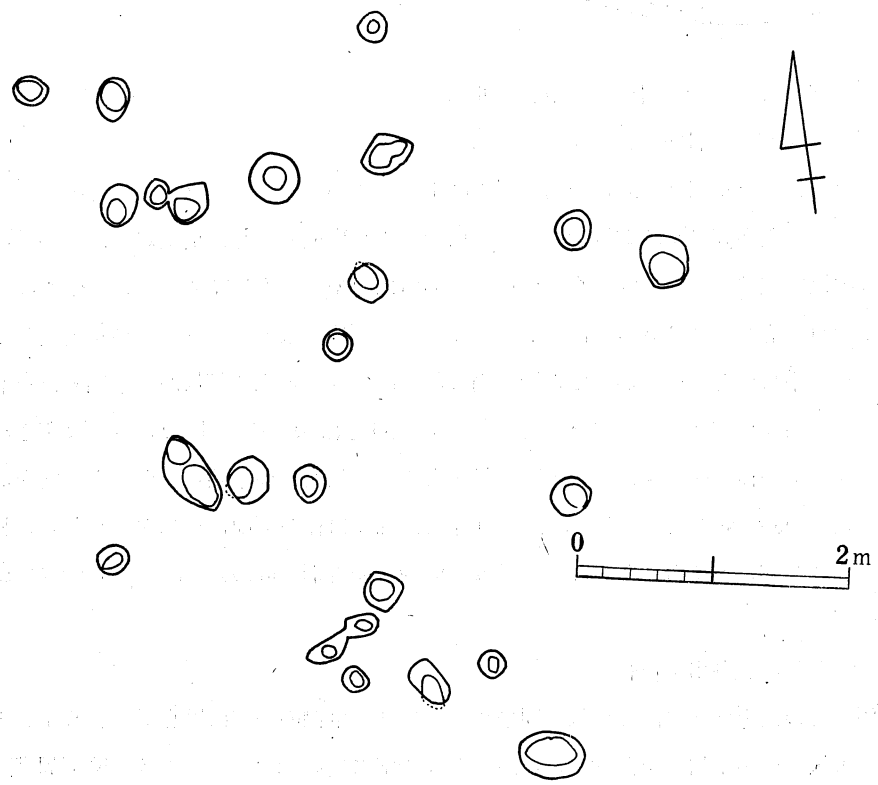
A区4号住居跡を切り，北側と西南隅を削土されている。住居はローム層を掘り込んで作られ，壁の現在高は平均20cmである。東南隅および南壁の一部に崩壊が進んでいるほかは，各壁は直線的で立ち上りは垂直に近い。周溝は南壁下のみに認められた。幅20cm，深さ7cmのU字溝で，東に向って溝底が低く傾斜する。床面はハードローム層を削平して作られ，住居中央部から西にかけての踏み固め部分は，ローム土を何層かつき固めた重層的な構築である。柱穴は5本検出された。P_1およびP_2は深さ125～126cm，P_3は深さ73cmで，いずれも底径24～26cmにくらべて口径が大きく，周囲につき固め部分はみられなかった。P_5は西壁に穿たれているが，P_1～P_3と同様に口径の周囲に崩れがみられ，柱材転用の掘り抜き跡と考えられる。P_6は97cm×60cmの長方形で貯蔵穴様を呈し，深さ24cmで底面は平坦である。

A区5号住居跡出土遺物

本住居跡の覆土は西に向って低く削平されており，東側の一部は壁高26cmを残す。出土遺物は覆土の中～下層の土器片が多いが，2は西壁に近い床面より，6は南壁下周溝際より出土したもので，本住居跡の遺留土器と考えられる。

A区5号住居跡出土土器表

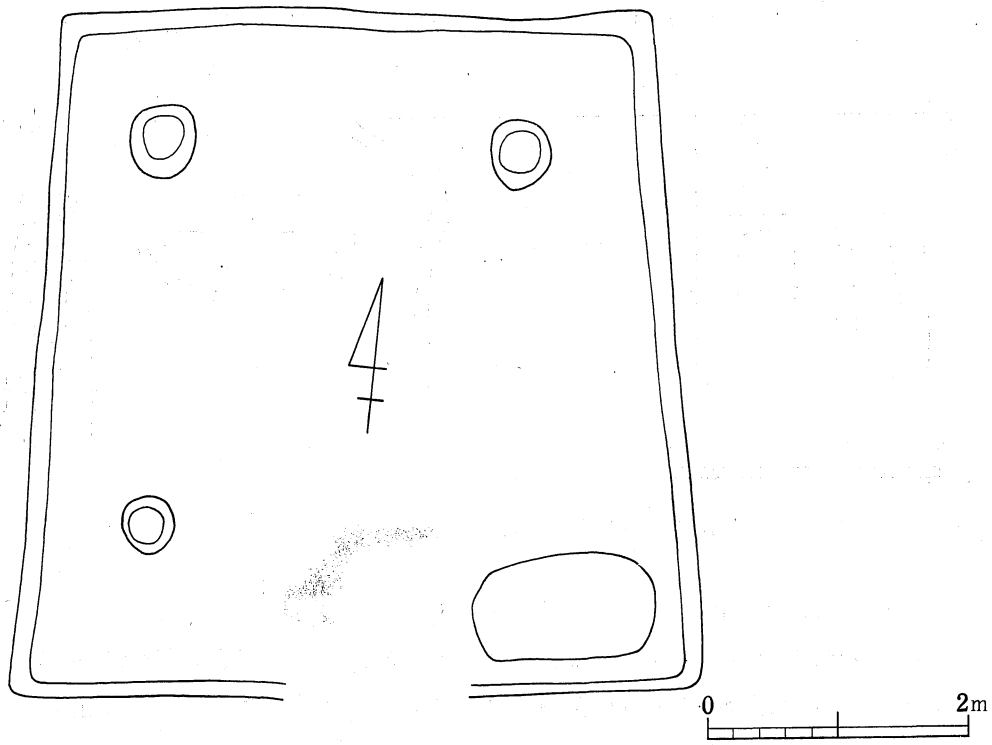
遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	18.7推定 —— ——	大きく「く」の字に外反する口縁である。	内外共に横方向にナデを行い，内面下半からは横方向のヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒と微砂粒を含む。	黒褐色	覆土より出土
2	椀	11.1 11.4 7.0	丸底からやや急に立ち上り稜をもち口縁部はわずかに外反する。	口縁部は内外共に横方向のナデを行い，体，底部の内面はナデ，外面はヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を含む。	赤褐色，一部黒色	床面出土
3	盤	16.1 —— 4.1	丸底からゆるやかに立ち上り口縁部となる。	口縁部は内外共に横方向のナデを行い，体底部は内外共にヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を少々と微砂粒を含む。	黒色，一部濃褐色	
4	坏	12.9 14.5 4.8	丸底からゆるやかに立ち上り稜をもち口縁部は内反する。	口縁部は内外共に横方向にナデを施し体，底部は内外共に横方向にヘラ削りを施している	微砂粒をわずかに含む	黒色	
5	坏	11.6 —— 3.4	平底からゆるやかに立ち上り口縁部はわずかに外反する。	内外共にロクロの走行痕がある。	やや粗い砂粒と微砂粒を含む。	茶褐色	覆土より出土
6	高坏	17.3 —— ——	口縁部は逆「ハ」の字に開き稜をもつ。	口縁上部は内外共に横方向にナデを行い，外面中位より下部に縦方向のヘラミガキが見られる。	微砂粒を含む。	茶褐色	南壁際出土
7	手づくね土器	5.0 —— 2.7	平底の厚い底部をもち，比較的立ち上がりはきつい。	ロクロにより整形され底部は糸切りで切り離されている。	微砂粒を含む。	淡茶色	



第12図　A区5号住居跡実測図

(5)　A区６号住居跡（第13図）

A区４号住居跡の西に近接し，西南隅を残すのみでほとんど破壊され尽している。壁の現在高は12㎝，南壁は直線的で壁の立ち上りは垂直に近い。床面はハードローム直上面まで掘り込んだ後，暗褐色土を含むソフトローム土を埋め戻して構築されており，脆弱である。出土遺物は覆土中より土師式土器の細片２点を得たのみで，経営時期は不明である。



第13図　A区６号住居跡実測図

(6)　A区７号住居跡（第15図）

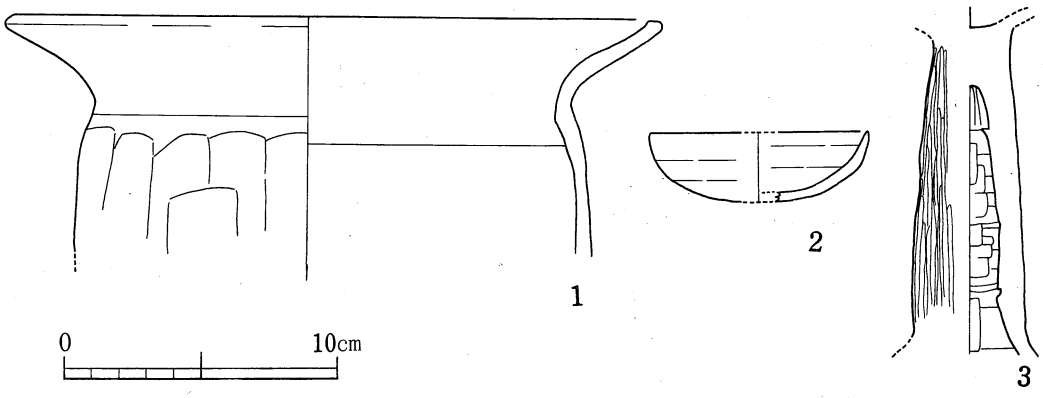
A区４号住居跡およびA区６号住居跡の南に近接し，東北隅を残すのみでA区６号住居跡と同様に遺存度はきわめて悪い。壁の現在高は平均８㎝で隅は直角に曲る。床面はソフトローム面を削平して構築されており，P_1の南側に，暗褐色土をわずかに混えるソフトローム土を埋め戻したつき固め部が見られ，緊緻である。柱穴は東北隅に口径51㎝，深さ72㎝の主柱が１本検出された。

A区７号住居跡出土遺物

調査開始時に床面の一部がすでに露出している状態であり，出土遺物はすべて覆土下層～床直上である。１は床面よりの出土で，２および３はいずれも４～５㎝浮いた状態で出土した。

A区７号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	24.1 —— ——	口縁部の口唇が大きく均一な厚さで「く」の字に外反し胴はわずかに張る。	口縁部は内外共に横方向にナデを行い，体部は内外共にヘラ削りを施している。	粗い砂粒を多量に含む	茶褐色	
2	坏	8.1 —— 3.5推定	丸底でゆるやかに立ち上り口縁部となる。器厚は一定である。	ロクロによる走行痕が内外共にある。	微砂粒をわずかに含む	濃灰色	須恵器 覆土より出土
3	高坏	—— —— ——	細く長い脚である。	内面をヘラでえぐり取り外面はこまかいヘラミガキを施している。	微砂粒を含む。	赤褐色	



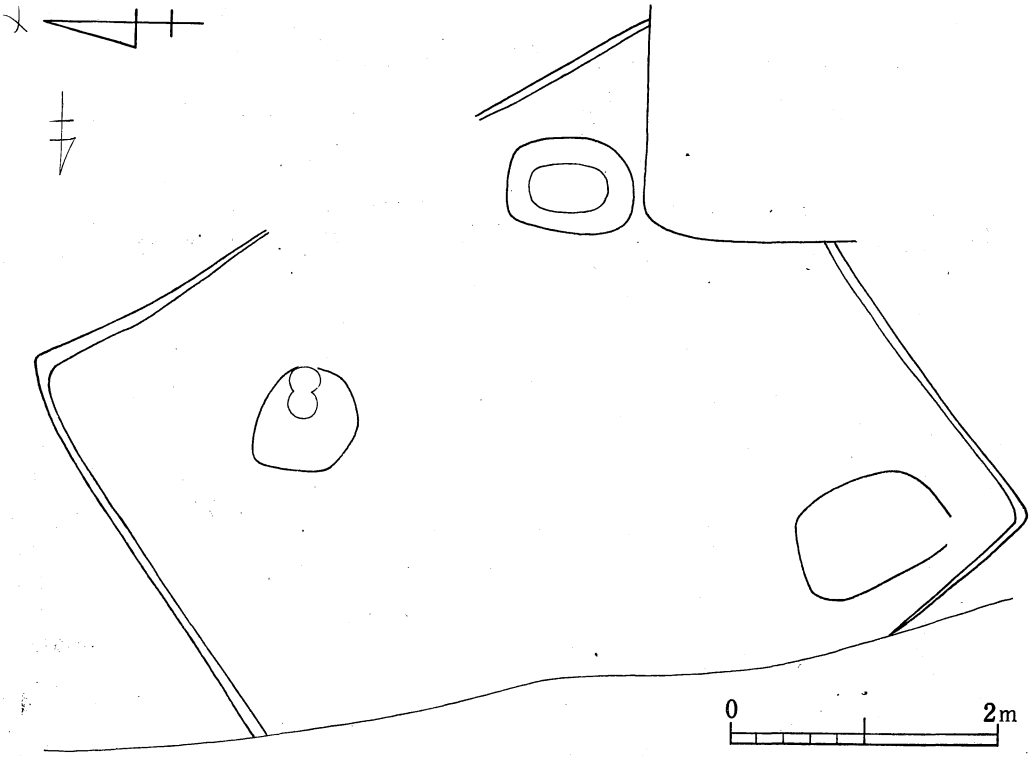
第15図　A区７号住居跡出土遺物実測図

(7)　A区８号住居跡（第16図・第17図）

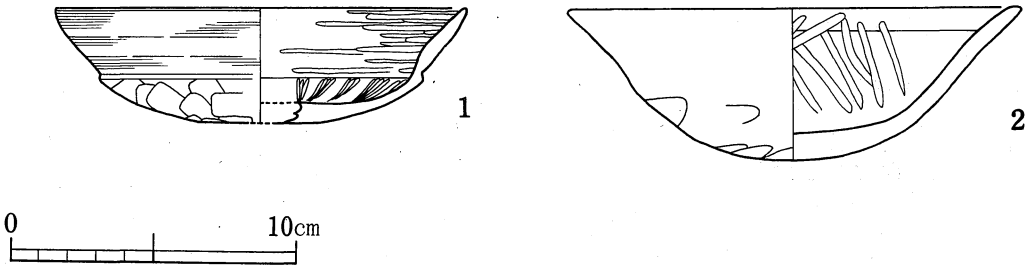
A区６号住居跡およびA区７号住居跡の東４ｍに位置し，A区１号特殊遺構に西南隅を切られている。東南隅は悪水溜の導水路により溝状に切られており，住居北半は削土により失なわれ，さらに性格不明の土壙２基に切られている。住居はローム層を掘り込んで構築され，東西軸長6.25ｍ，壁の現在高は東壁で25㎝，南壁で16㎝，西壁で26㎝である。各壁は直線的で立ち上りは垂直に近く，東南隅は直角に曲る。周溝は幅10～16㎝で壁下に全周する。深さは最深部14㎝，最浅部４㎝で底面の凹凸が大きく，全体的に浅めのU字溝である。柱穴は南壁中央部に１本検出した。出入口に関連すると思われる口径50㎝の円形で，深さは16㎝と浅い。主柱穴は精査にもかかわらず検出されなかった。東南隅において床面埋戻し土を排除した際，深さ10㎝の不整円形の粗い掘り込みがみられたが，東南隅の埋戻しが厚さ３～10㎝であるので，柱穴と断定することはできなかった。

A区８号住居跡出土遺物

弥生式土器片６点を含む100点程で，大部分は覆土中～下層に位置する。床面出土の１を除いて，住居廃絶後に混入したものである。２は西壁下中央の周溝上に８㎝浮いて出土した。



第16図　A区８号住居跡実測図

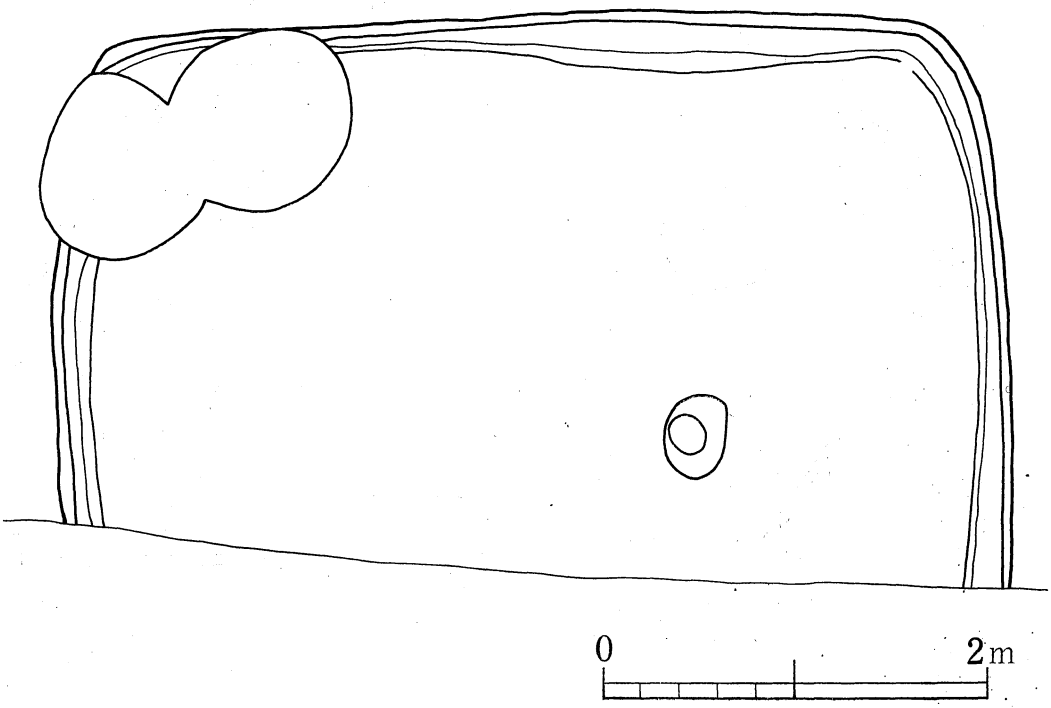


第17図　A区８号住居跡出土遺物実測図

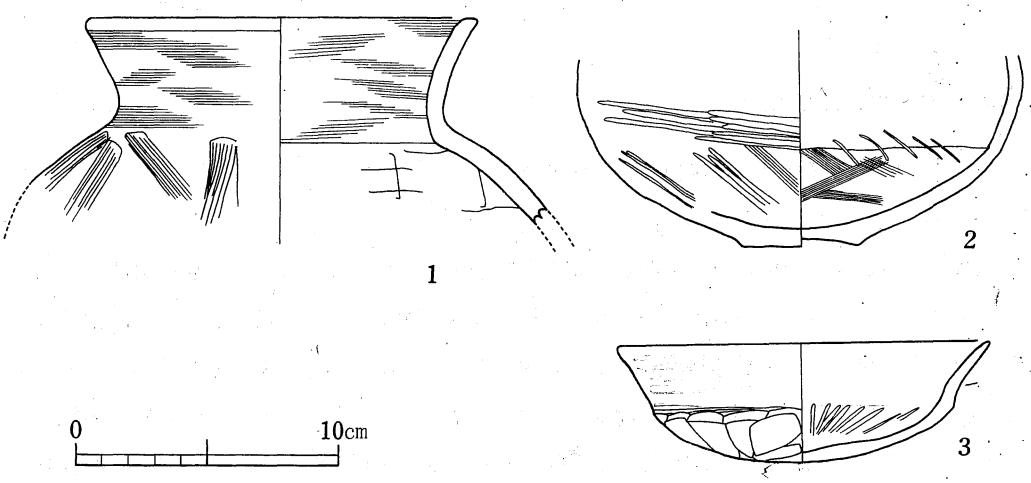
(8)　A区10号住居跡（第18図・第19図）

A区10号住居跡の東10mに位置し，北半分を削土により失なう。また住居中央部を苧穴により切られている。住居はハードローム層を10～15cm掘り込んで構築され，東西軸長4.95m，壁の現在高は東壁で16cm，南壁で26cm，西壁で19cmである。壁の遺存状態は良く，全体的に垂直に近い。周溝は幅18cm前後，深さ８cm前後である。ハードローム層を掘り込んでいるため溝底は凹凸が激しく，東南隅に向って溝底が低く傾斜し，西南隅と12cmのレベル差を持つ。柱穴は１本検出された。床面はハードローム面に構築されているにも拘ず

やや脆弱な床であった。床の構築はハードローム荒掘後，2～6㎝の厚さで暗褐色土を敷いて水平構築している。所々に荒掘り凸部のハードロームが床面に顔を出している。隅付近の床はきわめて脆弱で，黒色土主体のロームブロックを埋め戻している。



第18図　A区10号住居跡実測図



第19図　A区10号住居跡出土遺物実測図

(9)　A区11号住居跡（第20図・第21図）

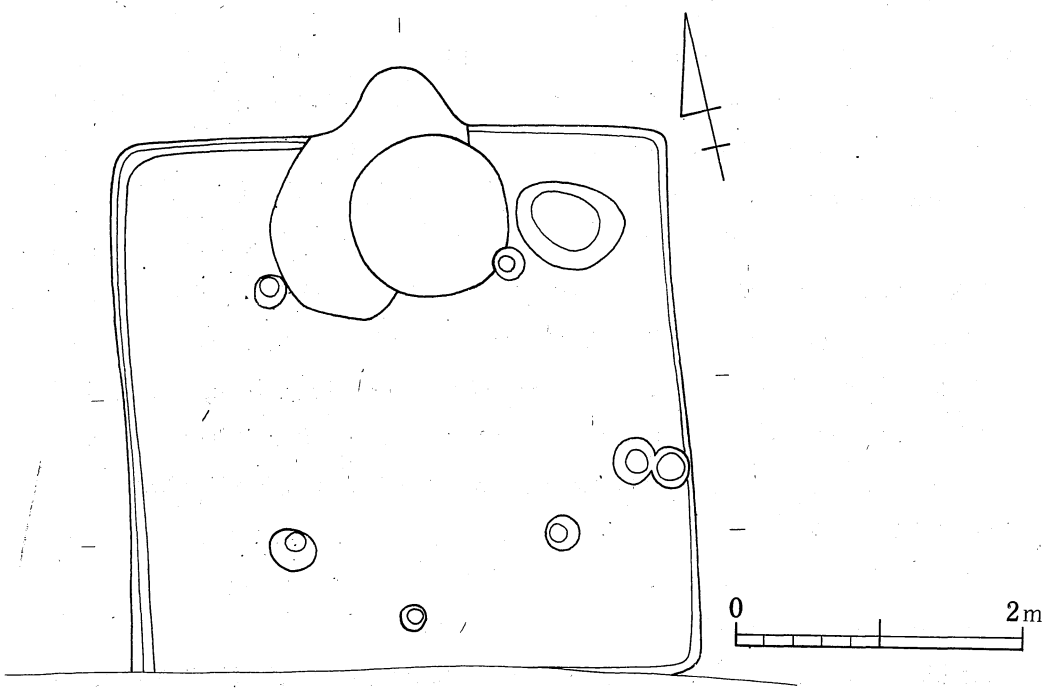
北側半分を工事により削平されている。残った平面形もローム面に達する削土を受けたため遺存状態はきわめて悪い。露出面から数cmで床面に達したところもあり，平面形の確認のため，掘り方の面を追求した。主柱穴は3穴検出された。1穴は直径65cm，他の2穴は60cm程の長円形である。深さは3穴とも67～68cmで，均整な掘り込みを持つ。柱穴配列は，住居跡の対角線上に位置し，柱間寸法は2.80mで，炉辺面積は7.84m²である。壁は直線的で，隅はかなり丸味を持つ。床面は軟弱で，調査に際し，平面形を追求するため，一部床下まで掘り下げた。

A区11号住居跡出土遺物

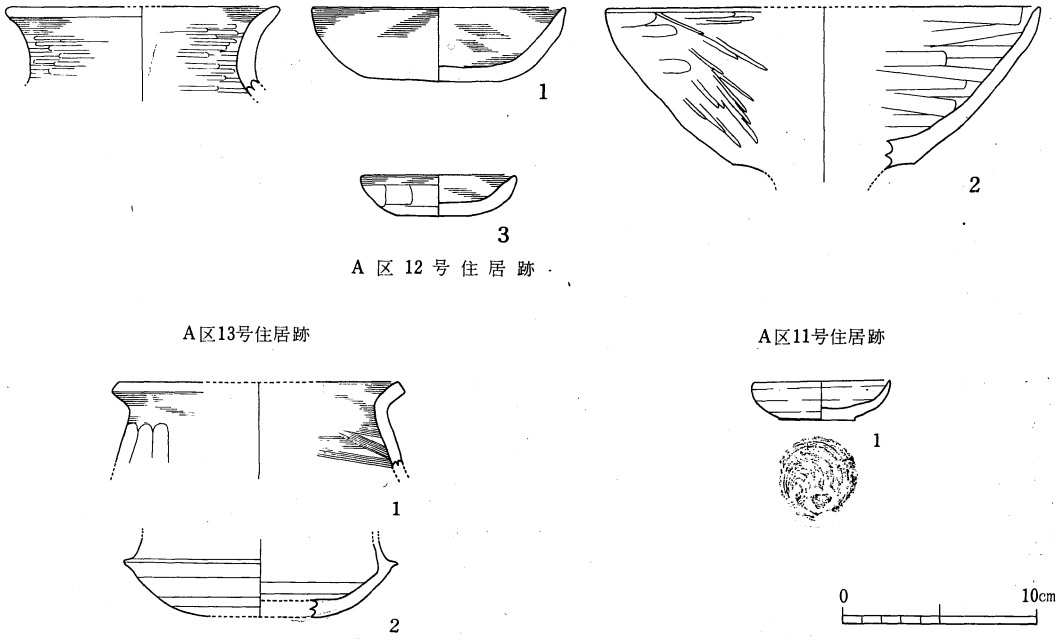
ほとんどが床直上であるが，実測に価しない細片が多かった。床面より2～3cm浮いた状態であるので，この住居跡に伴うものではなく，廃絶後まもない混入品と考えられる。

A区11号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	坏	7.2 ――― 2.1	平底からゆるやかに立ち上り口縁部となり小形で浅い。	ロクロにより整形され底部は糸切りで切り離されている。	微砂粒を含む。	茶褐色	床面出土



第20図　A区11号住居跡実測図



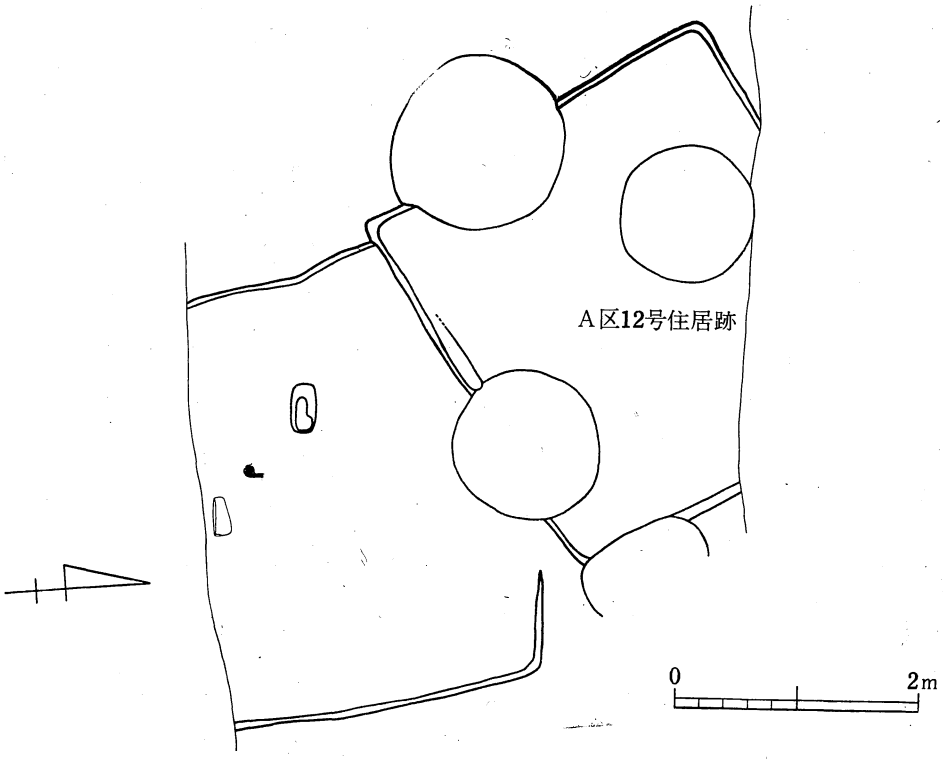
第21図　A区11号住居跡　A区12号住居跡
A区13号住居跡出土遺物実測図

(10)　A区12号住居跡（第22図・第21図）

本遺跡の中では比較的良い遺存状態を示す。南側は工事により削平されているが，他の3辺は検出された。長軸6.25m×6.30m程で，壁は直線的で隅の丸味は少ない。掘り込みは垂直に近く，壁高の平均は45cmである。周溝は北・東・西壁において確認された。巾15cm×深さ12cmの規模で，溝底は比較的広い。柱穴は4本確認され，北側の2穴は直径62cm～65cm，深さ87cmであり，底面積は狭小である。南側の2穴は直径50cm，深さ85cm程で，北側の2穴に較べて直径が小さい。柱間配列は住居跡各隅の対角線上にあり，柱間寸法は3.10m，炉辺面積は9.61m²である。床面は全面にわたり堅緻で，良く踏みかためられている。北東隅に貯蔵穴が検出された。長径70cm，短径65cmの長円形を呈し，底面は方形を呈する。竈は東側の大半を後世の円形土壙に破壊されており，基底部・西側の裾の一部しか検出されなかった。構築材は砂性白色粘土で，遺存状態は風化作用と後世の破壊によりきわめて悪い。

A区12号住居跡出土遺物

竈裾部より坏，長カメ等の資料を得た。床面・貯蔵穴内からの遺物は検出されなかった。覆土中から多量の土器片を得たが，いずれも廃絶後の混入品であろう。



第22図　A区12号住居跡実測図

(11)　A区14号住居跡

平面形の遺存は北面部のみである。北西隅はやや丸味をもち，北壁・西壁とも直線的である。壁高はわずかで12～3㎝しか残っていない。床面は中央部の一部に堅緻な所がみられるが，周辺部を含めて既して軟弱である。北西部に70㎝×60㎝，深さ40㎝の楕円形の貯蔵穴様の土壙を検出した。北壁東端付近に粘土塊，焼土塊の散乱（工事による）がみられるが，竈東裾部と推定される浅い掘り込み，および基底構築材の黄褐色の砂性粘土層を検出した。床面とほぼ同レベルに火床を持つ竈跡と推定した。

A区14号出土遺物

出土土器破片数21片で，一部において床面に達する攪乱を受けたため，経営時期を同定する資料に乏しいが，竈東裾基部に密着して01，02，03を得た。

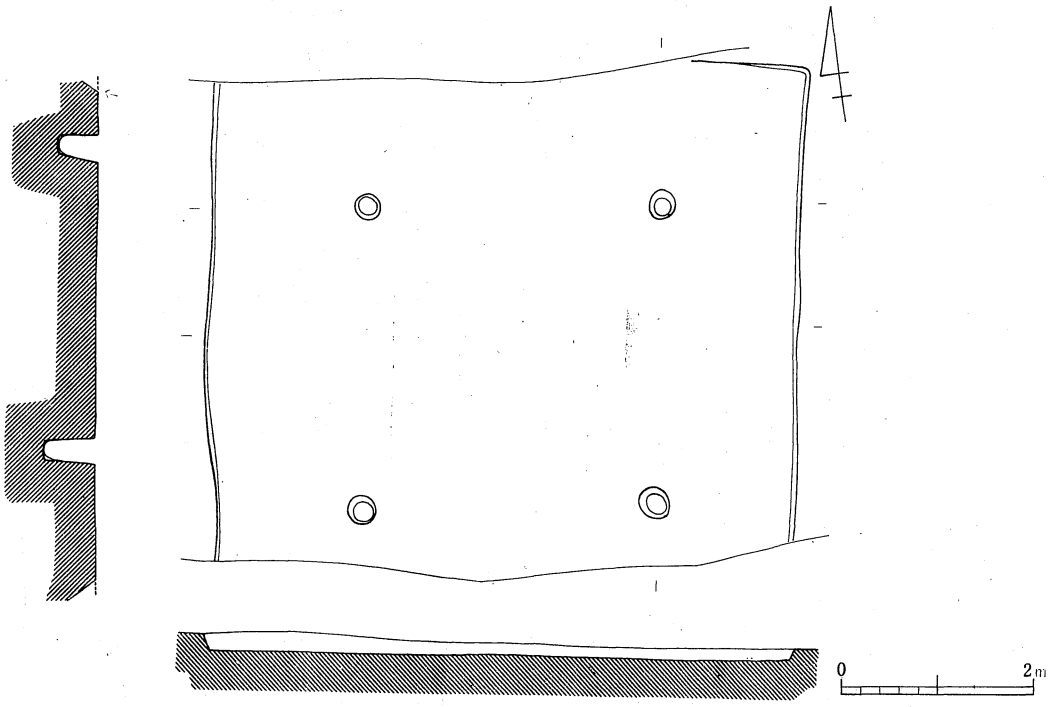
(12)　B区1号住居跡（第23図）

A区とB区の境界とした生活道の東に位置する。平面形は工事により南・北壁を失ない，また壁高の多くをも失なう。西北隅は丸味が弱く，東・西壁も直線的である。壁高は20㎝～3㎝で，東西巾は5ｍ90㎝～6ｍである。床面は軟弱であるが，炉辺では一部堅緻である。柱穴は対角線様に4本ある。柱間寸法は3ｍ～3ｍ15㎝におさまり，炉辺面積は

約9.20㎡である。以上の柱穴配列から平面形は，一辺の壁長5.85mの正方形と推定する。

B区1号住居跡出土遺物

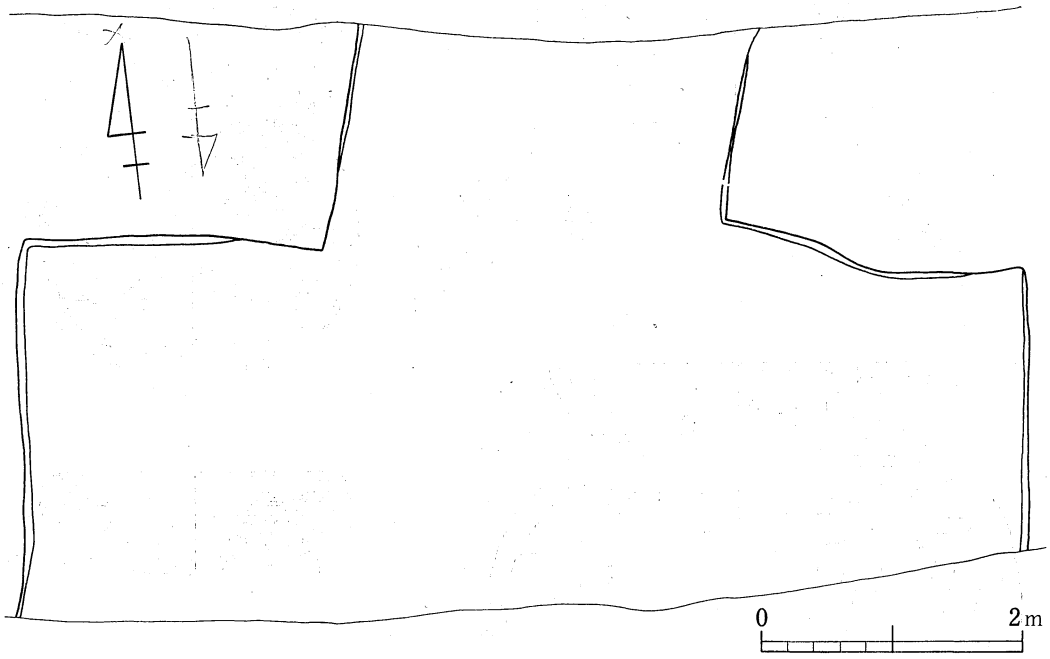
覆土平均約12cmで，44片の土器細片が出土した。器形の特徴を図示するに価するものはなく，1形式の卓越性もみられない。遺物の全ては住居廃絶後の混入品とみられよう。



第23図　B区1号住居跡実測図

(13)　B区2号住居跡（第24図・第25図・第26図）

4号住居の東隣に位置し5号B住居跡，5号C住居跡・4号住居跡と重複している。新旧関係は，5号D住居跡の上に5号B住居跡が床を作っていることから5号D住居跡が古い。4号住居跡は5号D住居跡の上に床を作っているので新しい。5号C住居跡との関係は5号B住居跡がその後に作られた為不明である。プランは工事により北側を大きく失っているので南東コーナー及び南西コーナー，南壁を検出したにすぎない。南壁の長さは5.3mを測る。壁の現在高は南壁で54cm，東壁15cm，西壁15cmである。東西の壁は5号B住居跡，4号住居跡にそれぞれ切られている。床は比較的平坦であるが踏み固めは見られない。周溝は認められない。柱穴は南東コーナーに直径50cm深さ35cmの大きめなものが一本検出された。竈は発見されなかった。

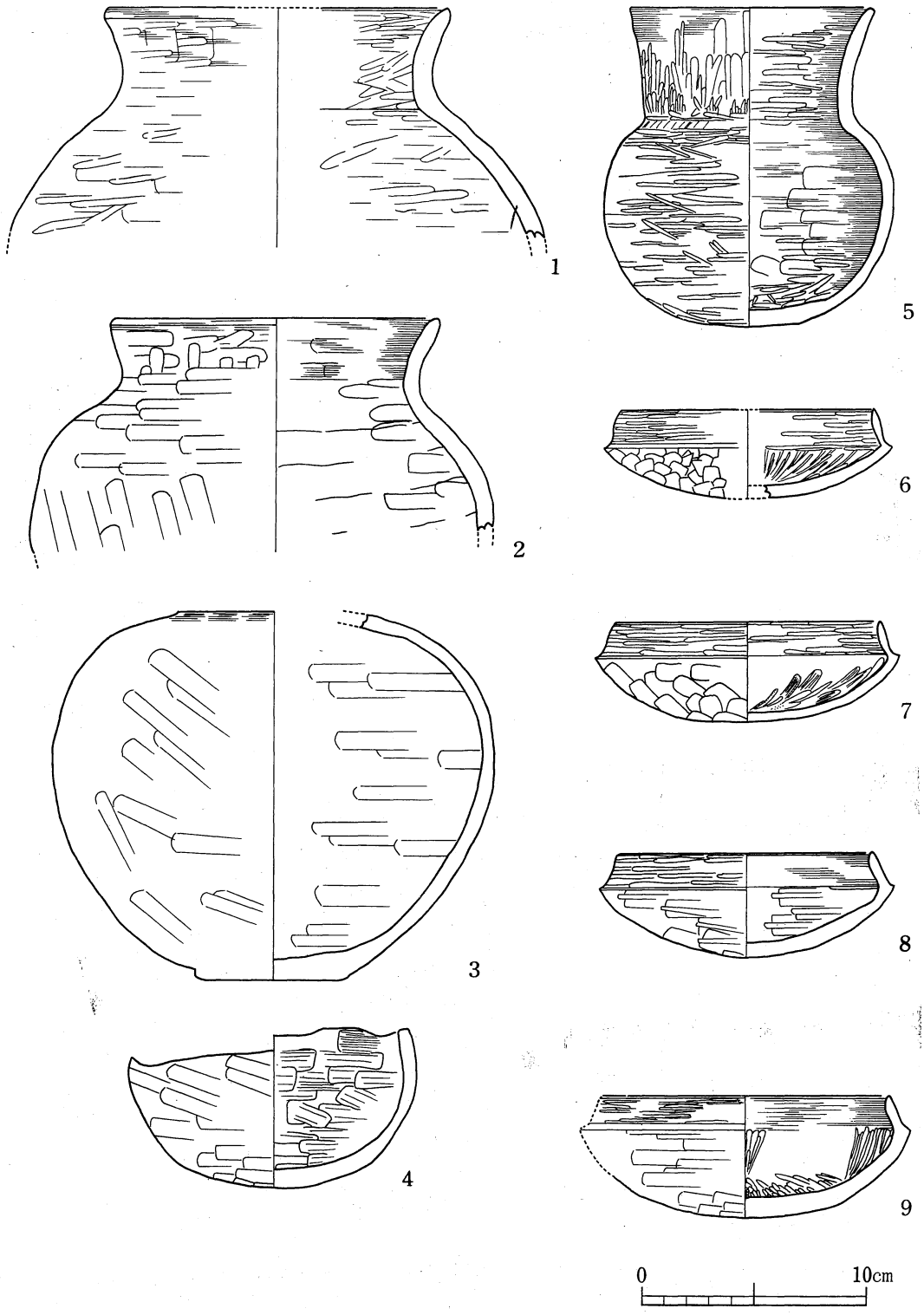


第24図　B区２号住居跡実測図

B区２号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	14.7 —— ——	口縁部が「く」の字状に外反し球形の胴部を持つ。	内面口縁部，横方向のヘラ削りの後ナデている。体部も横方向のヘラ削り。外面口縁部，縦横のヘラ削りの後上部をナデ，くびれから体部の上半は横方向のヘラ削り，その下部は縦方向のヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒が少量含む。	茶褐色一部黒色	内面に紐積みの痕がある。
2	甕	74.4推定 —— ——	口縁部がやや「く」の字状に外反し，球形の胴部を持つ。	内面口縁部細かい横方向のヘラミガキ，体部やや細かい横方向のヘラミガキ，外面口縁部横方向のナデの後ミガキを行い，体部もヘラ削りの後，一部ミガキを施している。	微砂粒が少量含む密な土	淡褐色	焼成良好内面紐積み痕
3	甕	—— 19.6 ——	球形の胴部を持つ。	内外共にヘラ削りを非常にていねいに平らに行なっている。	やや粗い砂粒を多量に含む，金雲母混入	暗褐色	外面に多量のススが付着
4	椀	—— 12.7 ——	球体を呈し丸底である。	内外共にヘラ削りを施し外面はやや細かいヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を少量含む。	淡褐色，内面赤褐色	一部ススが付着

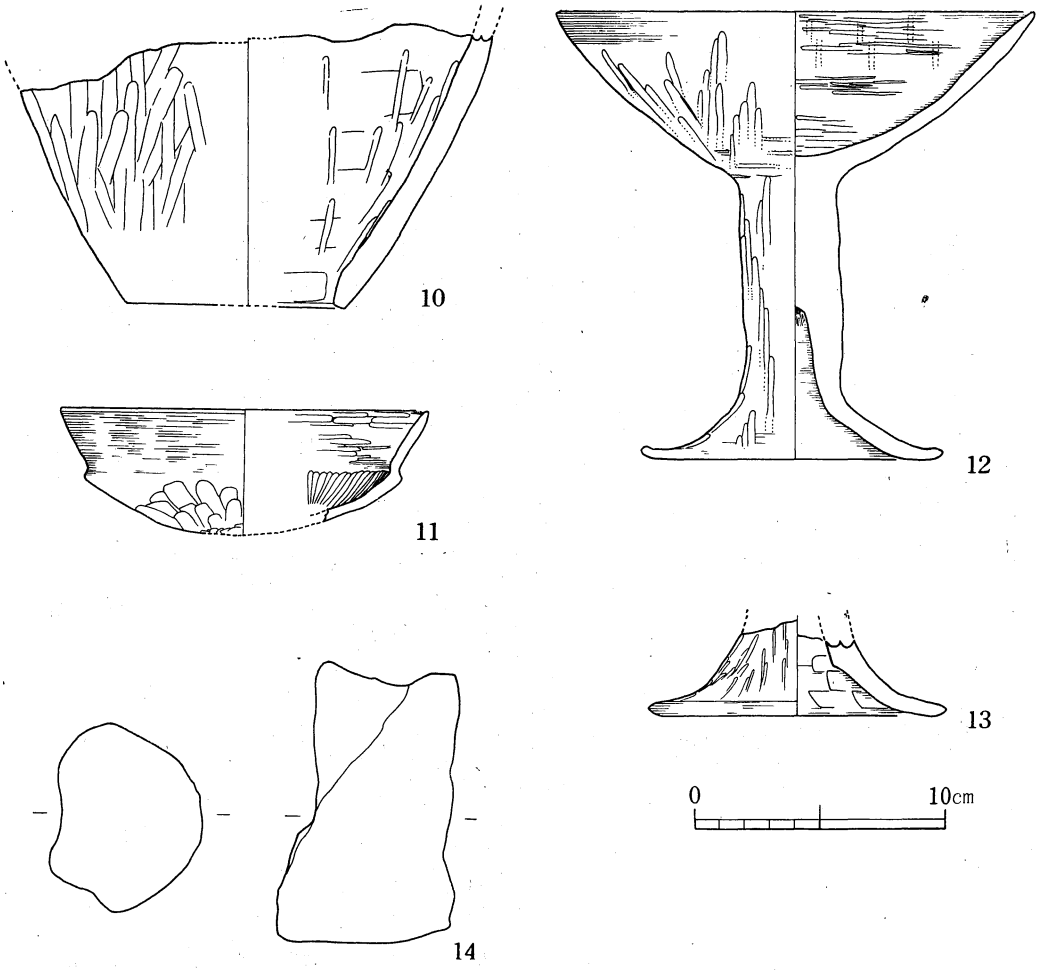
（以下31頁へ）



第25図　B区２号住居跡出土遺物実測図

（29頁からの続き）

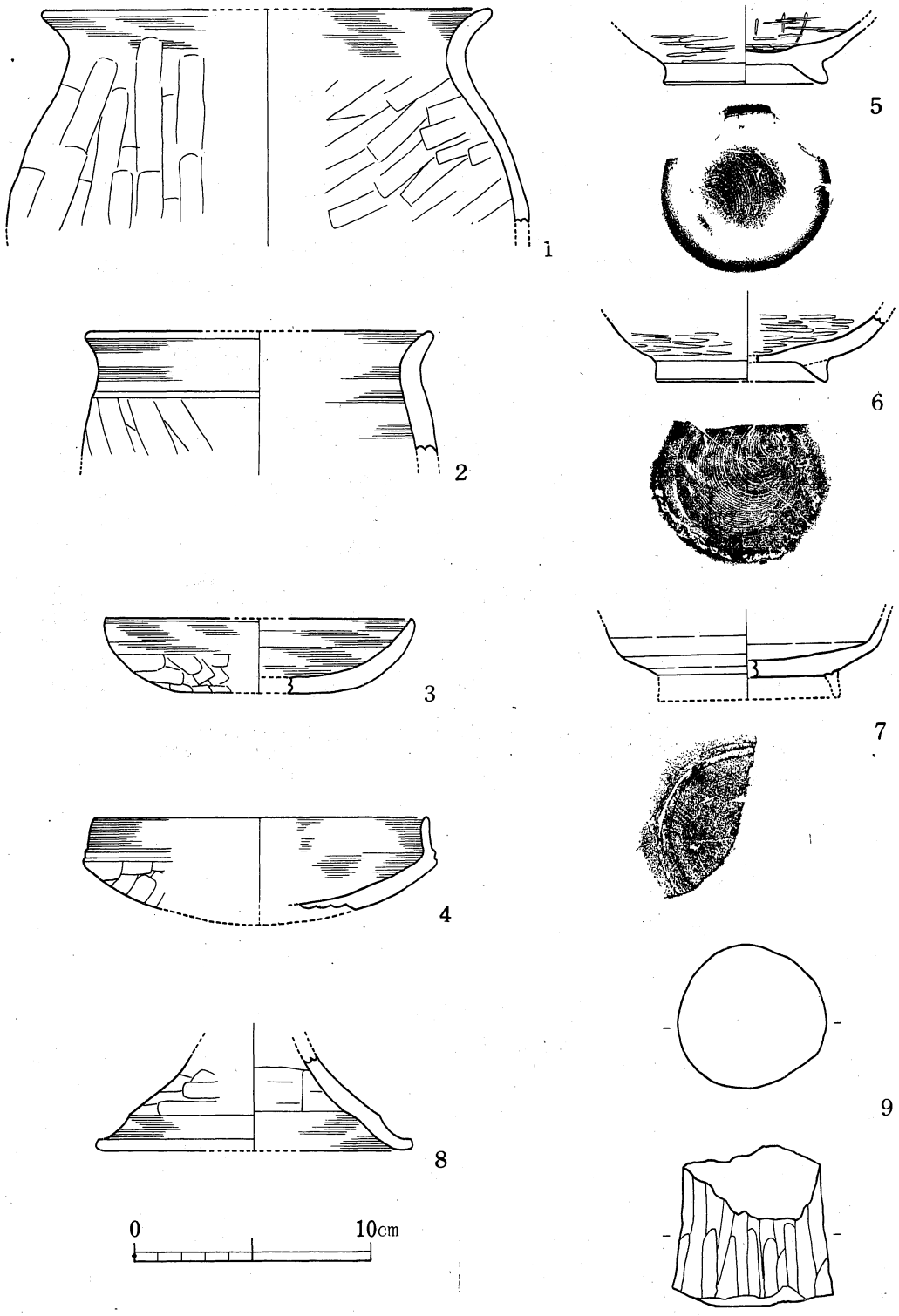
5	坩	10.9 12.9 14.2	頸部がやや外反し胴部は球体を呈する。	頸部を横方向に細かくミガキを，底部には不定方向の細かいヘラミガキを施している。外面頸部，横方向にナデを行い後に縦方向にミガキを施している。底部は横方向のミガキが施されている。	やや粗い砂粒を少量含む。	暗褐色一部黒色	底部にススス付着
6	坏	11.3 —— 3.9推定	口縁部が内反し稜をもつ。	内面口縁部横方向のヘラミガキを体部，底部は底部を中心に方射状のヘラミガキを行い，外面口縁部は横方向のヘラミガキを体部は横方向のヘラ削りを施している。	微砂粒を均一に含み密な土	黒色	焼成良好
7	坏	11.8 —— 4.4	口縁部が内反し稜をもつ。	内面口縁部横方向のヘラミガキを行い，底部はうづまき状のヘラミガキを行い，外面口縁部は横方向のヘラミガキを底部は横方向のヘラ削りを施している。	砂粒ほとんど含まず密な土	褐色	焼成良好一部カマイブレ
8	坏	11.4 —— 4.6	口縁部が内反し稜をもつ。	内面口縁部横方向のナデを施し底部はヘラ削りの後一部ヘラミガキを行い，外面口縁部横方向のヘラミガキを行い底部はヘラ削りの後一部ヘラミガキを施している。	砂粒はほとんど含まず密な土	黒色一部黒褐色	焼成良好カマイブレしている。
9	坏	12.7推定 —— 5.4	丸底で口縁部が内反し稜をもつ。	内面口縁部，横方向のナデを行い体部から底部にうづまき状に細かいヘラミガキを施し底部は横方向に細かいヘラミガキを施している。外面口縁部，横方向のナデを施し体，底部は横方向のヘラ削りを施している。	砂粒をほとんど含まず密な土	淡黒色	焼成良好
10	甑	—— —— ——	あまり体部にふくらみのない比較的斜めに直線的に立ち上る。	内面横方向のヘラ削りの後に部分的にミガキを行い，外面は縦方向のやや細かいヘラ削りを施している。	微砂粒を均一に含む密な土	暗褐色一部黒色	部分的にカマイブレをしている。
11	坏	14.6 —— 5.0推定	口縁部がやや長く外反し稜をもつ。	内面口縁部は横方向のヘラミガキを施し底部には方射状の細かいヘラミガキを施している。外面口縁部は横方向のナデを施し底部はやや粗いヘラ削りを施している。	砂粒をほとんど含まず密な土	淡褐色一部黒色	焼成良好一部ススス内外共付着
12	高坏	19.0 3.8 17.7	坏部が丸みが少く直線的で大きく脚が長い。	坏部内面は横方向のヘラみがきを細かく施し外面は斜横方向にヘラみがきを施している。脚部内面はヘラ削りの後にナデを施し，外面は横方向にヘラミガキを施している。	微砂粒を均一に少量含み密な土	淡褐色	焼成良好
13	高坏	—— —— ——	脚からすぐに裾に広がる。	内面横方向のヘラ削りの後ナデを行い，外面は縦方向にヘラミガキを施している。	微砂粒を均一に少量含み密な土	淡褐色	焼成良好
14	支脚	—— —— ——	やや太めのものである。	整形なし。	砂粒をほとんど含まず密な土	赤褐色	焼成やや不良



第26図　B区２号住居跡出土遺物実測図

(13)　B区３号A住居跡（第27図・第28図）

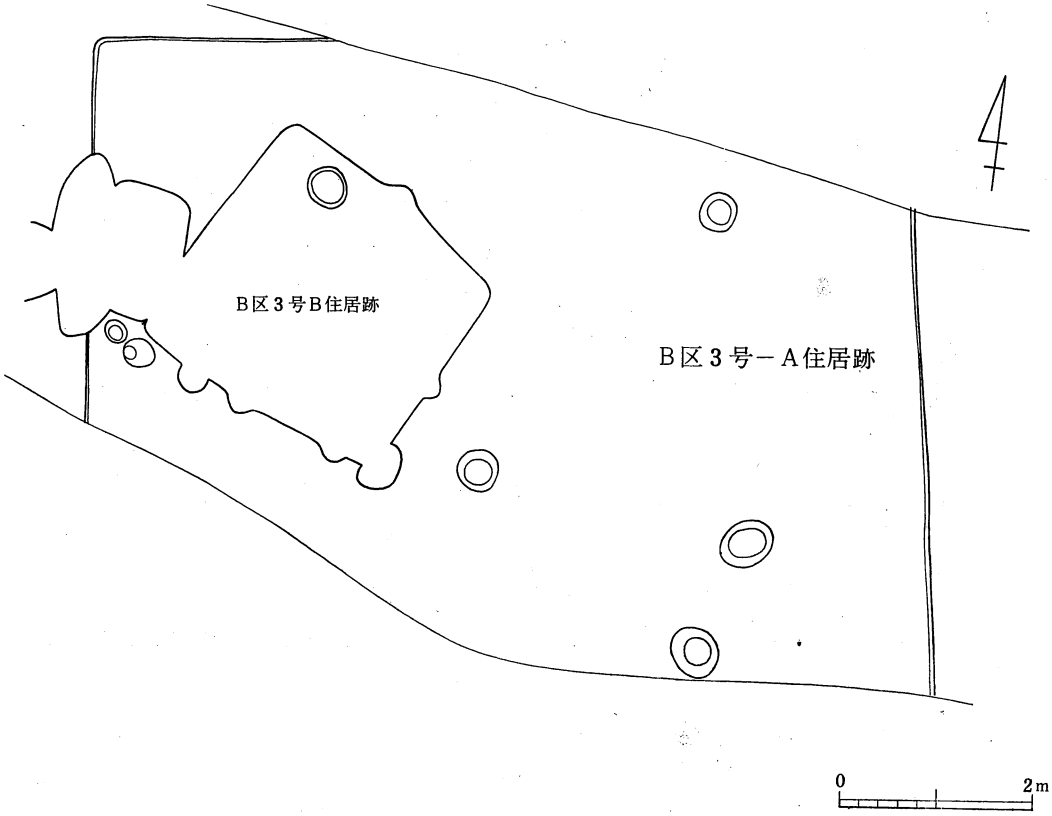
４号住居の東隣に位置し５号B住居と重複している。プランは北東コーナーと南東コーナー及び東壁，南，北壁の一部を確認したにすぎない。新旧関係は，５号B住居の上に床がなかったことにより５号A住居の方が古い。壁の現在高は最高で東壁の12㎝である。床面は顕著な踏み固め部分はみられない。炭化物と焼土が無数に点在している所から火災による消失家屋の様である。周溝はみられなかった。柱穴は南東コーナーから西に25ｍの南壁付近に一本検出された。又，南東コーナーには直径80㎝の貯蔵穴状のピットがあるが貯蔵穴と断定しうる資料は得られなかった。深さは53㎝である。竈は発見されなかった。



第27図　B区３号—A住居跡遺物実測図

B区３号―Ａ住居跡出土土器表

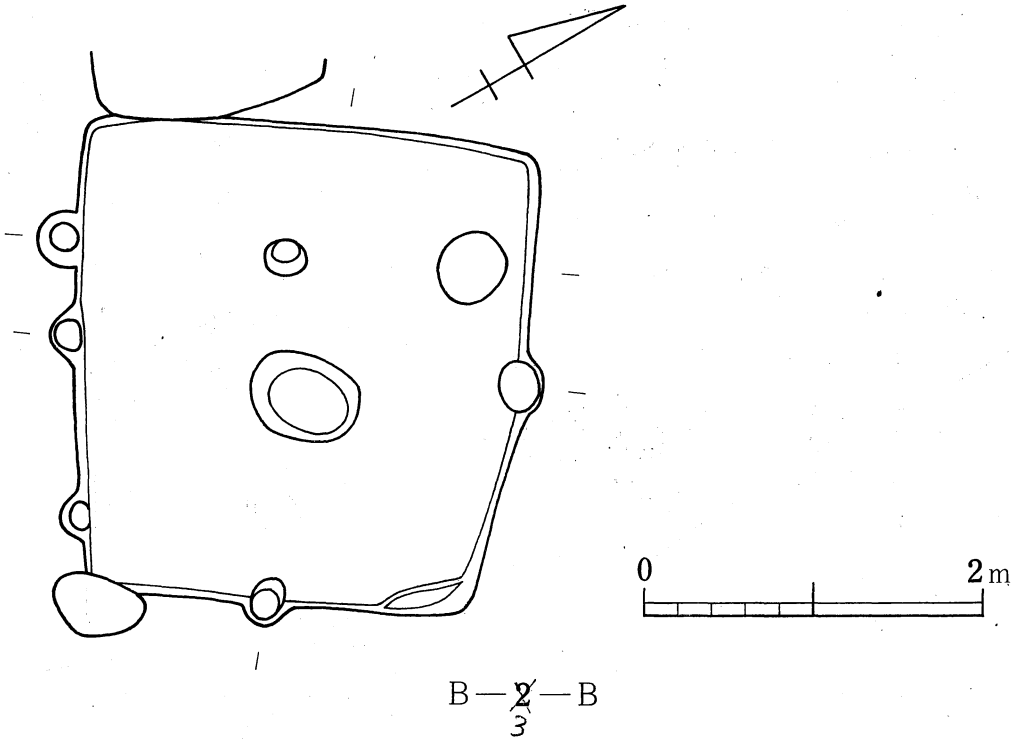
遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	19.1推定 ―― ――	口縁部が「く」の字に外反し体部は口縁部よりやや張る。体部はやや器厚を減ずる。	口縁部は内外共に横ナデを施し体部内面は斜横方向，外面は縦方向のヘラ削りを施している。	粗い砂粒を均一に含む。	褐色	覆土より出土
2	甕	14.8推定 ―― ――	口縁部がわずかに外反し体部も口縁部よりやや張る。	口縁部は内外共に横方向のナデを，外面体部には縦方向のヘラ削りを施す。	やや粗い砂粒をわずかに含む。	褐色一部黒色	覆土より出土
3	坏	13.1推定 ―― 3.2推定	器高は低く口縁部がなだらかに立ち上る。	口縁部内外共に横方向のナデを施し外面底部はヘラ削りを施している。	微砂粒をわずかに含む均一な密な土	淡褐色	覆土より出土
4	坏	14.0推定 ―― 4.5	二段の稜を持ち口縁部はやや内反し底部は丸い。	口縁部は内外共に横方向のナデを施し外面底部に横方向のヘラ削りを施している。	微砂粒をわずかに含む密な土	黒色（内外共に黒色処理）	覆土より出土
5	坏	―― ―― ――	高台が付いてゆるやかに坏部が立ち上る。	内外共に坏部を横方向にヘラミガキを，高台は横方向にナデを施している。	やや粗い砂粒をわずかに含む。	淡灰色	覆土より出土
6	坏	―― ―― ――	高台が付いてゆるやかに坏部が立ち上る。	内面坏部は横方向のヘラミガキ，底部は横方向のヘラミガキを施し，外面は横方向のヘラミガキを高台部はナデを施している。	微砂粒をわずかに含む密な土	淡茶色一部黒色	坏部糸切り覆土より出土
7	坏	―― ―― ――	高台が付いて坏部に稜をもつ。	内外共にロクロによる走行痕である。	微砂粒を含む。	濃灰色	須恵器覆土より出土
8	高坏	―― ―― ――	脚の裾部に稜を持つ。	内外面共に脚上半を横方向にヘラ削り，下半を横方向にナデを施している。	やや粗い砂粒を均一に含む。	茶褐色	焼成良好覆土より出土
9	支脚	―― 6.1 ――	太めのやや不整形の円柱状を呈する。	縦方向のヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を均一に含む。	淡茶色	



第28図　B区3号—A住居跡実測図

(14)．B区3号B住居跡（第29図）

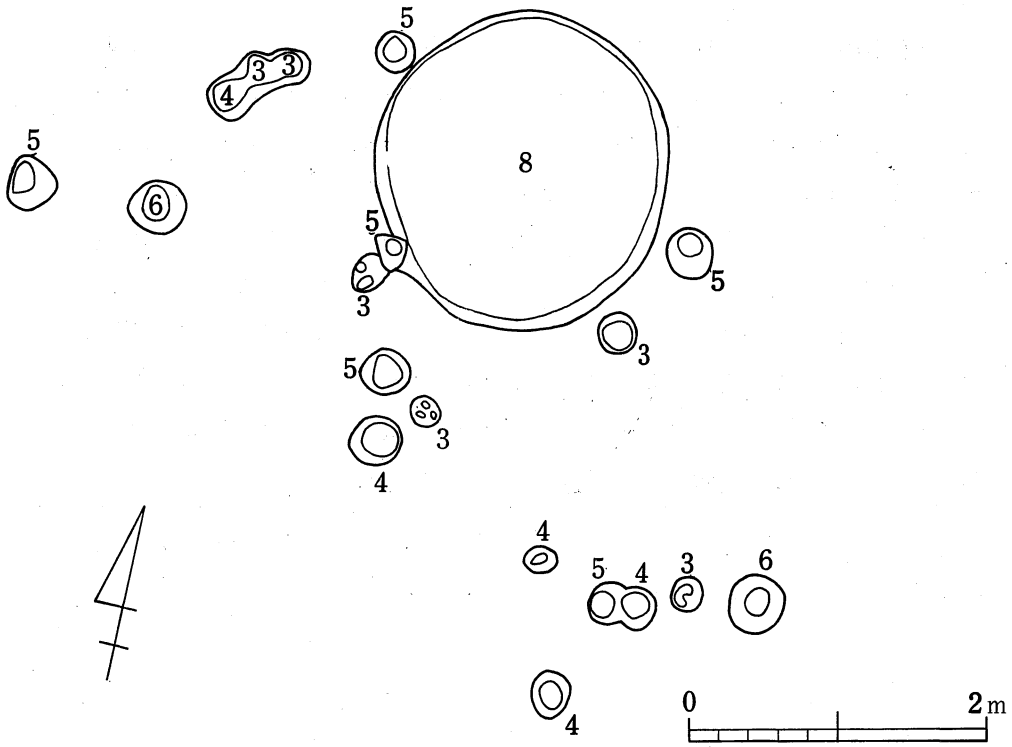
4号住居跡の東隣に位置し，5号A住居跡，5号C住居跡，5号D住居跡と重複している。新旧関係は5号A住居跡の床を5号B住居跡が切っているので5号A住居跡よりは新しい。5号C住居跡の上に床を作っている事よりC住居跡よりも新しい。D住居跡とは床のレベルがほぼ同じであるが住居跡内のセクションからD住居跡を切っていることが判る。つまりD住居跡よりも新しいということで5号住居跡の中で一番新しい住居跡である。工事により北半分を失っている。プランは南壁及び南東コーナー，南西コーナーを確認したにすぎない。南壁は5.4 *m*を測る。壁はしっかりとしており比較的に鋭く立ち上っている。現在高は，約40*cm*である。床面は比較的踏み固められており平坦である。周溝は認められない。柱穴は南東コーナーに一本検出された。南西コーナー付近に直径40*cm*深さ33*cm*の大きな柱穴が一本検出されている。竈は発見されなかった。



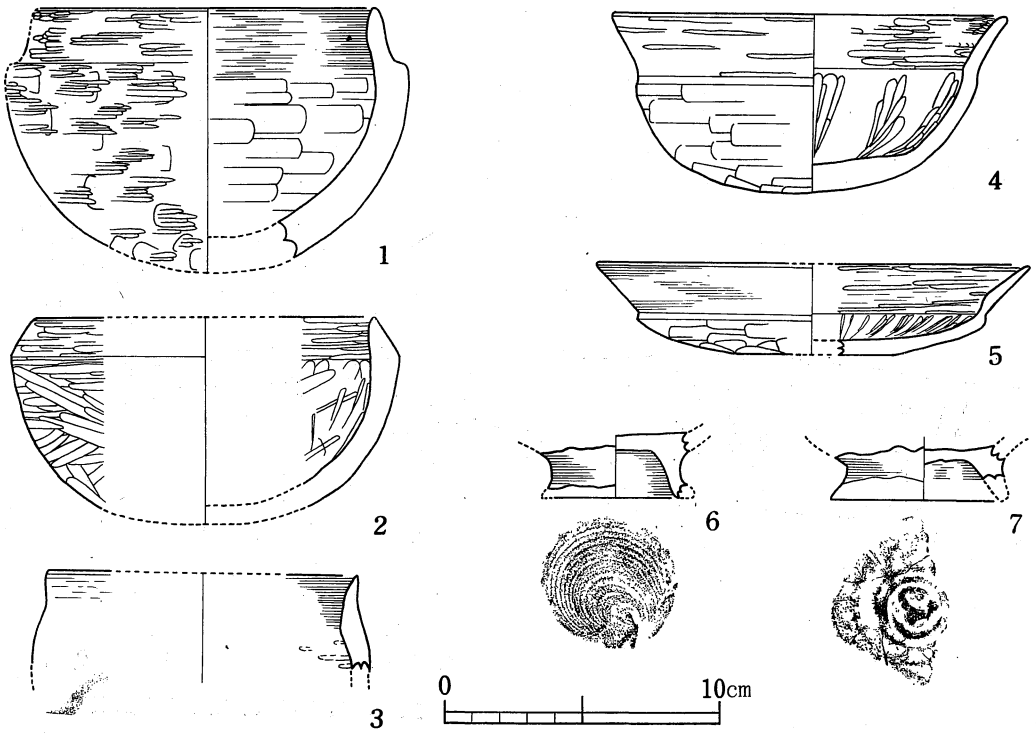
第29図　B区３号—B住居跡実測図

(15)　B区４号住居跡（第30図・第31図）

4号住居跡の東隣に位置し，５号B住居跡及び５号D住居跡と重複している。新旧関係は５号B住居跡が５号C住居跡の上に床を作っていることから５号C住居跡が古い。５号D住居跡との関係は床面が同じレベルの為と新しい５号B住居跡が作られた為に不明である。工事により北側のほとんどを失っている。プランは南東コーナーと南西コーナー及び南壁を確認したにすぎない。南壁は3.5 *m*を測る。壁の現在高は最高９ *cm*である。床面は西にわづかに傾斜している。踏み固めは認められない。周溝は南西コーナー及び南壁の中央の一部に見られる。柱穴は検出されなかった。竈も発見されなかった。南東コーナーから北へ１ *m*の所に５号C住居跡より新しい土壙に切られている。



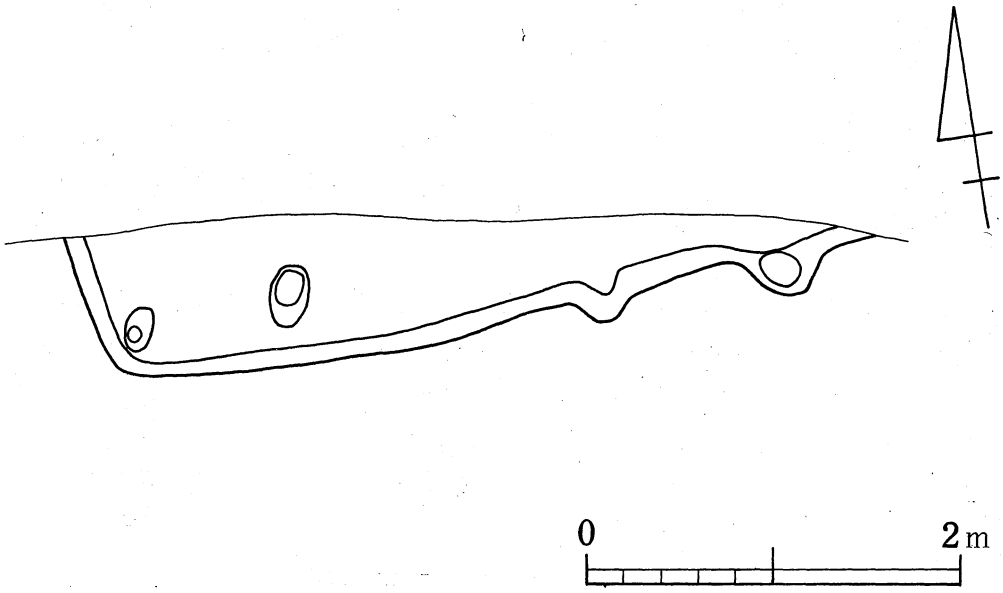
第30図　B区４号住居跡実測図



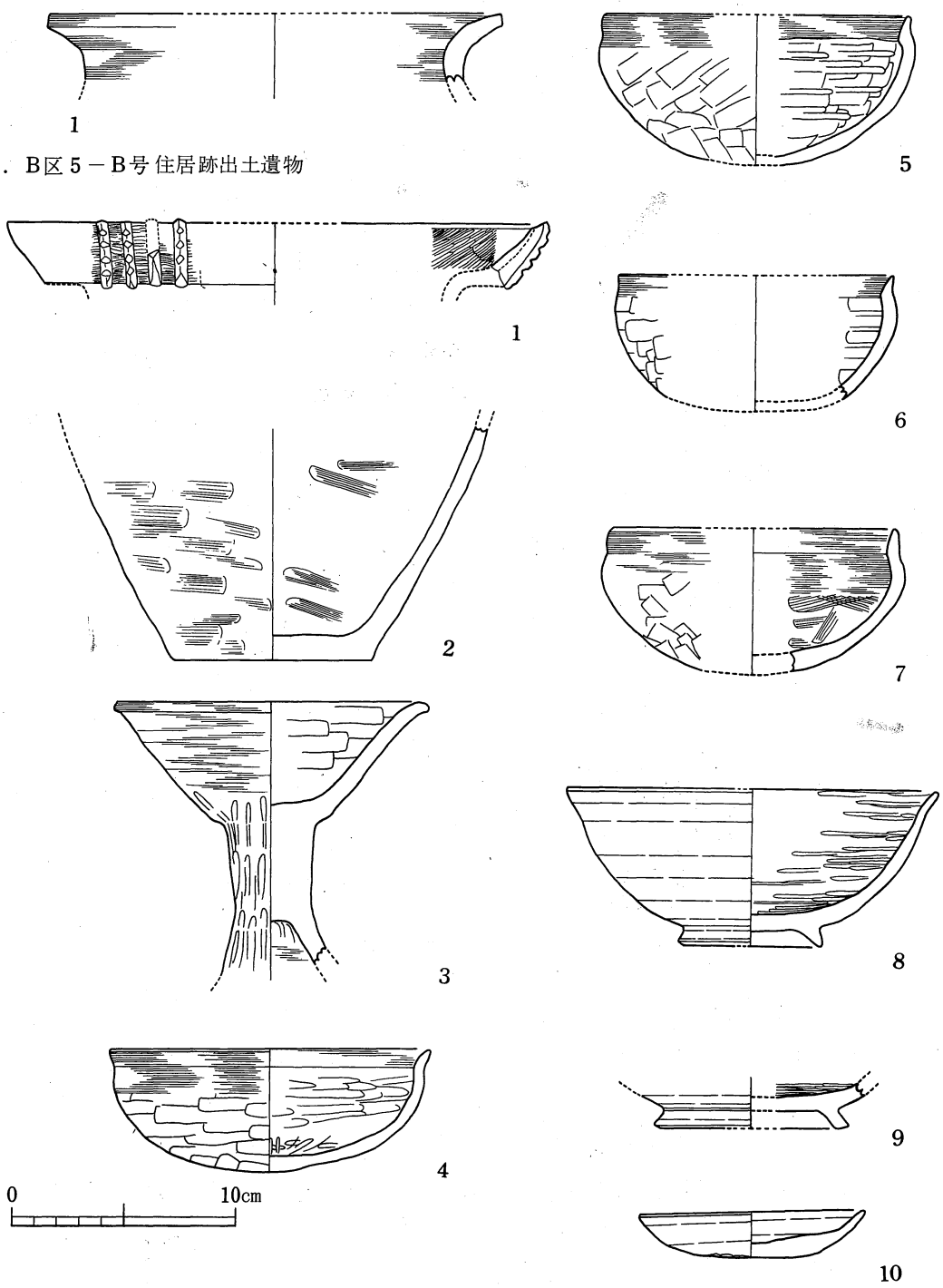
第31図　B区４号住居跡出土遺物実測図

(16)　B区５号住居跡（第32図・第33図）

２号住居跡の東に５号D住居跡と重複している。南には別の４号住居跡より新しい竈がのっている。プランは工事と５号D住居跡により北東コーナーを失い又，南西コーナーも失っている。確認されはものは北西コーナーと西壁の大部分，南東コーナーと東壁の約半分である。これらの事から東西5.6m，南北4.7mの住居跡と想定される。壁の現在高は35cm～40cmでほぼ均一な高さを示している。壁の立ち上がりは鋭い立ち上がりを示している。周溝は認められなかった。柱穴は主柱穴が４本と他に中央及び西壁寄りに２本検出された。北西の２本の主柱穴は抜き変えられて２本になっていると考えられる。床面は，ほぼ全面的に踏み固めの良好な床が広がっている。竈は北壁の中央部に築かれているがほとんどが工事により失なわれていた。南東コーナーに貯蔵穴状の70cm×１mの方形のプランが検出されたが貯蔵穴と断言しうる資料は得られなかった。



第32図　B区５号住居跡実測図



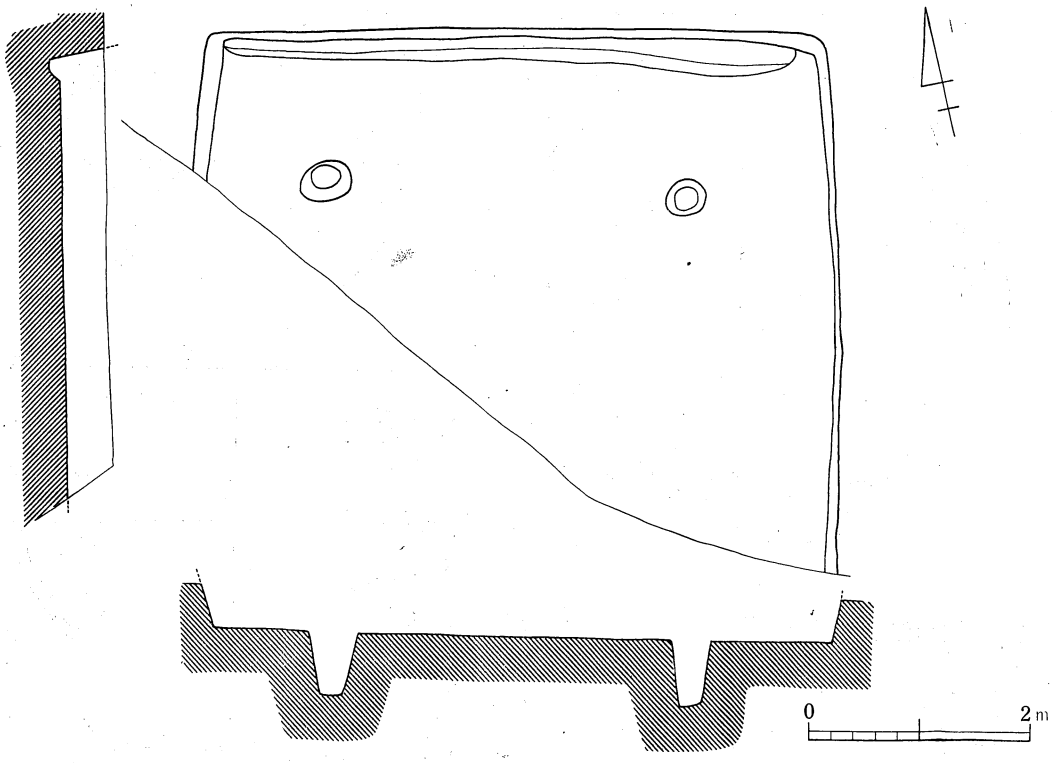
第33図　B区５－A号住居跡・B区５－B号住居跡出土遺物実測図

B区５―Ａ号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	24.0推定 ―― ――	口縁部が大きく外反し復合口縁である。	口縁部に棒状浮文を付け櫛目の押型文がある。口縁部内面は細かいヘラミガキを外面はハケ目が施されている	微砂粒を含む。	赤褐色	覆土より出土
2	甕	―― ―― ――	体部のふくらみが少い。	器面が荒れあまり判らないが内外共にヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を含む。	淡茶色	カマド脇出土
3	高坏	14.1 ―― ――	脚が長く坏部が外反し比較的直線的に開く。	坏部内面は横方向のヘラ削りを施し外面は横方向のナデを施している。脚は縦方向のヘラミガキを内面はヘラでえぐり取っている。	粗い砂粒と微砂粒を含む。	茶褐色	カマド脇出土
4	坏	14.4 ―― 5.5	丸底で体部の上でわずかにくびれ口縁部となり，口縁部は短く外反する。	口縁部は内外共に横ナデを行い，内面は体，底部に部分的にヘラミガキを，外面体部は横方向にヘラ削りを施す	やや粗い砂粒をわずかに含む。	淡茶色	カマド脇出土
5	坏	13.2推定 ―― 6.7推定	口縁部はほぼ直立し稜を持ち丸底である。	口縁部は内外共に横方向のナデを体底部はヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を含む。	茶褐色	覆土より出土
6	坏	12.3推定 ―― 6.2推定	丸底で稜をもち口縁部はやや外反する。	口縁部は内外共に横方向のナデを体，底部はヘラ削りを施している	やや粗い砂粒を含む。	赤褐色	覆土より出土
7	坏	12.5推定 ―― 6.6推定	口縁部はほぼ直立し稜を持ち丸底である。	口縁部は内外共に横方向のナデを体，底部は内外共にヘラ削りを施している。	やや粗い砂粒を含む。	赤褐色，内面黒色	覆土より出土
8	坏	16.6 ―― 7.0	高台をもちゆるやかに立ち上り口縁部はわずかに外反する。	坏部内面はロクロによる走行痕があり，内面は横方向にヘラミガキを施し高台部は横方向にナデを施している。	やや粗い砂粒を含む。	淡茶色	覆土より出土，ヘラ切り
9	坏	―― ―― ――	高台をもちゆるやかに立ち上る。	坏部内面は横方向にヘラミガキを外面はロクロによる走行痕がある。高台部は横方向にナデを施している。	微砂粒を含む。	淡茶色	覆土より出土
10	皿	10.1 ―― 2.2	非常に小さな不整形の浅い皿である。	ロクロによる走行痕が内外面にあり，底部はヘラで切られている。灯明皿として用いたらしく内面が焼けている	やや粗い砂粒を含む。	濃灰色，一部黒色	覆土より出土

(17)　B区６号住居跡（第34図・第35図）

２号住居跡の東に３号Ａ住居と重複している。３号Ａ住居跡をほぼ埋めた後にロームブロックを敷きつめている。プランは工事により北東コーナーと南半分を失っている。確認されたものは，北西コーナーと東壁にすぎない。これにより東西の規模を推定すると8.3mとなり，かなり大形の住居跡となる。壁は北西コーナーで10cm，東壁で15cmの現在高である。西壁は，土壙やピットによりかなり乱れている。周溝はみられなかった。柱穴は５本検出された。直径40cm～50cmの深さ１m前後の大きなものが４本，35cm四方の深さ１mのものが１本である。柱穴配置の計画性は看取されなかった。床面は３号Ａ住居跡を埋めてほぼ平坦に築かれている。踏み固めはほとんど見られず軟弱である。竈は工事により破壊されたものと考えられる。



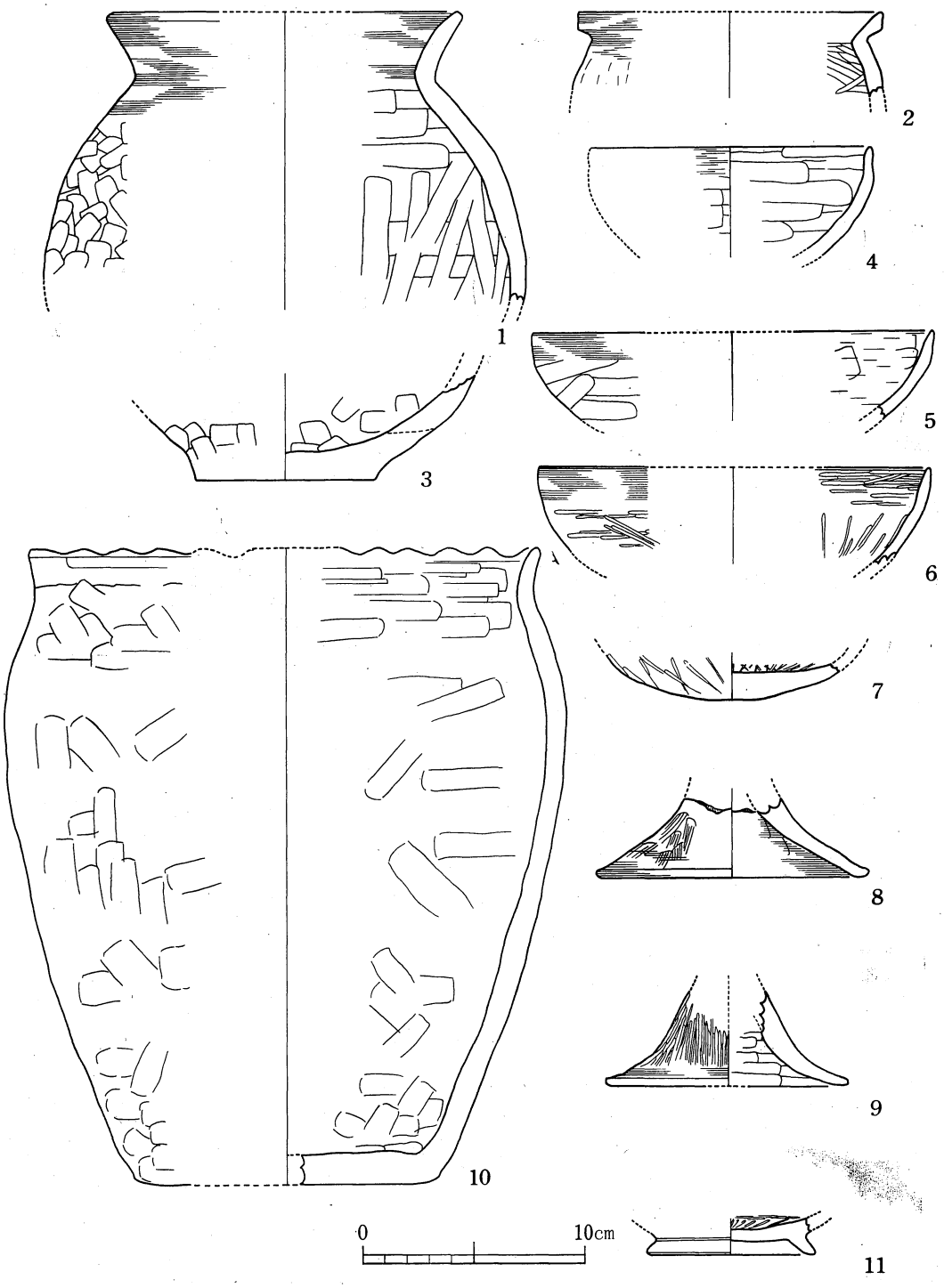
第34図　B区６号住居跡実測図

(18)　B区７号住居跡（第37図・第36図）

住居跡の南北を工事で失なっており，覆土の大部分もやはり工事により失なわれている。掘り込みから床面までの距離は東側で12㎝，西側で５～７㎝程しか残っていない。柱穴は４穴確認され，住居跡の対角線上にあるが，北東柱穴のみ中心から東へ17㎝片寄っている。４穴とも直径45㎝深さ60～65㎝である。柱間面積は均整で3.25ｍ，炉辺面積は10.56㎡と比較的規模の大きい住居跡である。

B区７号住居跡出土遺物

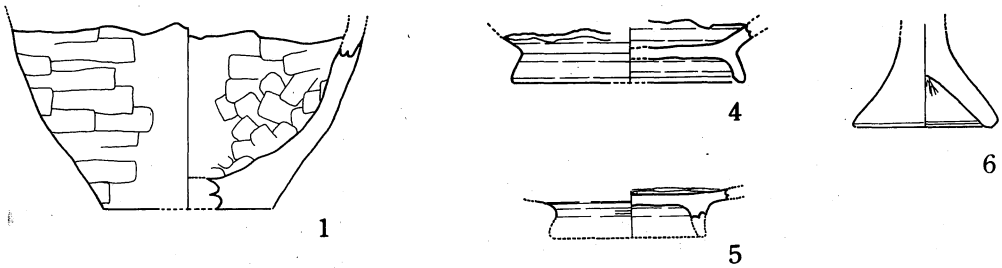
工事用重機械による攪乱のため，出土遺物のほとんどは原位置を保っていない。住居跡の経営時期を同定するのは困難であるが，平面形の構造からみて鬼高１期のものと推定される。



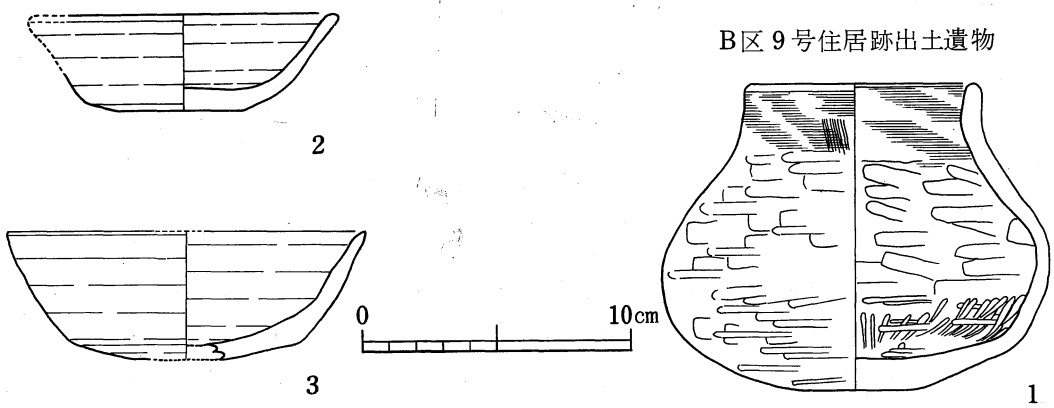
第35図　B区６号住居跡出土遺物実測図

B区７号住居跡出土土器表

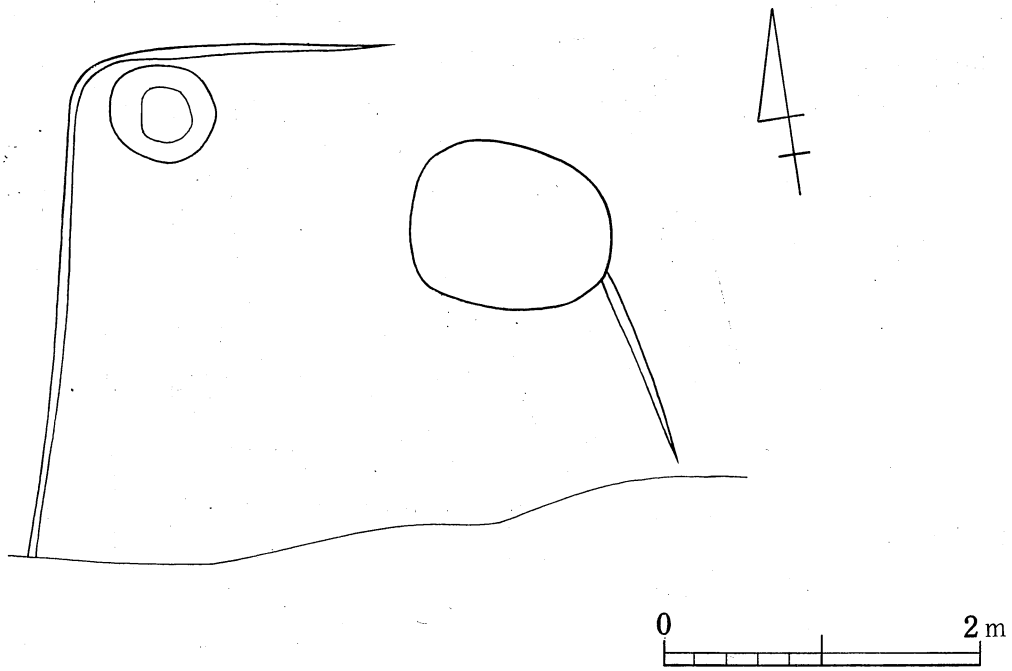
遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	—— —— ——	底部が比較的小さく立ち上りがきつい。	内外共に荒いヘラ削りを施している。	粗い砂粒を均一に含む。	淡茶褐色	カマドより出土
2	坏	11.6 —— 3.6	厚く一定した器厚の底部より立ち上る体部は底部に比較して薄い。底部よりゆるやかに立ち上り直線的に口縁部になる。	ロクロにより整形され糸切りが行なわれている。	粗い砂粒をわずかに含む。	茶褐色	覆土より出土
3	坏	13.4 —— 4.8	立ち上り部分が特に厚くゆるやかに上り直線的に口縁部となる。	ロクロにより整形されヘラ切りされたと思われる。	粗い砂粒を含む。	濃褐色	カマドより出土
4	坏	—— —— ——	高台を持ちゆるやかに立ち上る。	坏部内面は黒色処理され細かいヘラミガキを施している。	微砂粒を含む。	淡茶色，内面黒色	覆土より出土
5	坏	—— —— ——	高台を持ちゆるやかに立ち上る。	ロクロにより整形されている。	やや粗い砂粒を含む。	濃灰色	須恵器，覆土より出土
6	—	—— —— ——	ミニチュア土器	器面が荒れ不明であるが脚の内面をヘラ削りしている。	粗い砂粒を多量に含む。	淡茶色	覆土より出土



B区９号住居跡出土遺物



第36図　B区７号住居跡およびB区９号住居跡出土遺物実測図



第37図　B区７号住居跡実測図

(19)　B区８号住居跡

７号住居跡の北に位置する。南壁から最大１ｍほど床を残すのみである。その南壁も４つの土壙と重複している。東側は10号住居跡と重複しているが10cmほど壁を残している。新旧関係は９号住居跡の上に床がなかったことにより10号住居跡の方が古い。壁は南壁で40cmである。床面は顕著な踏み固め部分はみられない。周溝，柱穴，竈は発見されなかった。

(20)　B区９号住居跡

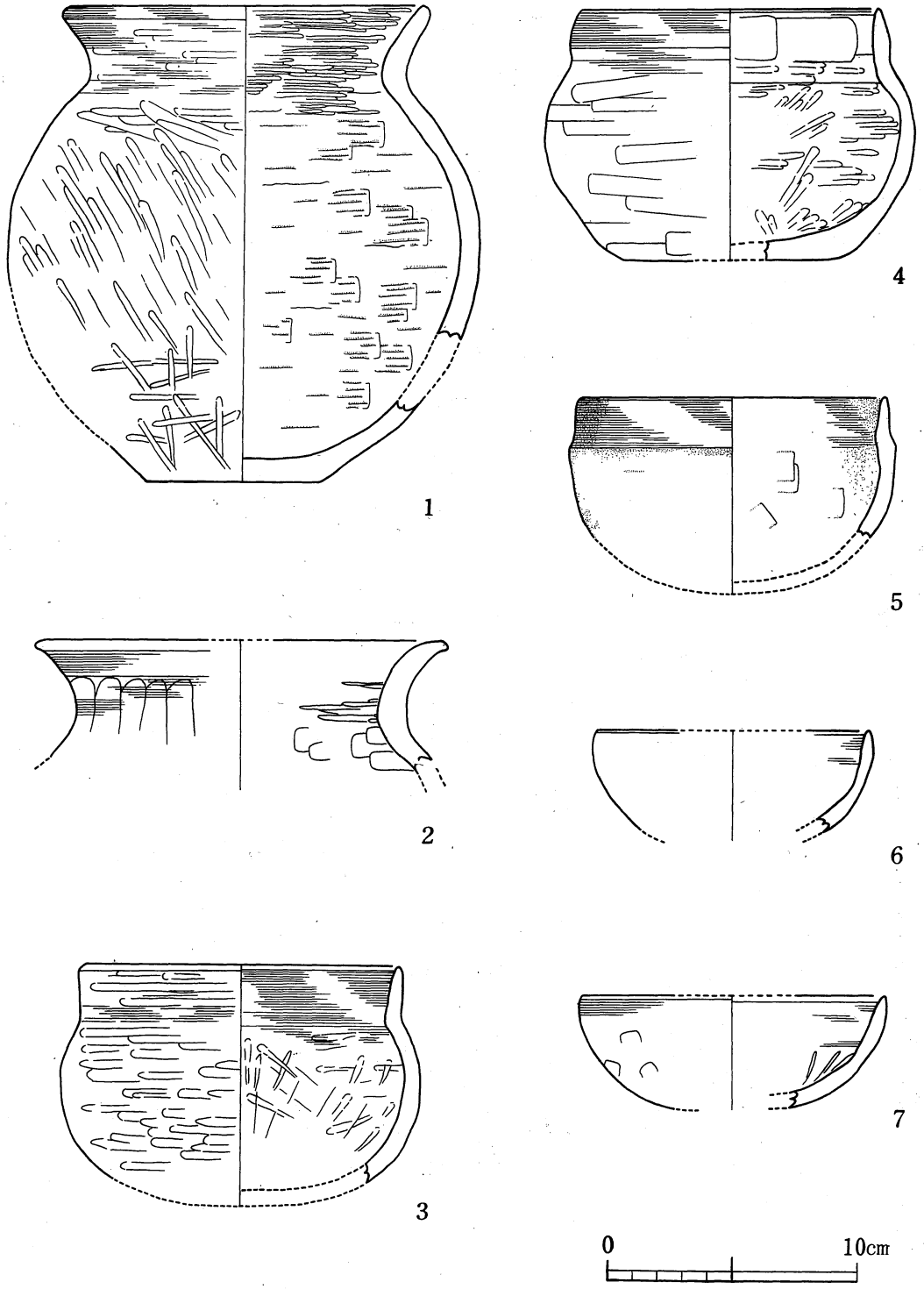
１号住居跡の東に位置し２号A住居跡と重複している。２号A住居跡の上に２号B住竈が検出された。したがって新旧関係は２号B住居が新しい。プランは南半分を工事により失っているので東西の壁を検出したにすぎない。この壁から東西2.9ｍの規模になると考えられる。壁は工事により削平され現在高は最高５cm，最低１cmである。竈は北壁中央と思われる所に構築されている。大きく削平され主体部は遺在していない。床面は軟弱である。

㉑　B区10号住居跡（第38図）

5号住居跡の東に位置する。工事により南西コーナーを中心に半分ほど失っている。プランは北西コーナー，北東コーナー北壁，東壁の大部分を確認したので東西5.2 mの規模を有する住居跡である。壁はしっかりしており現在高は北西コーナーで38cm，東壁で26cmである。床面は平坦で一面に踏み固めが見られる。周溝は北壁に見られる。幅15cm深さ20cmである。柱穴は4本発見された。竈は東壁の南東コーナー寄りに築かれていたがきわめて遺在状態が悪い。

B区10号住居跡出土土器表

遺物番号 図版番号	器形	法量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	備考
1	甕	14.8 18.9 19.2	口縁部が「く」の字に外反し球形の体部を持つ。	口縁部内面はこまかい横方向のヘラみがき，体底部を横方向のヘラ削りを施し，外面口縁部は横方向のナデを行い，部分的にみがいている。体部は縦方向が多くヘラミガキを施している。	粗い砂粒をわずかに微砂粒を多く含む。	黒褐色	覆土より出土
2	甕	16.5 —— ——	「く」の字に外反する厚い口縁部である。	口縁部上半を内外共に横方向にナデを施し，内面はその下を横方向にヘラミガキ，その下をヘラ削りを行い，外面は縦方向にヘラ削りを施している。	微砂粒を含む。	黄褐色	覆土より出土
3	椀	12.5 14.4 9.7	口縁部はわずかに外反し球形の体部を持つ（稜を持つ）。	内面口縁部を横方向にナデを行い。体部に縦方向のヘラミガキを施し，外面は横方向のヘラミガキを施している	微砂粒をわずかに含む。	黒褐色	覆土より出土
4	椀	11.8 14.9 10.1	口縁部は直立し球形の体部を持つ（稜を持つ））。	内面口縁部は横ヘラ削りを，体部は不定方向のヘラミガキを施し，外面の口縁部は横方向のナデを，体部は横方向のヘラ削りを施している。	粗い砂粒をわずかに微砂粒を多く含む。	淡茶褐色	覆土より出土
5	椀	12.5 13.1 7.9推定	口縁部は直立し稜を持ち，球形の体部を持つ。	口縁部は内外共に横方向のナデを施し，体部は器面が剝落して不明であるが内面にヘラ削りがわずかに見られる	微砂粒を含む。	赤褐色	覆土より出土
6	坏	11.2 —— ——	口縁部は直立し，体部は球状になる。	内外共に器面が剝落し不明であるが内面口縁部に一部横方向のナデが見られる。	微砂粒を含む。	黄褐色	覆土より出土
7	坏	12.4 —— ——	口縁部はわずかに内反し，体部は球状になる。	器面が荒れ良く判からないが，内外共に口縁部は横方向のナデがわずかに見られ，内面体部は放射状にヘラミガキを施し，外面体部にわずかにヘラ削りが見られる。	微砂粒を含む。	茶褐色	覆土より出土



第38図　B区10号住居跡出土遺物実測図

㉒　B区11号住居跡

B区２号土壙とB区３号土壙に西側を切られている。壁は直線的であり，西北隅は直角にまがる。壁高は10㎝～６㎝。西壁中央部は不明瞭であるが，土壙の掘り込みは，一部に崩壊と推定される部分がある。東西巾は８ｍ35㎝の大形住居で，本遺跡中最大の計測値である。壁高はなくこの時期（鬼高期）の壁溝の付設がかなり一般的であることを考えると，特異な例となろう。柱穴は７穴確認した。直径は50㎝～55㎝深さは70㎝～75㎝であるが，底径は開口部に比して大きい。またP_7のみは深さ40㎝で覆土中の情況から他の６穴と異なり，Paと対応する別遺構のものと推定される。床面は全体に軟弱であり，B区３号B住居跡の土に明瞭なロームブロックによる貼床がみられた。柱穴の配列状態は不明瞭であるが，P_1～P_3を主柱とした場合の炉辺面積は18.4㎡となる。

㉓　B区12号住居跡（第39図・第40図・第41図）

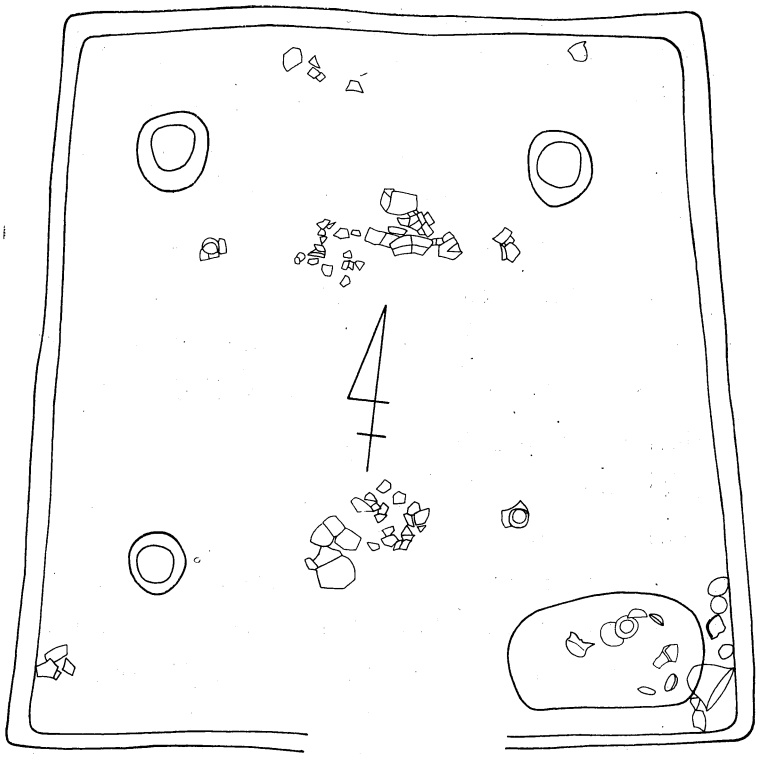
B区の東端に位置し，丘陵南端に近く遺構確認面は現水田面より低い。

平面形は北辺が他の３辺にくらべ70㎝短かく梯形を呈する。各辺は直線的で掘り込みは垂直に近い。柱穴は４穴検出した。北側の２穴は直径50㎝の円形で直径は50㎝で，深さは60～70㎝である。北側の２穴は直径40㎝，深さ50㎝55㎝である。柱穴は住居跡の対角線にあるがP_3は対角線より20㎝東側に寄る。

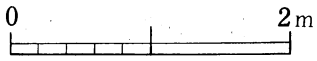
柱間寸法は東が2.9ｍ，西2.9ｍ，南2.9ｍ，北2.75ｍで炉辺面積は8.41㎡である。南側隅に貯蔵穴と思われるピットがある。平面形は1.4ｍ×0.8ｍで，深さ0.7㎡の長円形を呈し底面は方形である。床面は堅緻である。

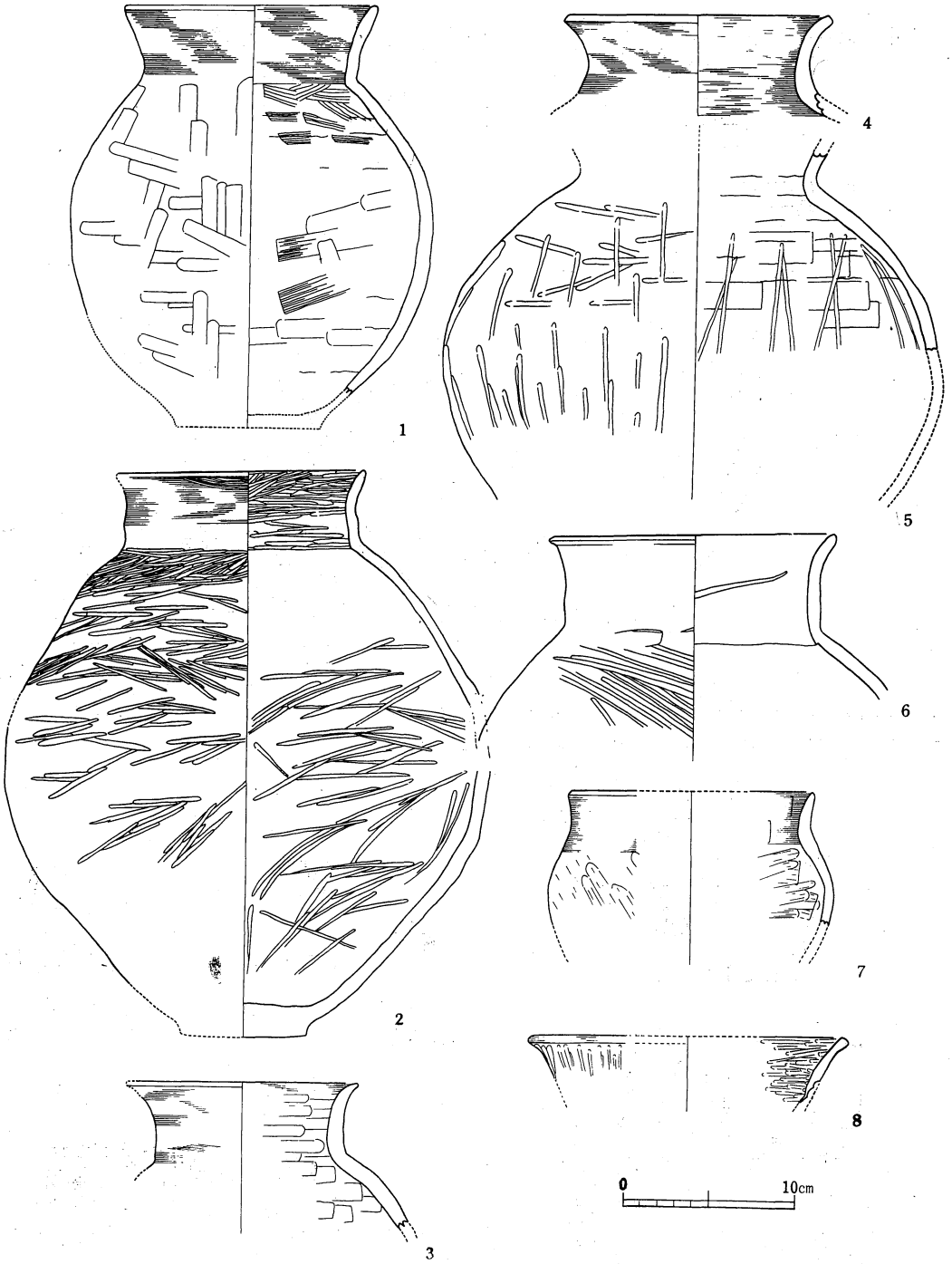
カマドの構造

北壁中央部にあり，全体に風化し遺存度は悪い。砂質粘土で構築されているが，不純物が多い。

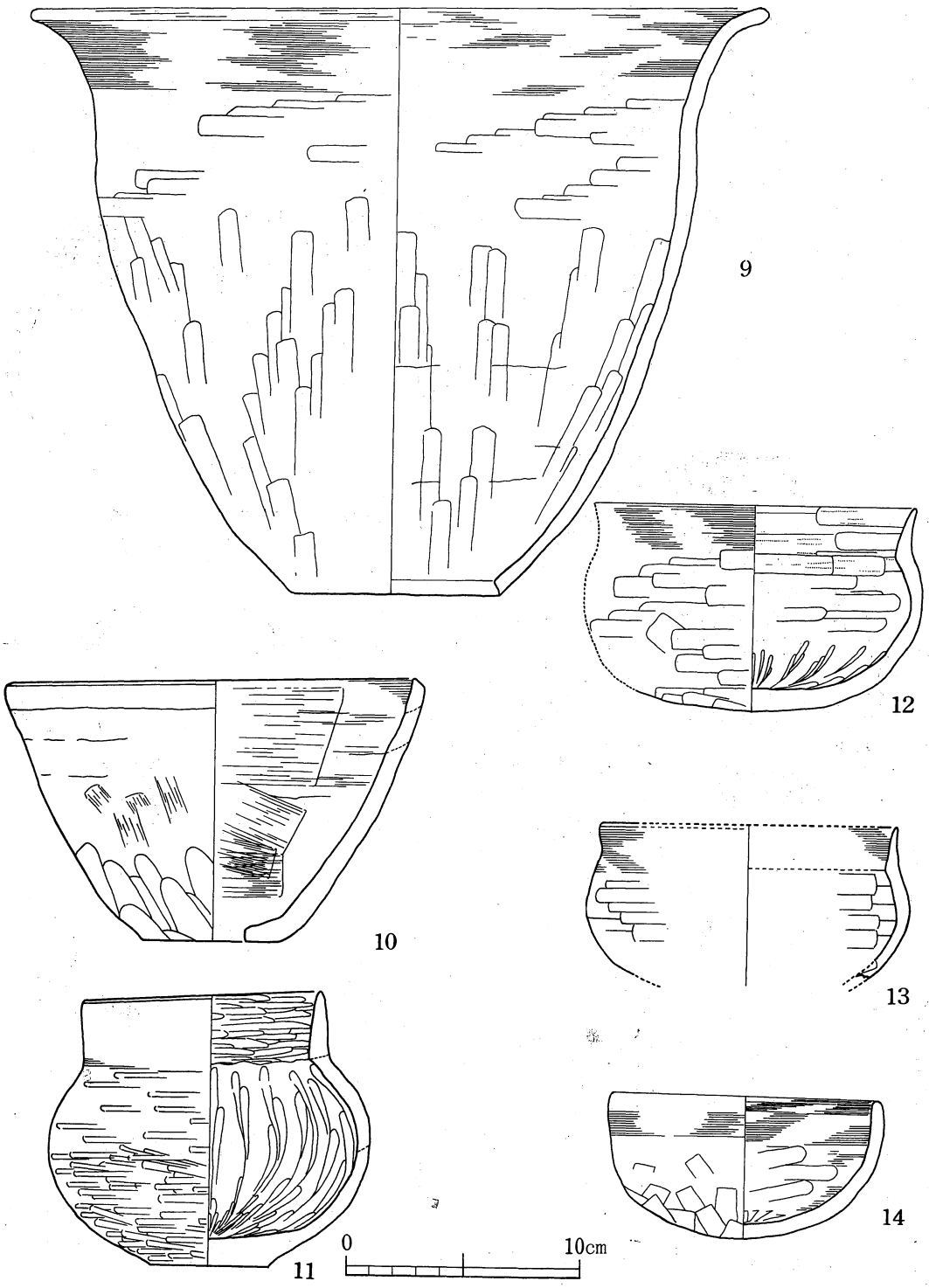


第39図　B区12号住居跡実測図





第40図　B区12号住居跡出土遺物実測図―1



第41図　B区12号住居跡出土遺物実測図―2

第4章　結　　び

(1) 弥　生　時　代

本遺跡より確認された弥生時代の遺構跡はすべて後期に位置づけられる竪穴住居跡であり，その数は3軒である。したがってこれらの住居跡は，比較的埋没の進まない短期間に，継続的に営なまれたものと推察される。出土した弥生式土器については，すでに考察を加えたが，当遺跡においては，北・西側の台地縁辺にも遺構の存在が充分考えられるため，集落構成の解明等については後日の調査を待つべきである。

(2) 古　墳　時　代

弥生時代終末期からの移行期ののち，装飾された土器を全く含まない土器セットからなる古式土師器として間違いない段階が続く。五領期の段階で，それは大略2時期に分れそうである。先の移行期の扱い方によって，当遺跡における土器は2期ないしは3期に分類されることになる。次いで和泉式の段階となるが，五領期の土器とこの時期の土器，そしてそれぞれを使用していた住居跡の峻別は比較的容易である。和泉期の住居跡はかなりの数にのぼる。こののち当然鬼高期の住居跡が後を継ぐわけであるが，検出された3軒の鬼高期住居跡は，鬼高期もかなり進展した時期に営なまれたらしく，和泉期以降のある期間住居経営の空白期間が現出したらしい。鬼高期住居跡は，調査区以北に展開していたと考えられる該期の集落跡の中で，最も縁辺部に所在していたものである。隣接古墳群の造営以降，発掘区域内がもはや，一般の集落立地として開放されることはなかったことが理解できるであろう。

(3) 長堤遺跡発掘の意義

長堤遺跡は益子町西南部を貫流する小貝川とその支流であるぐみ川によって開析された，標高30m前後の洪積台地に占地する遺跡である。この台地が古くから生活の舞台として利用されてきたことは，本調査に先行しておこなわれた分布調査等によっても明白である。付近に展開する柳久保弥生遺跡，山本山弥生遺跡，ケカチ古墳時代集落跡など弥生時代～奈良時代の遺跡の存在がそれを示している。したがって，この広領域における諸遺跡がどのような有機的関連のもとに歴史的変遷をとげているかの実態は今後の課題であろ

う。また今回の調査が長堤台地の先端部を横断する県道敷地内という小地域に限定されているだけに，早急な結論を出すのは困難であり，むしろ慎しむべきである。

本遺跡において検出された住居跡は，計25軒である。弥生時代の住居はこのうち3軒で，いずれも沖積地にのぞむ台地縁辺に集中している。

住居跡の形成過程については，これを7時期に区分した。すなわち，弥生時代（弥生時代後期），古墳時代第1期・古（弥生時代終末期），第1期・新（五領期の初現期），第2期（五領期の盛期），第3期（五領期の終末期），第4期（和泉期），第5期（鬼高期）である。この時代区分は，必ずしも明確な意味・内容をもって画期的に峻別されるもののみではなく，各期内にも複雑な内容を内包している。例えば弥生時代における縄文と櫛描沈線文を標式とする，いわゆる北関東系土器（従来長岡式と総称され，近年では各遺跡例で再検討の提示がなされている）を伴出する住居跡の存在，住居跡プランの差異などから見て，少なくとも2段階に細分できること。また古墳時代1期（古）に設定した理由の1つでもあるが，いわゆる土師器として総括しうる土器群中に，S字状結節文その他装飾化の傾向のみられる土器群が共伴する時期が認められることなど，問題提起となろう。

調査区で検出された遺構が，前記した時代区分に従って，順次スムーズに形成されたものでないことは明白である。弥生時代における2段階の住居跡群の形成，それは，北関東系要素の多分に濃厚な文化的様相を含みながら，南関東的な独自の文化の展開を示している段階であり，また古墳時代第1期（新）以降は，S字状口縁カメ形土器に標徴される東海系文化の波及にこの遺跡が全面的に覆われていく過程を示していると思われる。五領期の盛期と仮定した第2期は，本遺跡の中で最大の時間巾を示す時期で，18軒に及ぶ住居跡が成形されている。このことは，この時期における集落規模の急激な増大ということではなく，時間巾からみても数軒ずつの成立の総和として把えるべきであろう。

ただ，この時期に特記すべきこととして，形態・文様・成形技法について特徴ある土器が出土している。

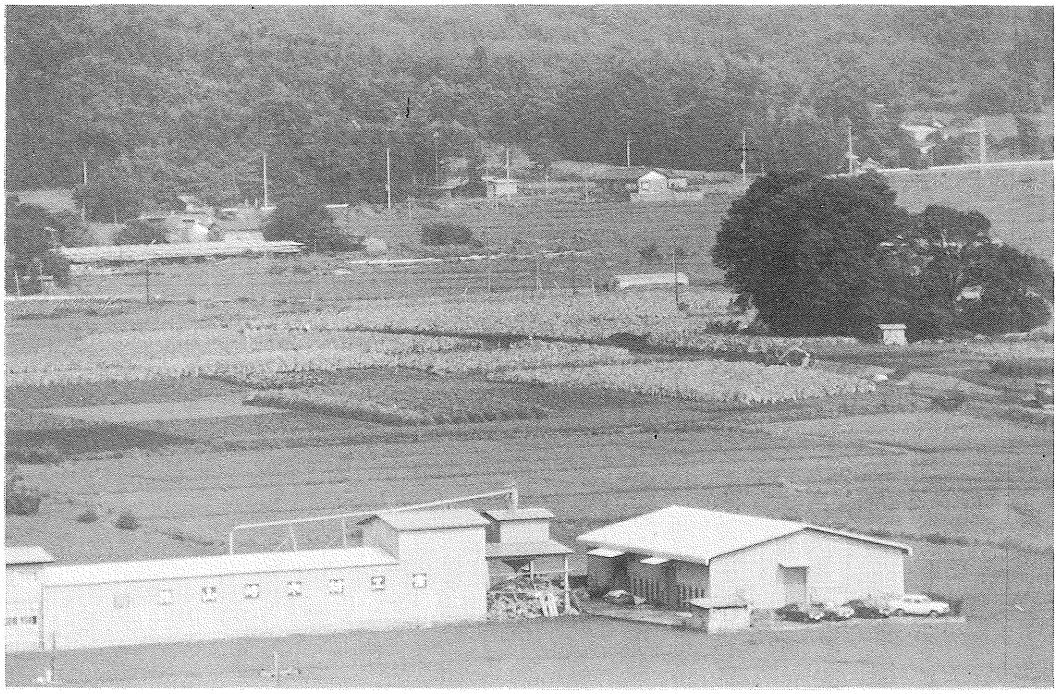
五領期終末の第3期から第4期（和泉期）にかけて集落形成の欠落期がある。和泉期の住居跡は7軒あるが，土器の示す様相は，和泉期のうち新しい形態を示すものであり，とりわけB区12号住居跡は，そのうち最も新しい時期のものである。

このことは2つの問題を提起している。第1はこの台地上において急激に集落が形成されたことであり，ケカチ遺跡の出現の契機と無関係ではなく，第2に和泉式土器と柳久保遺跡との編年的位置からくる違和感である。

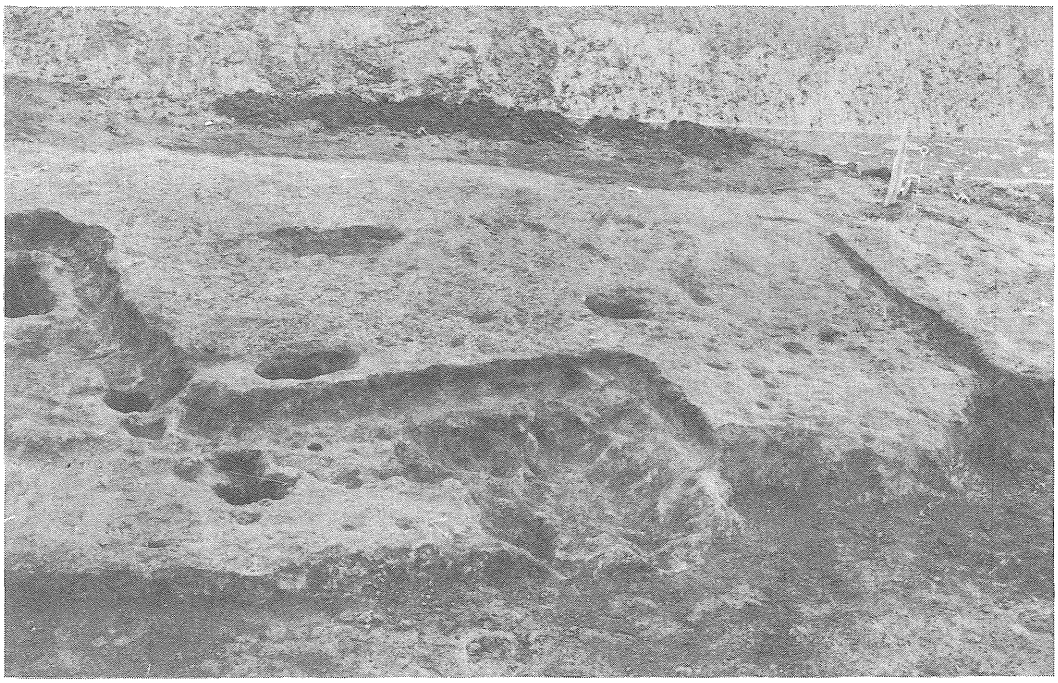
その後第5期とした鬼高期に至るまで，調査区において住居跡は検出されなかった。ここに第2の欠落期がある。この理由としては，隣接古墳群の墓域設定に伴う，他地域への集落の移動と考えられる。

以上が，調査の成果を踏まえた長堤遺跡の概観であるが，最後に１，２特記したいことがある。その１つは前述したＢ区12号住居跡出土の銅鏃である。本県における住居跡出土の例は多いものではないが，最近の調査において類例の増加がみられる。次に記すべきことは本遺跡出土の縄文式土器であろう。これらの土器は住居跡覆土内への混入といった形態で検出されている。井草１式から花輪台式に至る撚糸文系の土器群が検出されたこと，また，わずか１片であるが，東北地方に限定して分布する重層山形押型文を有する土器片を検出したことであろう。これらは当該地域をめぐる縄文早期前半の土器文化の様相が不明確な現状において，すぐれた資料が提示されたものとして把えるべきである。

長堤胡畑遺跡鳥瞰図



遺跡全景

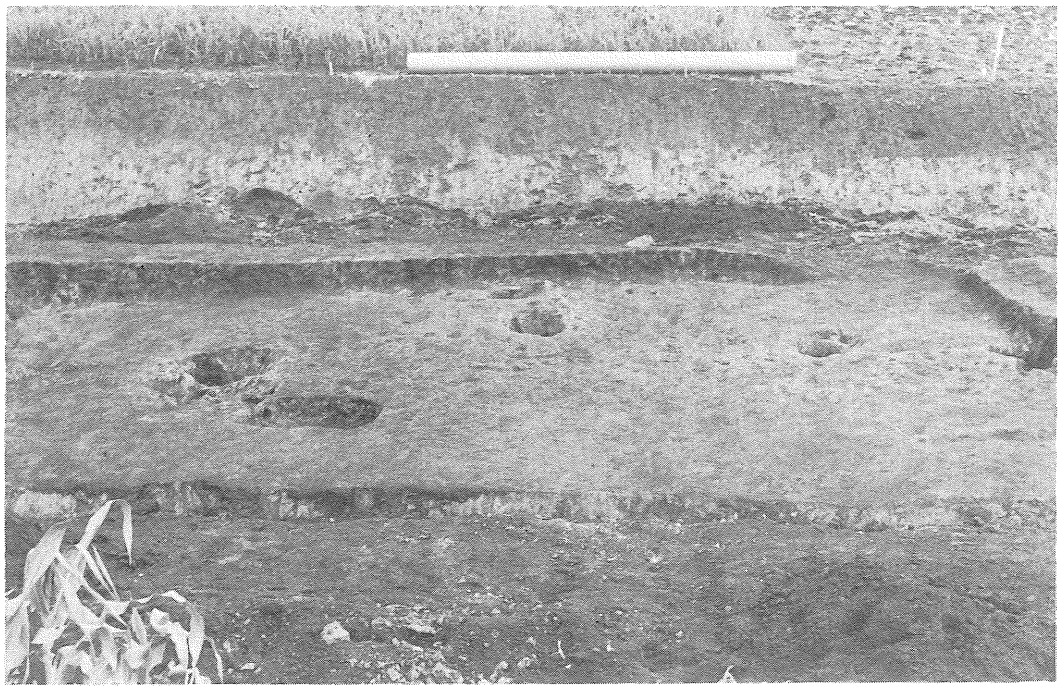


A区1号住居跡

A区2号住居跡

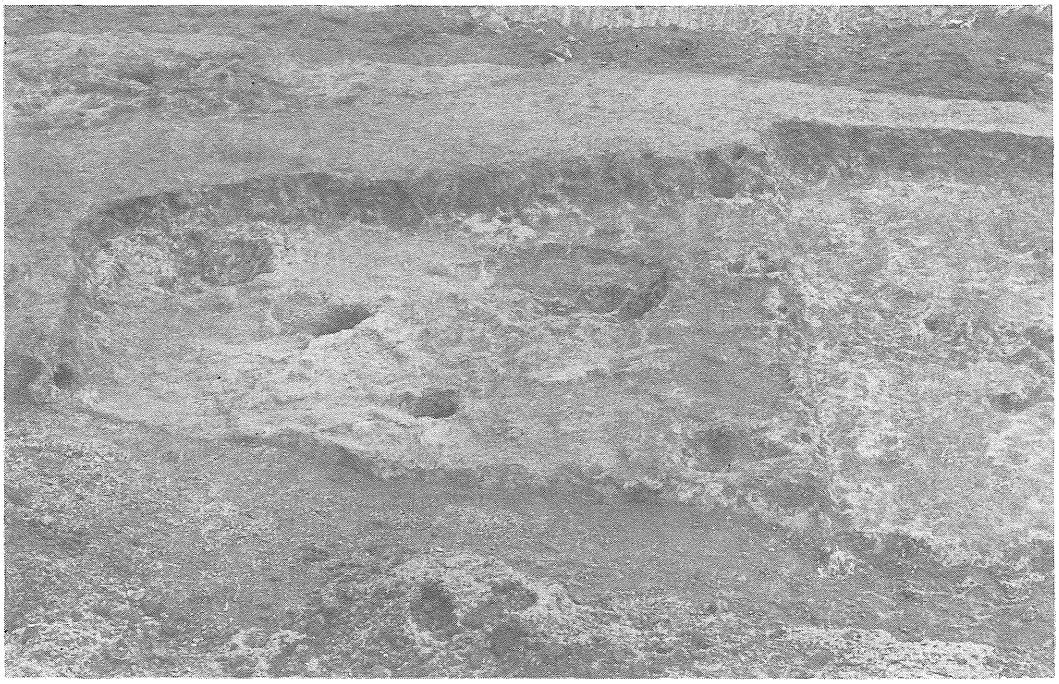
A区3号住居跡

A区3号住居出土遺物



A区4号住居跡

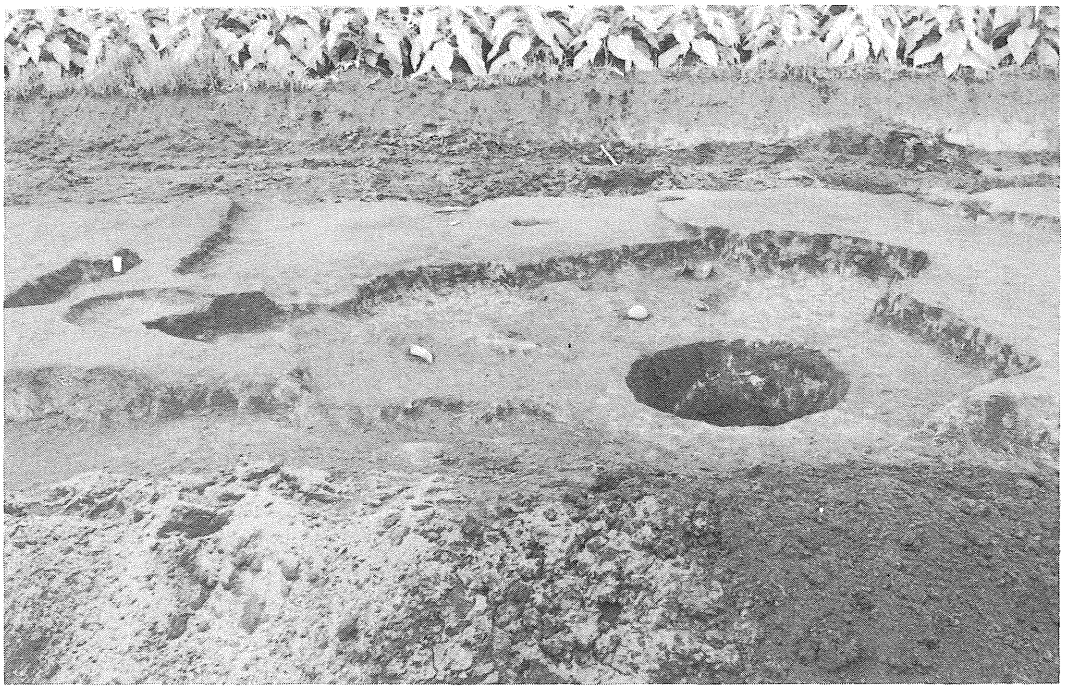
A区5号住居跡



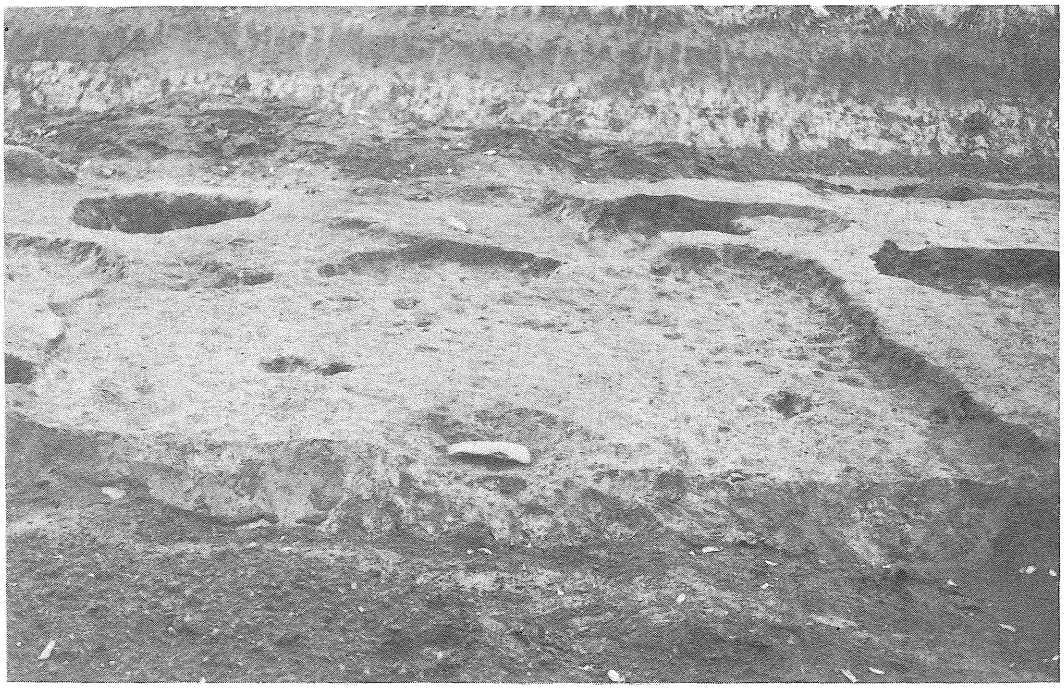
A区6号住居跡

A区7号住居跡

A区8号住居跡

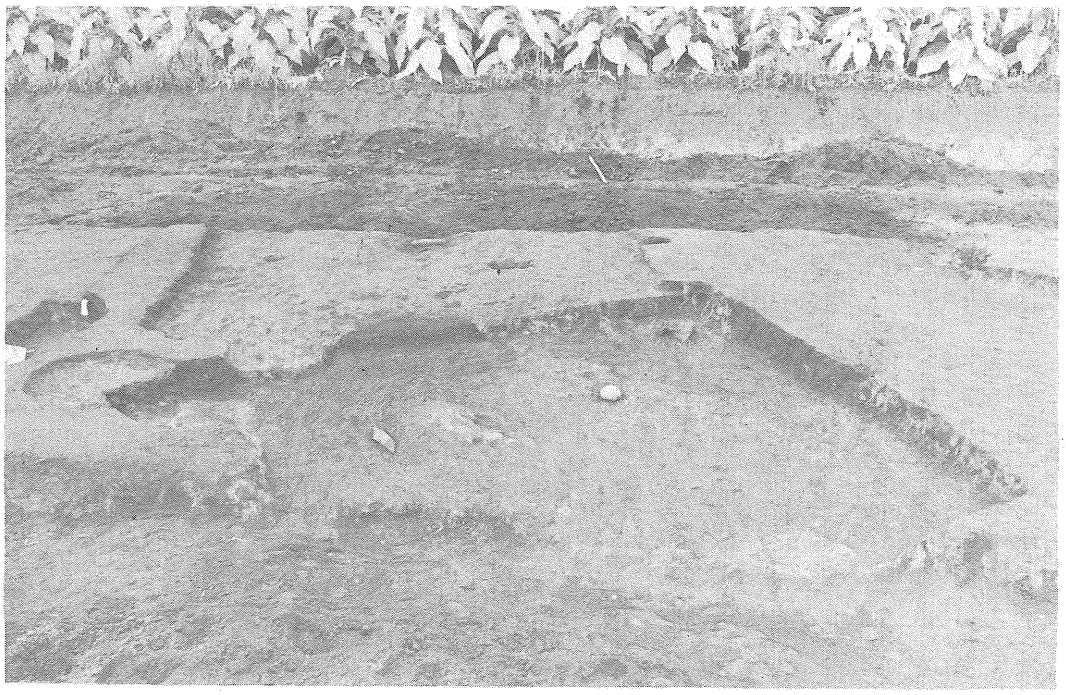


A区9号住居跡



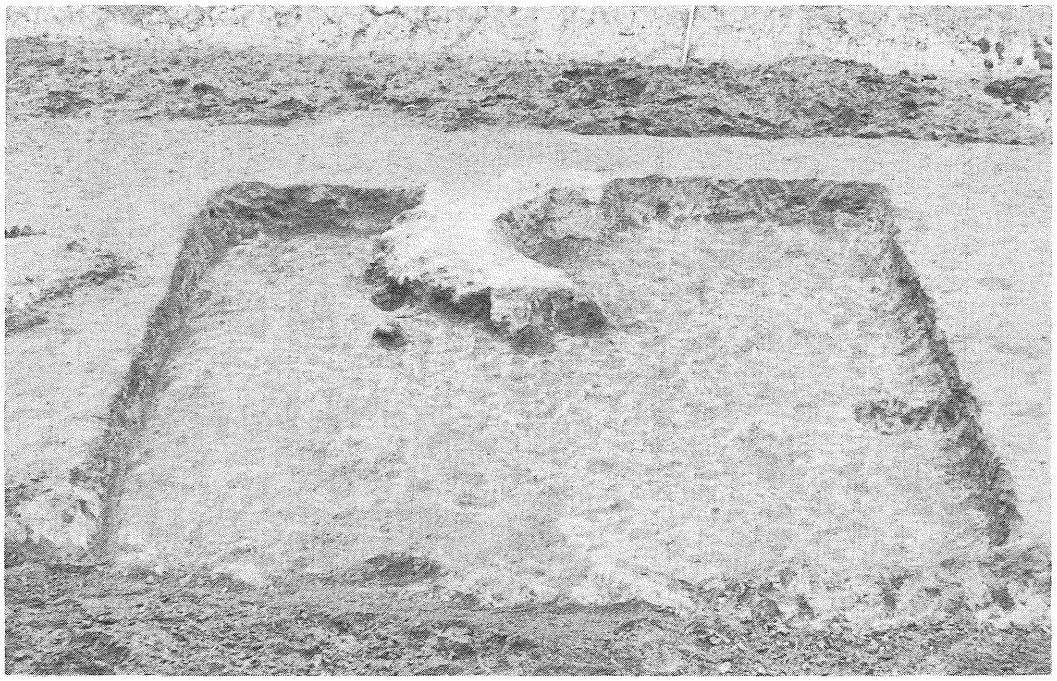
A区10号住居跡

A区10号住居跡　炉



A区11号住居跡

A区12号住居跡



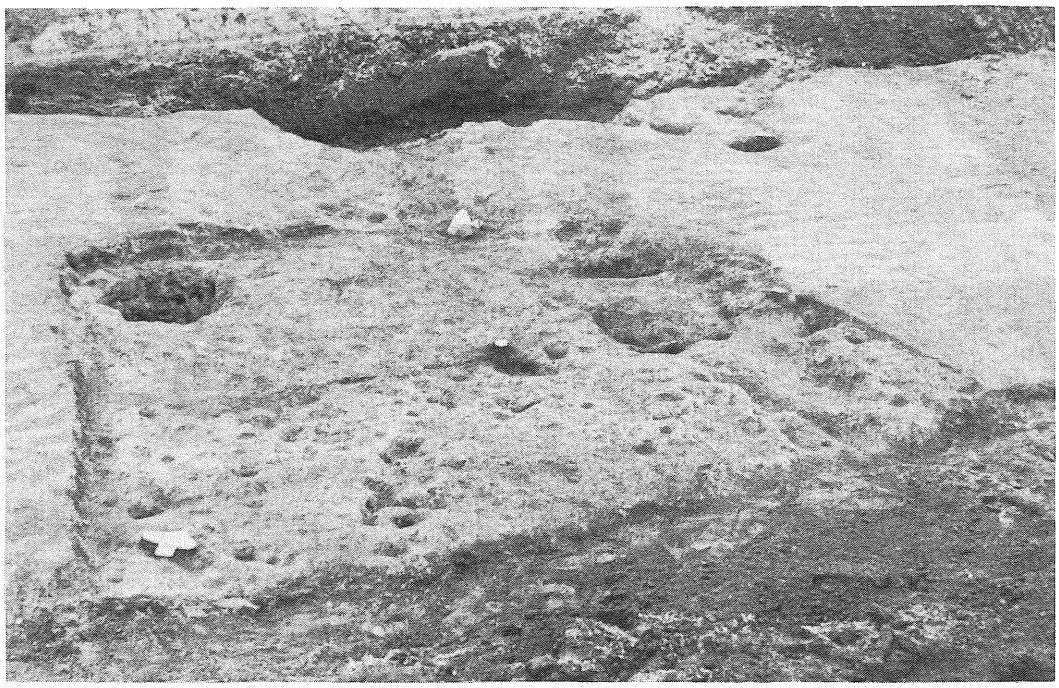
A区13号住居跡

B区2号住居跡

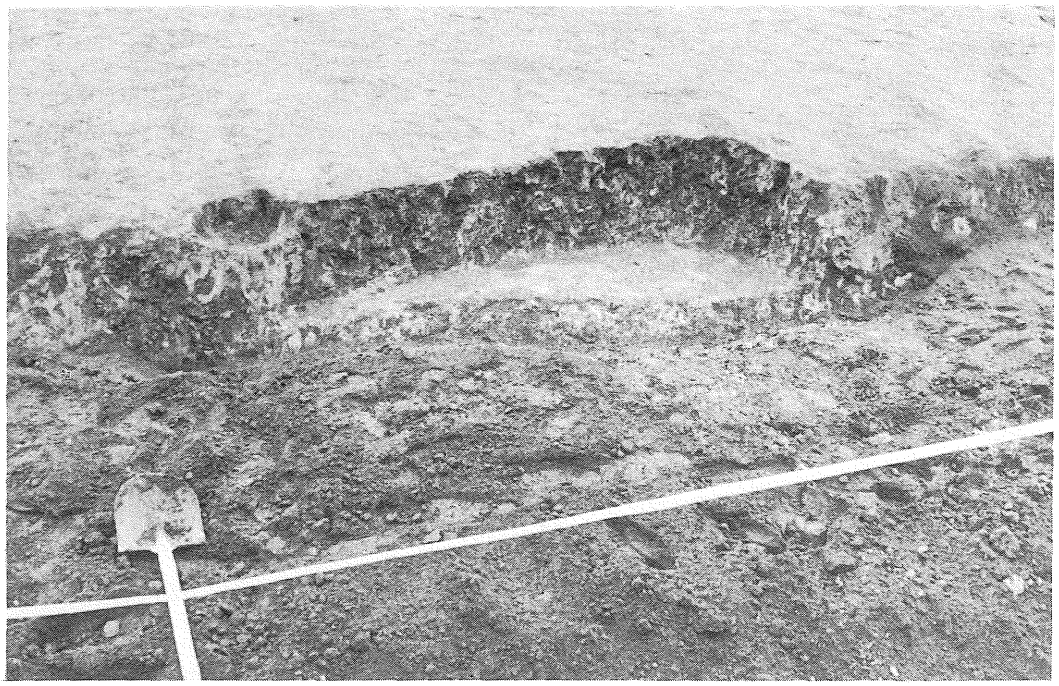
B区3号住居跡

B区5号住居跡

B区7号住居跡

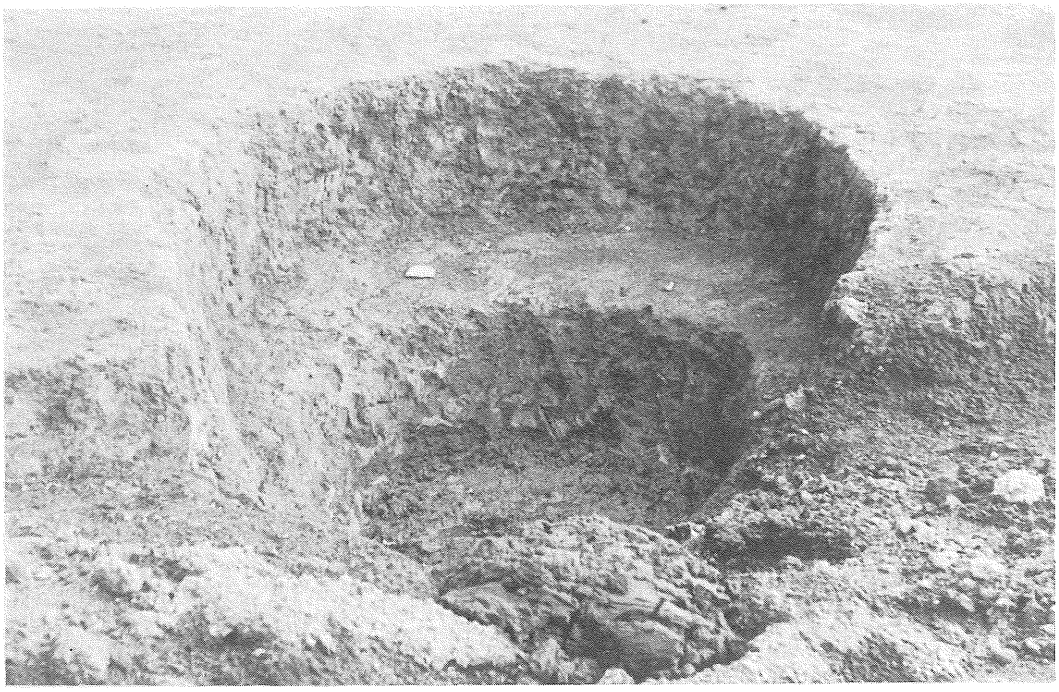


B区4号住居跡



B区5号住居跡

B区6号住居跡



B区7号住居跡

B区8号住居跡

B区9号住居跡

B区9号住居跡出土遺物

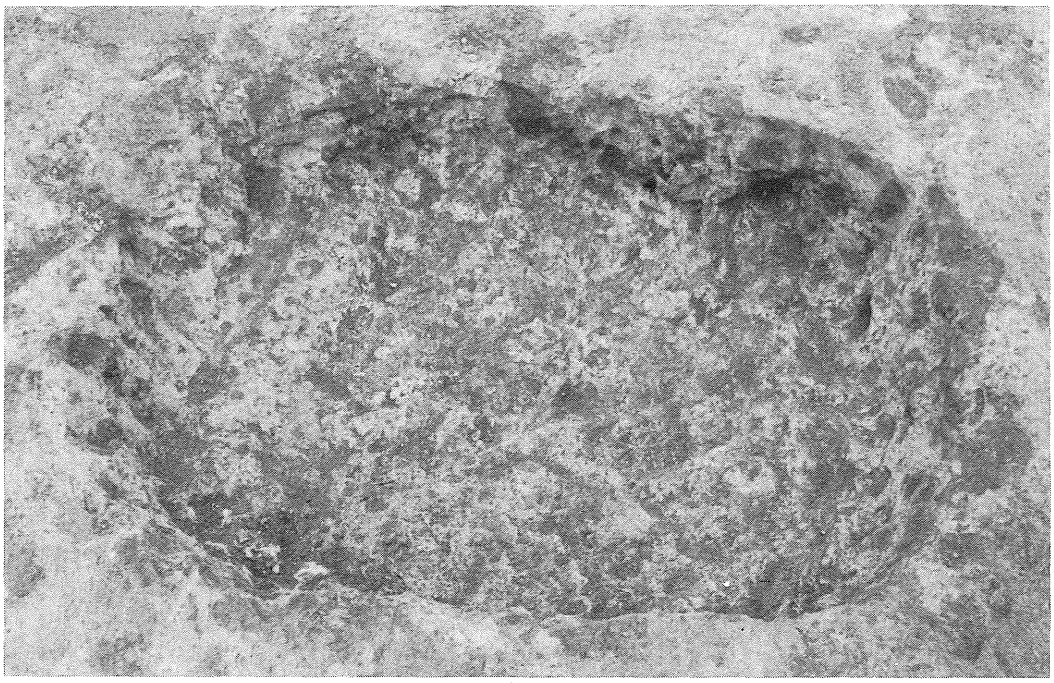
A区土壙群

A区1号土壙

A区2号土壙

A区土壙群

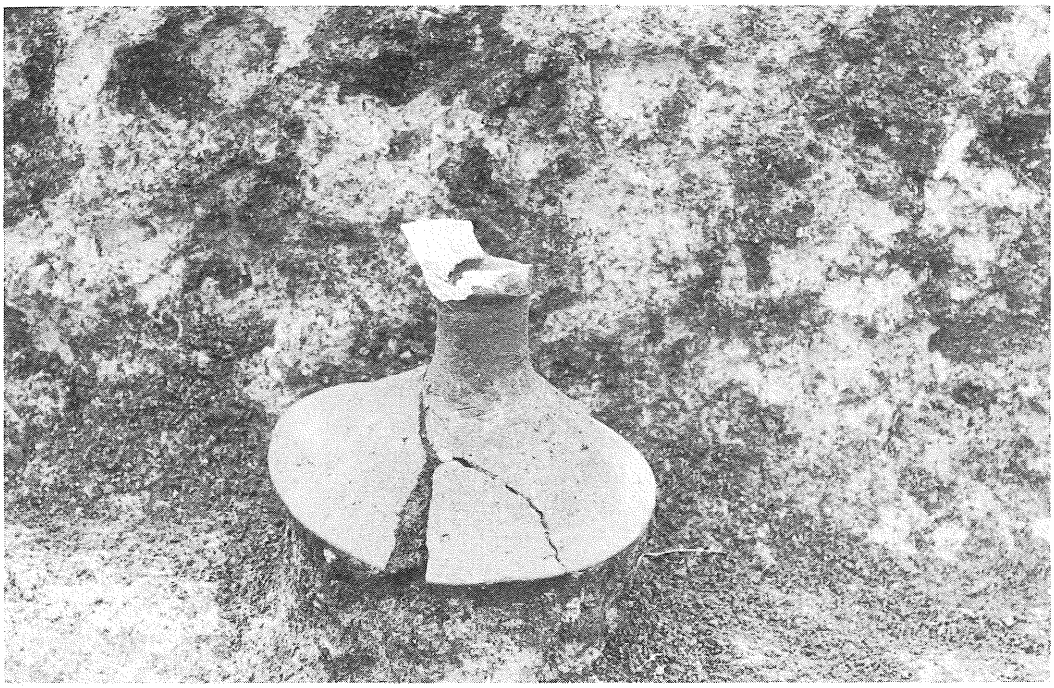
A区6号土壙



B区1号土壙

B区2号井戸

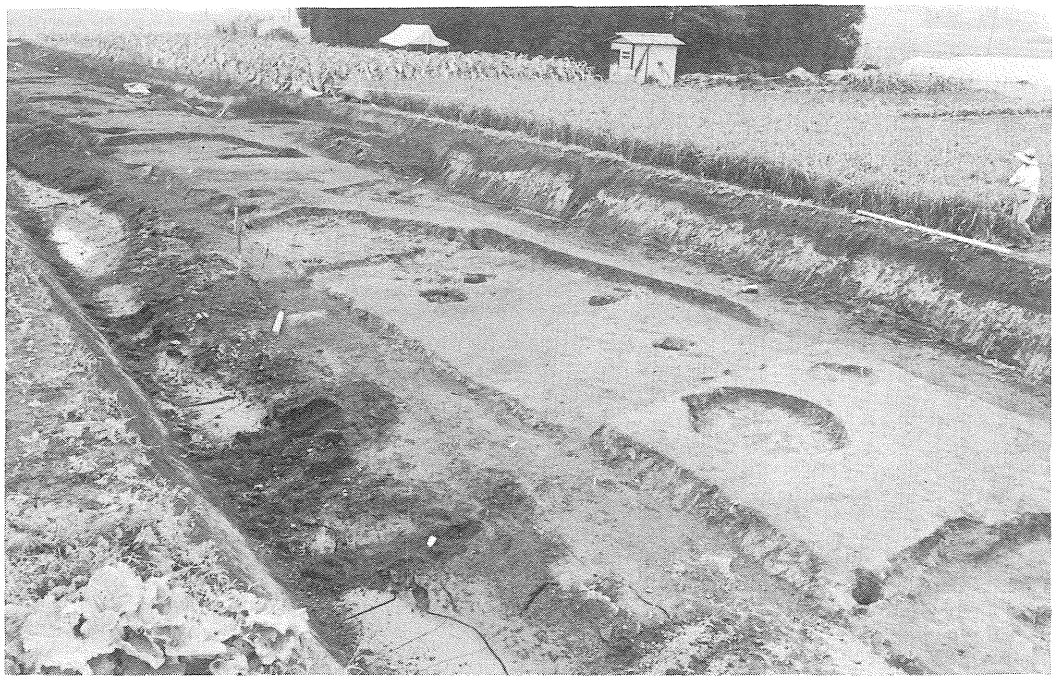
出土遺物



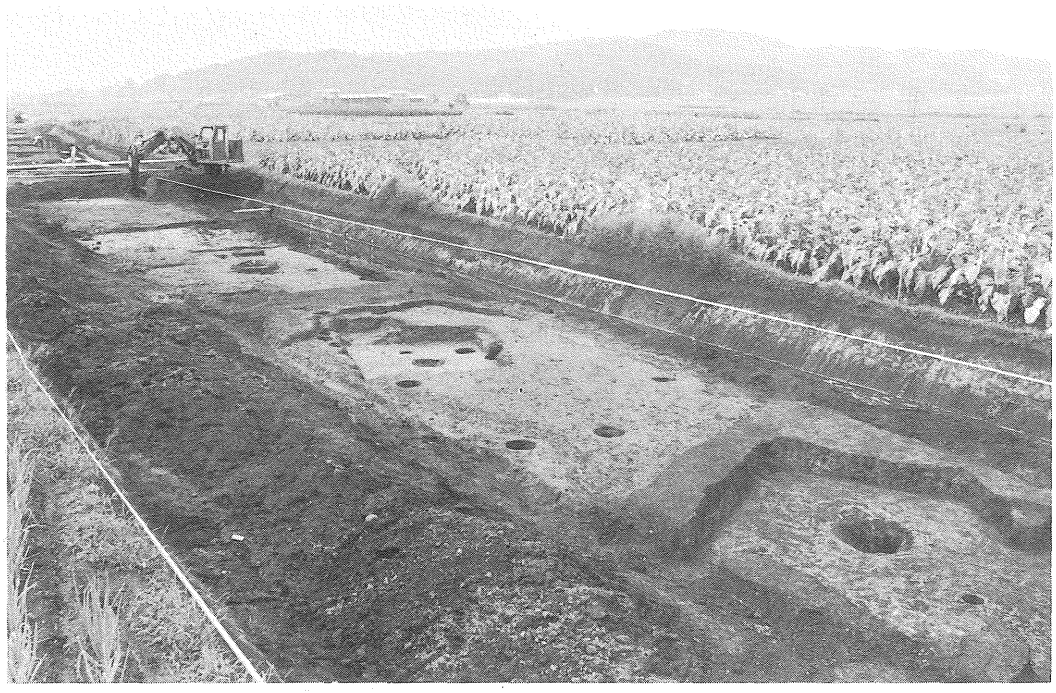
出土遺物

出土遺物

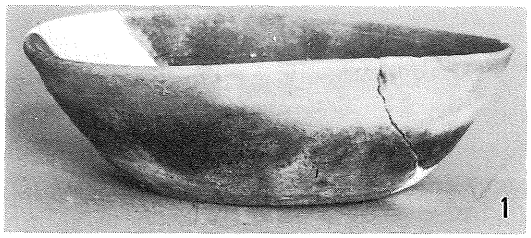
遺物出土状況

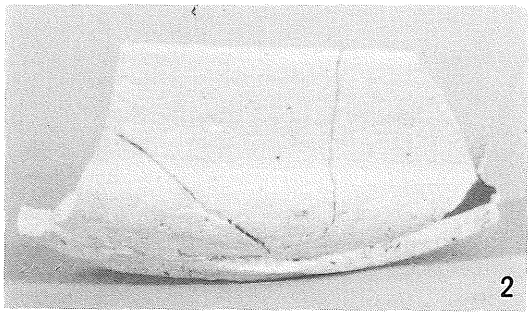


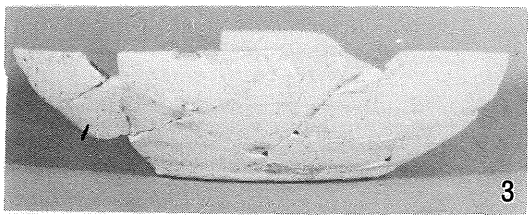
A区全景

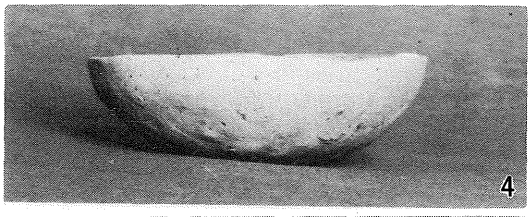


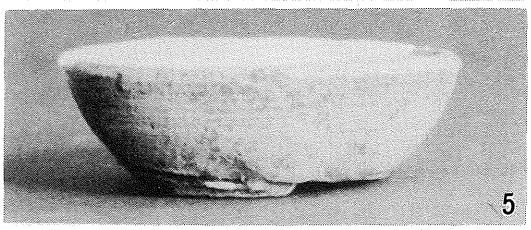
遺跡東側

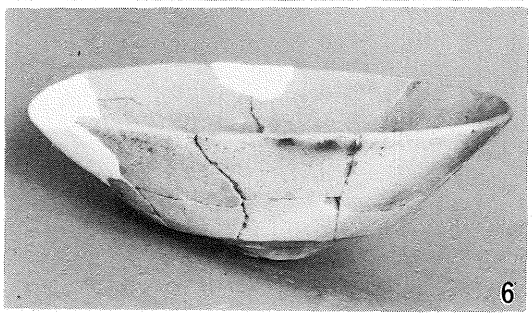

1


2

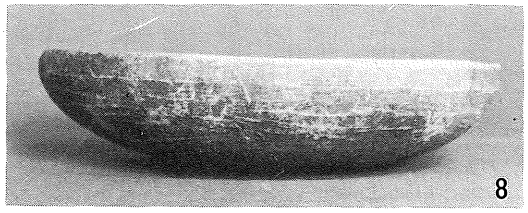

3

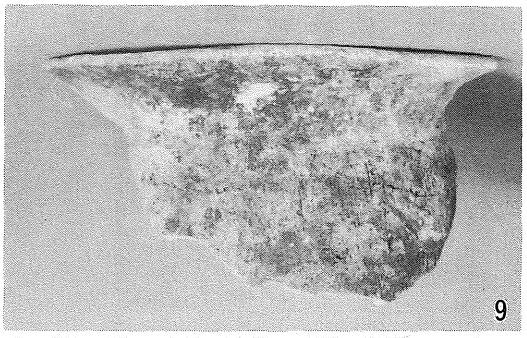

4

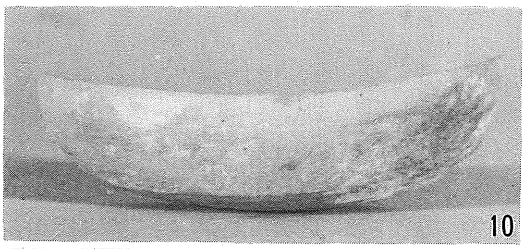

5

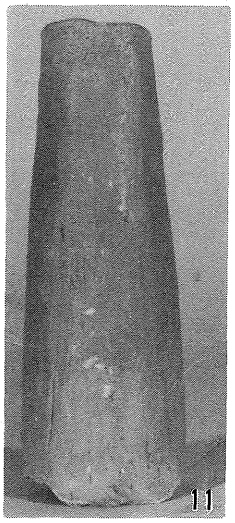

6

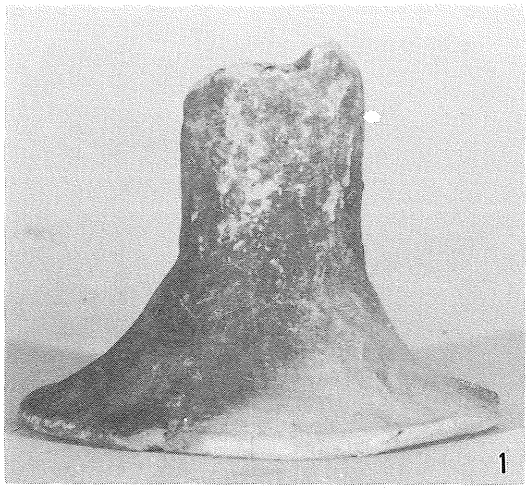
7

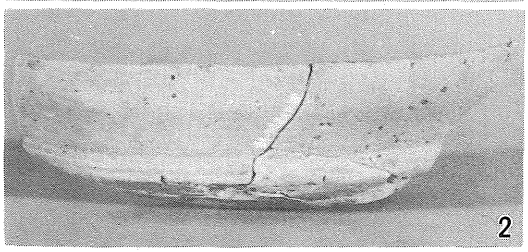

8

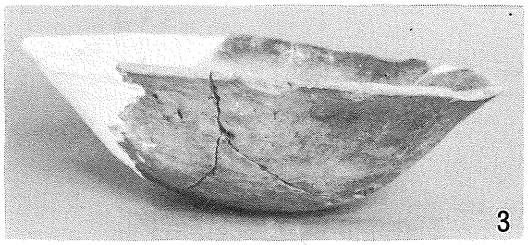

9

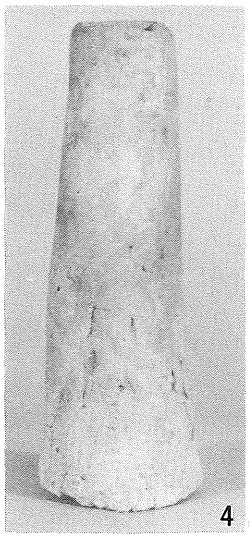

10

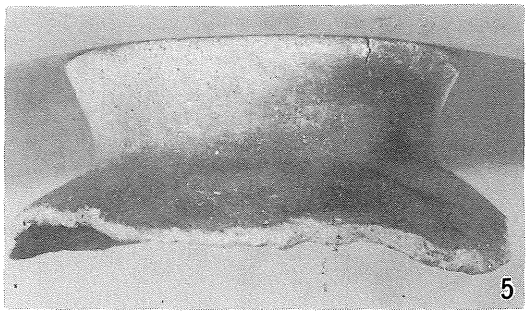

11

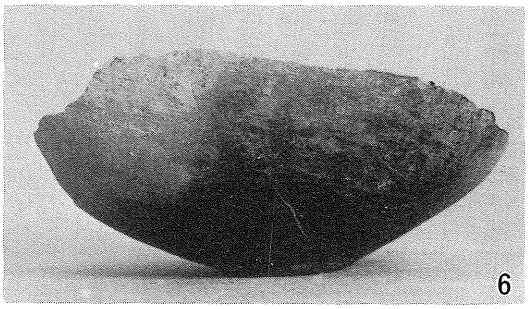

1


2


3

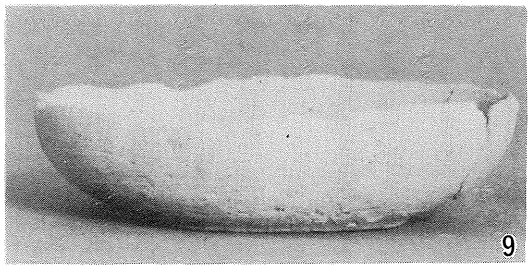

4

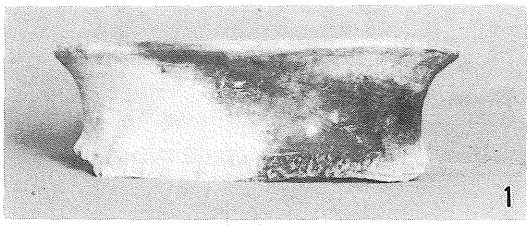

5

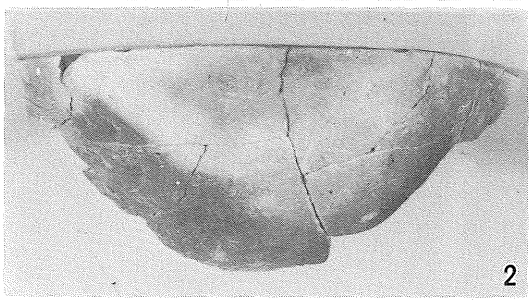

6

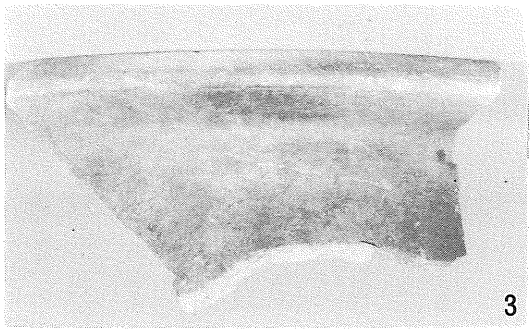
7

8


9

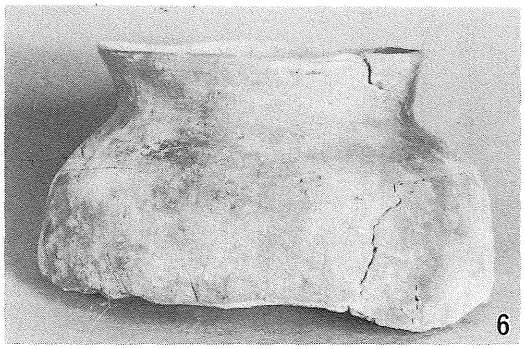

1

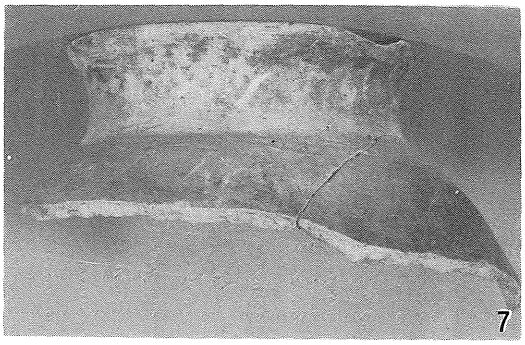

2

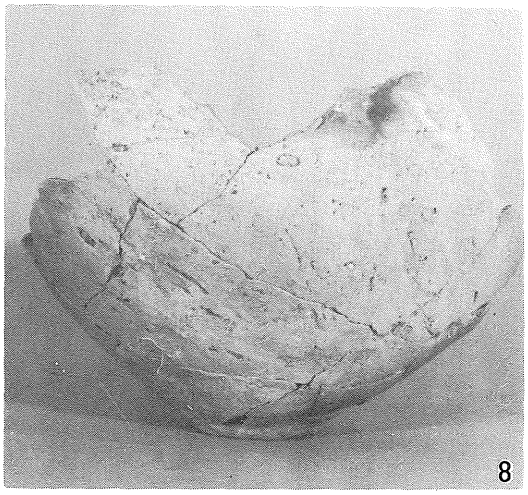

3

4

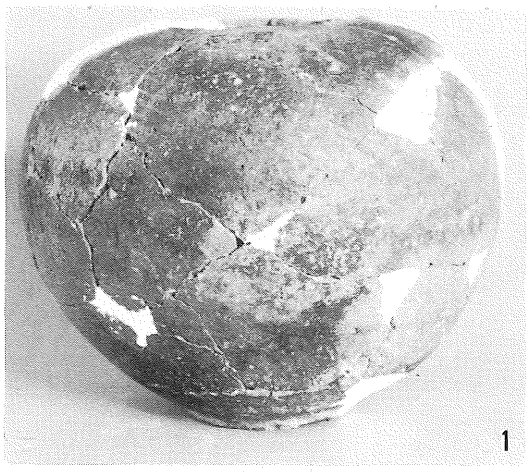
5


6

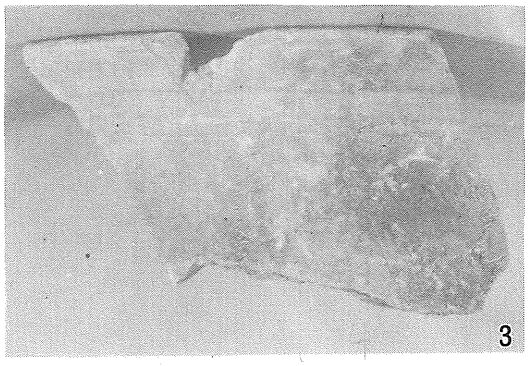

7

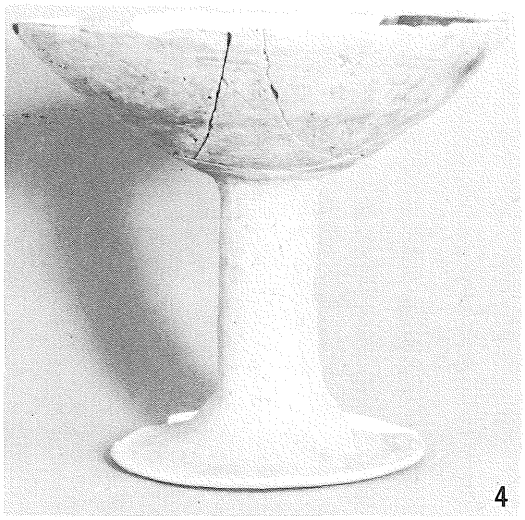

8

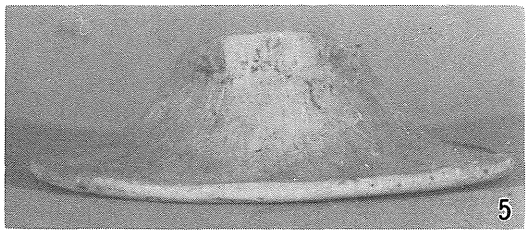
9

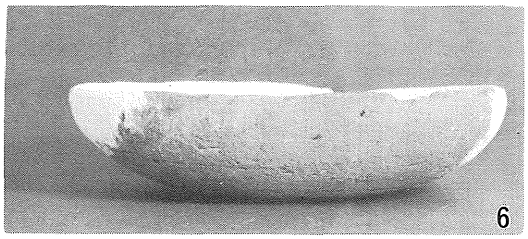

1

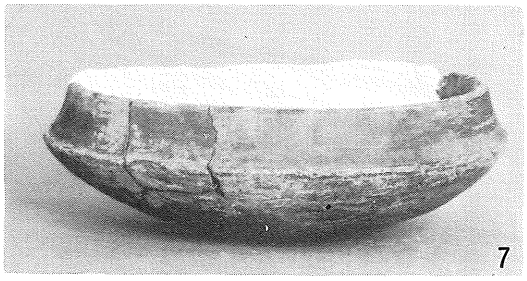
2


3


4

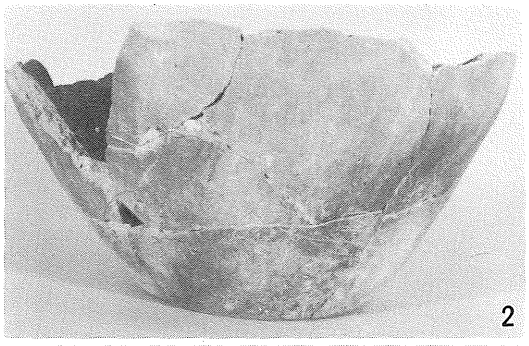

5


6


7

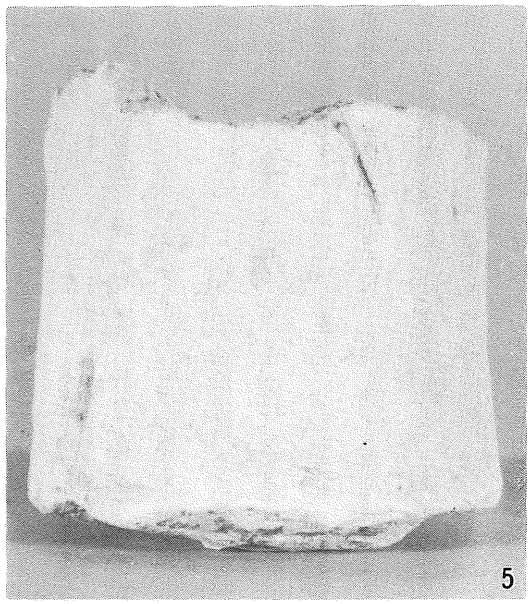
8

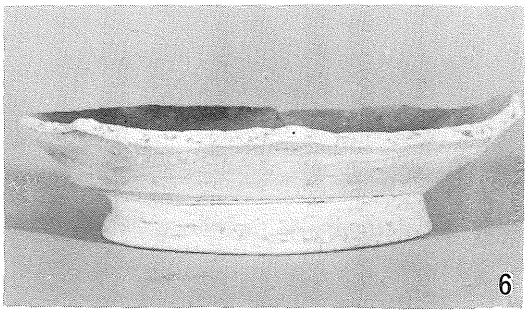
1

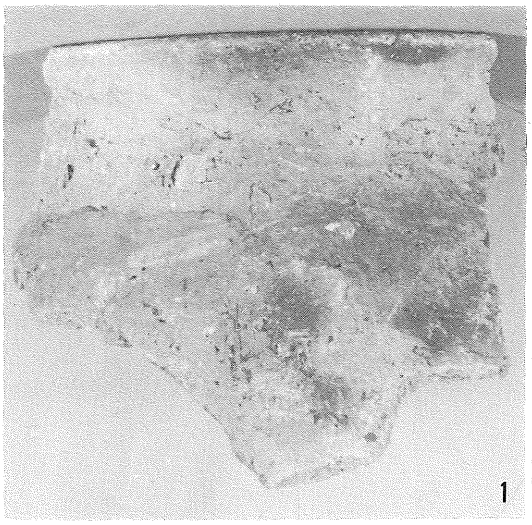

2

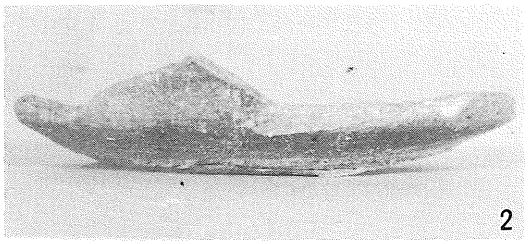
3

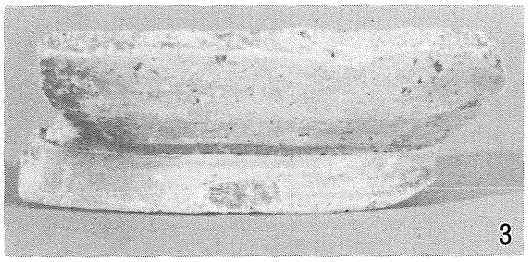
4

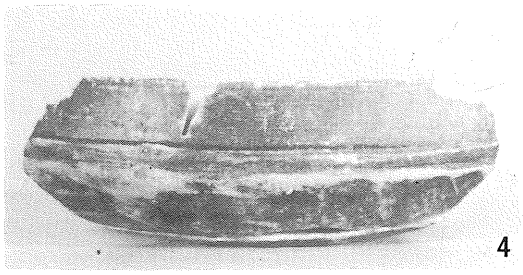

5

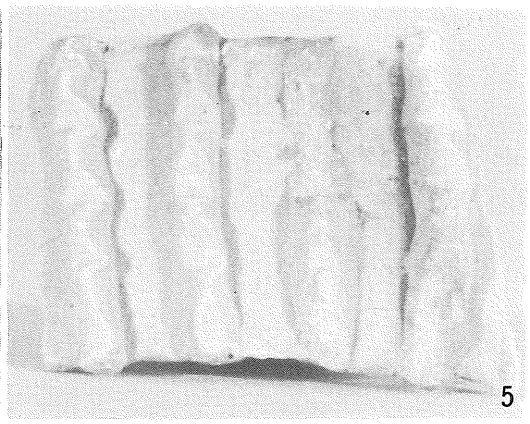

6

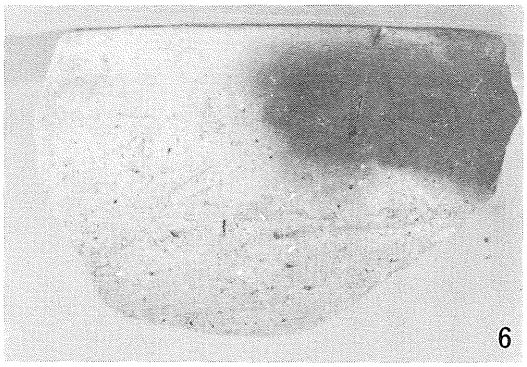

1

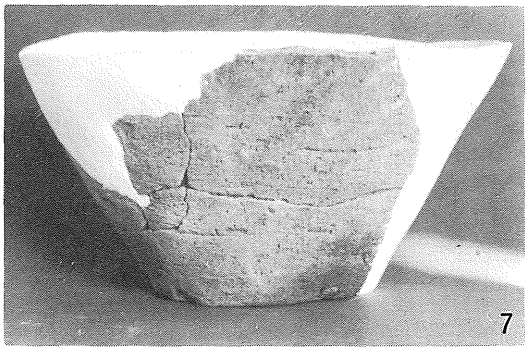

2


3

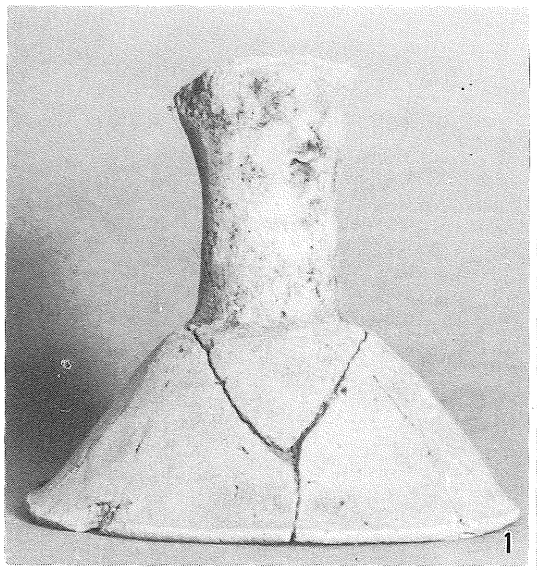

4

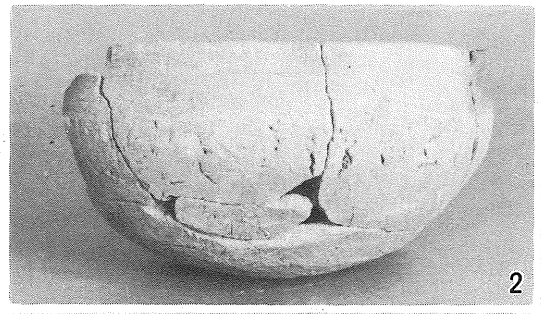

5

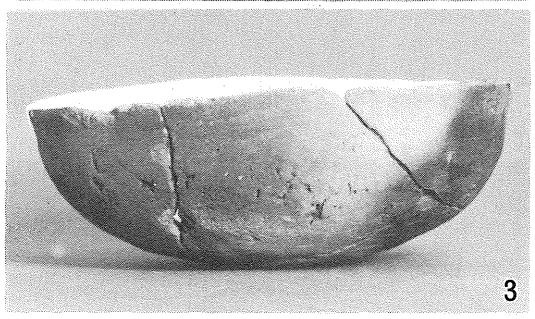

6

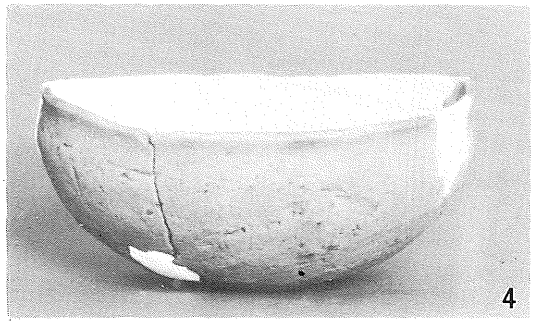

7

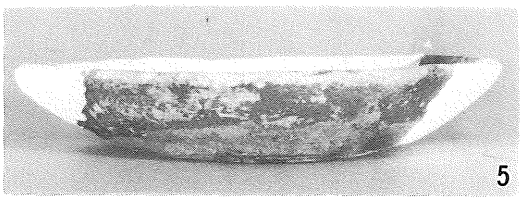
8

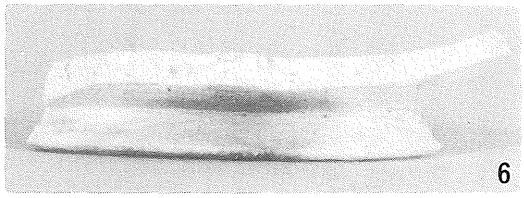

1

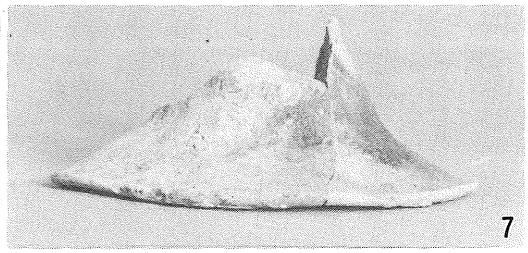

2

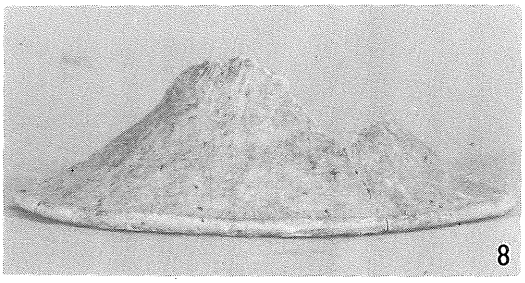

3

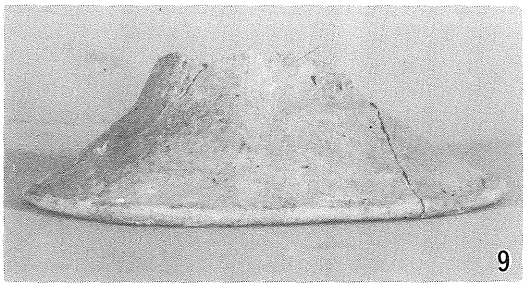

4


5

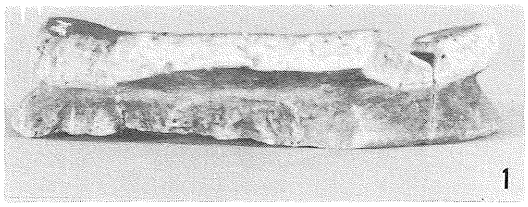

6

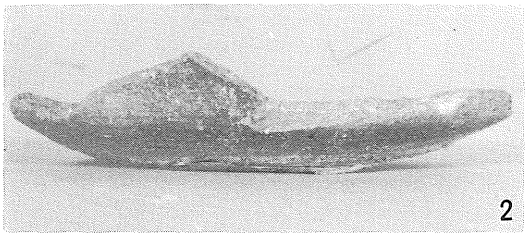

7

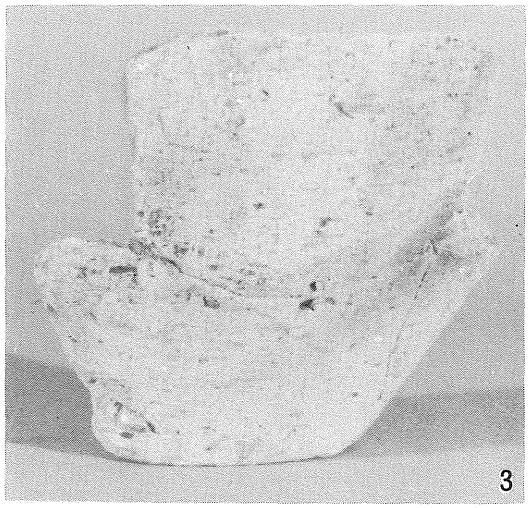

8

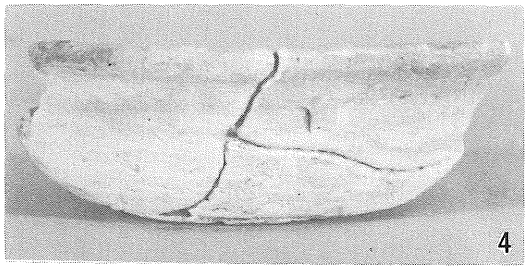

9

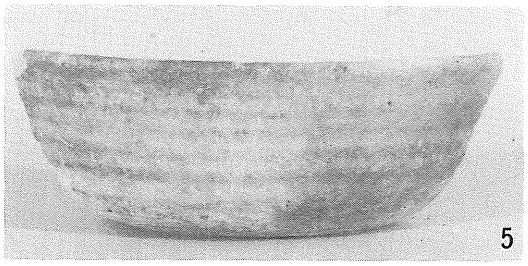
10

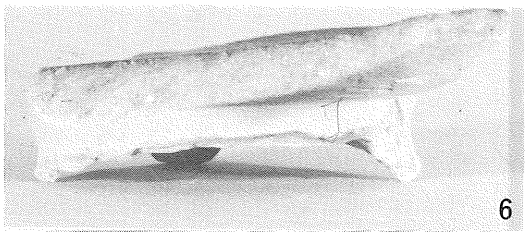

1

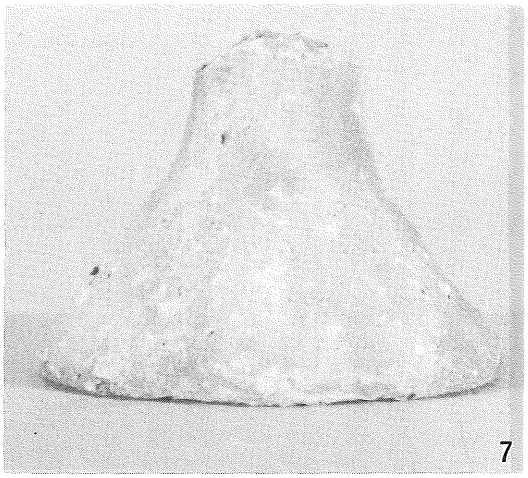

2


3


4


5


6


7

8

9

長　堤　遺　跡

（栃木県埋蔵文化財報告書第22集）

発　行　昭和53年　3　月

編集者　栃木県教育委員会事務局文化課

発行者　栃木県教育委員会

印刷所　下野印刷株式会社